ひ樓下樓上相連り天使常に往來す、其廣大なるを算數の及ぶ所にあらず。其嚴飾莊麗人間の語を以て形樣すべからず。基督曰く神工なるが故に都て此の如しと。是れ第三日の工事なり。此室左右に臺座あり七寶を以て造らる。予彼に問ふて是れ何人の在すべき所なるや、父と爾と座し給ふ所なりやと言ひければ、彼微笑して門外を指向す予身を轉じて門外を望むに見よ一人あり、身に禮服を着け頭に冠を戴き足に道履を穿ち頭上足下粲として光を放つ、鞘に置かれたる劍は彼の左手に垂れたり、帙に納められたる經典は彼の右腋に挾めり、彼れ入り來る時門扉自ら開け萬軍歡呼の聲中を徐歩して安靜として右方の臺座に就く。又一人あり、門外に立つ。予之を望み見るに右手善惡樹の枝を携へ左手生死の陰符を持し兩腕共に智慧の蛇を纏ひ全身貪慾の焔に包まれ其色青黑劔牙丹唇嫉怨の目角に電光迸れり。此人入り來る時も亦門扉自ら開け基督に向へられて步調堂々左右に設けられたる臺座に就く。予之を見て怪み基督に問ふて曰く、我聞く善惡樹の果を食ふもの生死の街に迷ふものは此新殿に入るを許されしと。此人入り來る時門自ら開け主に導かれて此至上座に座す、是れ誰人なるやと。基督答へて曰く是れ先に來つて右方に座する者と兄弟なりと。基督斯く言へる時視よ彼の手に持てる善惡樹は忽ち生命の菓を結び生死の陰符は聖靈の惠慰となり、腕に約するもの蛇は神の異能となり貪慾の焔は神の榮光となり嫉怨の火は神の愛水となり青黑の色は勝利者の尊貴を表はし劔牙丹唇渾て信仰敬虔醜美の相を示し醜狀變じて溢美の波を漂はし二人合して一體となる。斯の如くにして三日の工全く畢はれり。予基督に問ふて曰く是即ち爾の安息なりやと。其時基督余に向つて聖氣を噓きげれば殿堂もなく基督もなく江上の青山舊に依り變せず南村北村雨一犂新婦は姑に餉し爺は兒に哺するを見る。

△予は鹵莽斯の如きの言をなすを憚らず、如何となれば古來宗敎家の理想は到處寓意を以て之を說明してゐる。『モルモン』宗の開祖『ジョセフスミス』が能く象形文字を解讀したるも畢竟彼は神代思想の那邊にありしかを契通し得たのである。吾人は一佛體、一神像を見て直に其神子は何であるかゞ分る。種子とは因本或は性格の謂にして人の實印のやうのものである。基督が『シモン』を盤石と呼び『ヨハネ』を雷兒と名づけたる等即ち是れである。其外舊約に於ても『アブラム』に『アブラハム』即ち父の稱を與へられ『ヤコブ』に『イスラエル』即ち勝利者の號と冠せられ或は摩西『ソロモン』等大抵皆名詮にして山川、草木、湖海、蟲魚、土地、人物、に至る迄其名は其實に稱ひ其實は其名に應じ若し一一其原意を研究せば『バイブル』も一層趣味の殖へること疑ひない。佛書は概ね皆意譯されてある故に吾人に便利を與ふることが多い。其祭壇、禮式及び伽藍の構造、輪塔の組織、一一其敎旨を表現してゐる。一見蘇塔波永離三惡道の功德ありといふものは此所である。然るに眞言天台等の口傳法なるものは人をして永く鬼窟に座せしめ寧ろ三惡道に陷るゝのである。我が十字架敎に來て大死一番すれば三七日の斷食を用ひず百日の水行を假らず直に本尊に逢ふて親受することが出來る。『ジョセフスミス』も兎に角一宗の開祖と仰がるゝまでには幾度か懷疑の深淵に沈み其底を窮めて再び出で來りたる。

跡が其傳に見えて居る。予が友人久しく北京に在て諸名家の信任を得たるものがある。曾て余に示して曰く、支那人は辭令に巧にして容易に其眞相を觀破し難い故に最初は彼等がいふが儘に任せ彼等が爲すが儘に隨ひ彼等に呑まれ去り食はれ去りて始めて彼等の臆底を測量せば、彼等の術數が那邊に往いて盡くるか何處に到つて窮るか智の深淺情の厚薄分明に得らるべし、已に之を得たる以上は鼻端の索我が手にありと。宗教に於ても斯の如く吾人は紅海に沈まざれば金犢の鼻孔を穿つこと能はず、神に殺されざれば基督を役することは出來ぬのである。故に『ノア』は唯七人の家族を救ひしのみにして其外何も得る所なく。『ヨナ』は海上に難に逢ふて魚腹に葬られ能く『ニネベ』王をして麻を衣灰を被らしめ小蟲の瓢蔓を食ふを見て神の意を知り、摩西は戒碑を擲碎して天堂の礎石を移し法空又心空ならしめたる所、基督が『エルサレム』の神殿を崩壞したると毫も異なる所はない。されば吾人は彼等と同條にして死し同條にして生き箇の何をか見たる、山上の摩西と山下の亞倫と兄弟なるを見たり、蛇と銅と一體なるを見たり、戒碑を碎きたると犢牛を煮たると是れ別なるか同なるか、亞倫の舌根を拔きたると『エホバ』の咒詛を止めたると其間逕庭ありや、也たなきや、之を量り得たるものは摩西と同生同死底の人である。彼れ生れて三月『ナイル』河に投ぜられて魔宮に入り其學術財寶を奪ひ加之魔族を斃殺して遺孽なからしめた。斯くて彼は談笑中鴆毒を嚥くに慣れて、更に神殿に身を忍ぶこと四十年、悉く其重器を掠め盡したのである。然れども神は埃及王に鑑みて更に油斷がない。彼が之を携へて隍塹を踰え去るを許されず終に城中迷路の間に困斃せしめた。『ヨシユア』殘黨を將ゐて遁れ出でたりと雖も未だ國家を成さず其遺志を繼ぎたる『ダビデ』は獅口に身を投じて終に『サウル』の宮殿に出で其王冠を奪ひ去れり。

△彼は摩西に比すれば愈々巧みである。孫子に曰く、善く戰ふものは先づ敵の愛する所を奪ふと彼は先づ『サウル』の愛子『ヨナタン』と愛女『ミカル』とを奪ひ『サウル』の密計を探り『容易に其財物を竊み取るを得た。夫れ奪らんと欲するものは先づ之を人に與ふ『エホバ』は『アダム』の生命を奪はんと欲して之に『イヴ』を與へ、『ヤコブ』は埃及王の秘法を奪はんと欲して之に『ヨセフ』を與へ、『ダビデ』は『ウリヤ』の妻を奪はんと欲して之に酒を飲ましめ、『ヨシユヤ』は『エリコ』を奪はんと欲して先づ魔女に通じ、神は人を奪はんと欲して愛子基督を犧牲にし、基督は『サタン』の權を奪はんと欲して之に己れの血肉を饗した。盜賊の王基督の術は支那印度にても古來聖賢の間に行はれて居る。故に郁離子には堯舜を大盜なりとし、列子には濟務即竊盜なるを說き、佛教の所謂理趣釋なるものは世間一切の惡德惡業を以て向上の一路を窮め禪宗の人は釋迦を白晝の賊と呼で居る。

去れば小賊は罪あり大盜は咎なし吾人は蜂須賀小六を去て信長に就くと雖も信長も亦盜賊なることを知らざるべからず。唯後者の爲す所其名正しく其術巧みなるによりて其邊界を見ず漫りに前者を罪するのである。故に小賊二人は刑せられ大盜『バラバ』は免されて居る。『バラバ』の盜賊たるを知て

基督の盜賊たるを知らざるものは未だ聖書を能せざるものである。然れども中人以下には以て上を語るべからず。聖書は夫の人の子を賊はんことを恐れて其裏衣を圖にせしめ唯外衣のみ四分して之を四方の人に與へて居る。故に神の選みによりて落籤したる宰司長にあらざれば至聖所の秘密を知ることは出來ぬのである。孔子或時武城に往いて弦歌の聲を聞き莞爾として笑て曰く雞を割くに焉ぞ牛刀を用ゐんと。子游對へて昔者偃諸れを夫子に聞く曰く君子道を學べば則ち人を愛し小人道を學べば則ち使ひ易しと子游すら未だ通せざること斯くの如し況んや其他をや、之を無理に悟らせやうとすれば却て風なきに浪を起さしむ。故に孔子は同行者二三の者を顧みて偃が言ふ所是である。余は唯戲れに前きの言を發したのであると曰はれた。是れ孔子の平生人を敎ゆる所以の法に於て最も親切なる所である。又曾て顏淵仁を問ひたる所に己れを殺して仁に復ると言はず己れに克ちて仁に復ると對へしは我が十字架敎より見て如何にも惜むべき所今少しと後ろより推したい心地がする。然れども治國平天下の道に於ては務めて衆人と誤らせぬやうするが第一である。蓋し顏淵は是れ良馬の鞭影を見て走るもの且つ彼が孔子に答へたる言に於て充分遺憾なきを覘ふに足る。唯孔子は顏淵たらざるもの〻爲めに一言一動汎く其責任を負ひ給ふこと此の如し。夫れ文武周公此三氏は自然の秘を發いて之を時務に應用し所謂開物成務の功を濟したるもの、而して其易に於て始終利を以て一貫し體用本末の一字を離れざるより之を觀れば夫の所謂聰明頴智神武にして殺さるゝものも利である。寂然として動かず遂に天下の故に通ずるものも利である。利に大小乘の別あり霸道は小乘にして王道は大乘である又廣狹偏圓の別ありて各固執する所がある。楊子は自利を執り、墨子は他利を執り子莫は其中を執り孟子は之を一掃して其源に歸らんと欲して未だ能はず、彼尙理窟を出でざるものである。孔子は可もなく不可もなく大に入り小に入り偏に出で圓に出で廣狹自在、權實極りなし。然れども彼時を救ふに急なるが爲に未だ曾て容易に利をいはず唯我は默に與せんの一語思はず家醜を擧げて吾人に些の消息を泄しゝのみ。

△見師に等しうて師德の半ばを滅ず見師に過ぎて始めて道敎ゆるに堪えたりとは移して孔子の敎育法を贊すべし。孔子は惜まず又隱さず曾て口授密傳のあるなし、肝膽常に人に向て傾け珍財寶器之を貧家の前に抛擲して他の拾ふに任せて居る。是れ所謂公開の秘密にして其人出で來るにあらざれば見て見えず聞て聞えず食うて其味を知らず孔子は寧ろ世人の寐慾にして盜心なきを悲で居る。夫れ基督は此盜賊の術を吾人に敎んが爲めに世に出でたのである。彼れ曾て『エルサレム』の神殿に入り殿內に在て貿易する者共を逐ひ出し兌錢者の案及び鴿を鬻ぐ者の椅子を倒し且つ之に謂て曰く我が室は祈禱の室と稱せよと錄せるにあらずや、汝等は還て之を盜賊の巢となすと、白頭黑黑頭白石川五右衛門の上に又石川五右衛門あり、予をして若し當時にあらば將に彼れに向つて言はんとす。誰れか汝を立てゝ我が有司となしゝや、汝の先祖『ダビデ』が宰司『アビメレク』に迫て宰司の外食ふべからざる供餅を食ひし如く汝も亦我等を逐ひ出して祭壇を掠めんとするかと。果然彼れは『ガリラヤ』に遁れ

て捲土重來昔日摩西が杖一本にして埃及に入りし時と異り彼れは驢馬に跨り民衆歡呼『ホザナ』よと讃へられ慈地神殿を踏飜して更に凱歌の勢を擧げた。方に是れ蔡州城を打破して吳元濟を殺却し四海五湖龍の世界天下唯一人を賀するの時にして、彼の盲人『サムソン』が轉じたる磨盤は今空中を走つて居る。誰れか能く之を防ぐ者ぞ、夫れ『ペリシテ』人力士『サムソン』を捕へ其眼を快り去て更に銅鏈を以て之を繫ぎ「ガザ」の獄中に在て粉を挽かしむ。茲に『ペリシテ』の候伯子女と俱に集りて其神『グゴン』に大祭を獻じ且つ囚人『サムソン』に戲玩を作さしめ見て以て樂まんと欲す。衆『サムソン』をして二柱の間に立たしむ『サムソン』即ち右手一柱を掣き左手一柱を掣き願くは『ペリシテ』人と偕に亡びんと言ひて力を盡して躬を屈せしかば其屋即ち圮れ諸候伯と其中に會せる數千人を一時に壓殺し『サムソン』も亦同じく死せり。『サムソン』曾て生時敵を殺せし數に比すれば此時を以て尤も衆しとなせりと云ふ。『サムソン』の兄弟及び父の全家と皆與に『ガザ』に下り其屍を取り墳墓の地へ携へ上りて之を葬れり。吾人も亦基督の屍を取りて之を葬れり。而して彼れ已に墓中の人にならざるを知る。然らば則ち彼は今何處にある。知らざるものは之を天邊の月に問へ。

△然れども世には唯天上の月を貪り見て兎角掌中の球を失却するものが多い。『ヨナ』も亦曾て海中に入り身命を賭して探り得たる螭龍頷下の珠を失却せんとした。彼れ『ニネベ』の邑を出で其東隅に座し邑中將に何の徵あらんとするかを見居たり。其時神一株の瓢蔓を發生せしめ綠陰『ヨナ』の頭上を蔽ひ炎熱の苦を脫せしむ、神又一蟲を遣はし其の蔓を嚙み一夜にして之れを枯らさしむ。日出づる時、神又猛烈なる東風を備へて『ヨナ』の頭身を曝らすを致す。『ヨナ』困憊中心に死を求めて曰く、我れ此の炎暑を忍ぶは寧ろ死するを以て勝れりとなすと。其の時神『ヨナ』に謂ひて曰く蓋し汝は我が烈怒を息め天火を降して『ニネベ』の人衆を焚殺せざるを見て悅ばず、然れども此の大邑の中には十二萬餘の左右を辨せざる愚民と、且つ多くの牲畜あり。見よ汝は勞せず培はず唯此の一夜にして得たる一株の瓢蔓をすら之れを顧み惜むにあらずやと。夫れ神は恒忍矜恤大施慈悲、將に此の世に遣はさんとする其の一子基督を記蒲して曰く、彼れ呼號せず其の聲を揚げず其の聲衢間に聞えざらしめ□に傷める葦をも折らず燼餘の炷をも熄すことなく彼れ眞理を以てして義勦を地に樹つる迄には其れ衰えず又膽を喪はざるべし、我は諸天を作りて之れを舒るもの地を闢きて凡べて其上に產するものに氣を賦し及び地を履むの人に靈を賦するものなりと。夫れ天を造りし神は地を造らざりしか、人に靈を賦せし神は獸畜に氣を賦せざりしか、生命樹を植えし神は善惡樹を培かはざりしか、天使を遣はせし神は惡魔を下さゞりしか、能造者『エホバ』は全智全能にして受造物人類は不完全なるか、汝等先づ眼中の梁を除き去れ、眼淨ければ則ち全身淨し、心淨ければ則ち宇宙全く淨くなる。昔者佉羅提耶といふ山に仙人があつた。此の人驢と馬と相合して其の間に產れたるものなりといふ。彼れ山上にありて常に天體を眺め日月星宿の運行を研究して之れに一々佛名を附した。日藏菩薩月藏菩薩、虛空藏菩

薩等も或は此の時より甫めて稱へ出されたるものとの說である。此の仙人復た以爲らく天と地とは元同一體にして天德は地に藏し地德は天に由りて現はる此の二つは常に相離れざるものなりと、去れば此仙人は天を叩いて地を出し地を窮めて天を悟り、地藏虛空藏元不二なることを發明したのである。佛敎にて地藏菩薩と稱するは即ち此の佉提耶山の仙人にして、天文學者を地神に配するとは印度人の妙想亦感ずべきである。支那人が地天を泰となし天地を否としたるも、是れ亦一段の奇想といはねばならぬ。彖傳に泰は小往き大來る吉にてし亨るとは是れ天地交て萬物通ず上下交て其の志同じと云うてある。蓋し易なるものは筮子定木を容れず、三人龜を證して齟齬となるも亦妨げず、徧正回互其の數を錯綜して其の變に通じ仰では象を天に觀、俯しては法を地に觀る、鳥獸の文と地の宜しきとに考へ之を身に取り之を物に取り神明の德萬物の情天地を曲成して遺す所なく、上交諂はず下交瀆れず往を彰はし來を察す、君子は機を見て作す。暮れには天紅を見て晴るゝを知り、朝には晦雲を望で風雨を繁す。枝柔かに葉蒲す時には夏期近きに在り。鶉肉を得て貪り食ふ佛敎家は方に神怒に觸れ『マナ』の粘淡に厭きたる保羅の徒は今や金犢を鑄つゝあり鶉肉も竭き『マナ』も絕え乳酪を流すの『バレスタイン』否新旧本は今や基督晩餐の時なり。

△基督逾越の節筵を備へしめ其十二門徒と偕に席座す。其時基督衣を脫して手巾を取り之を腰に束ね水を盤に盛り一一門徒の足を濯ひ腰に束ぬる手巾を以て之を拭く。頓て『シモン、ペテロ』に及びし時彼れ曰ひけるは爾我が足を濯ふか是れ斷じて爲すべからずと。基督彼れに答へたるは我汝の足を濯はざれば我れと汝と交渉なし今我が爲す所汝之を知らざるも後將に解得するの時節あらんと。『ペテル』果して基督の十字架に由て其意を得たり、夫れ十字架は上下相交るの道にして基督と俱に地下に葬らるゝものは神を見『ノア』と俱に水上に泛ぶものは唯虹を見る。虹を見るものは再び『バベル』の塔を建て、神を見るものは復た神殿を營むことなし、人々具足箇圓成蓋し神は吾人の殺僕たるを知ればなり。彖傳に曰く否は人にして人にあらず君子の貞に利あらずとは大往き小來る。則ち是れ天地交らず萬物通せず上下交らずして天下に邦なしと。基督曰く我れ汝の足を濯はざれば我れと汝と交渉なしと。夫れ神と交渉なきものは人にあらず已に人にあらざれば亦國家もなし、故に猶太は『ダビデ』逝いて後終に國家を成さず、基督は『パリサイ』宗『サドカイ』宗の人を指して人に非すとせり。予も亦今日吾人を神に非ず又神となること能はずといふ者を指して人にあらず國家なしといふを憚らざるのである。當時基督を褻瀆者と見しものは其品性に於ても其操行に於ても寧ろ今日の或者に比すれば遙に勝つて居る。故に今日の或者等もし予を目して不敬漢となさば、予も亦彼等を稱して偶像信者となさんのみ。それ斯の如く差別を見るものも、偶像信者である。神人一に歸すといふて、一を執るものも亦偶像信者である。唯能く眞理を行ふものゝみ即ち眞神を拜することが出來る。基督『ピラト』に答へて曰く、我れ眞理の爲めに來ると『ピラト』亦問ふて眞理とは何ぞやといひけれども、基督答へず、

予も亦之が爲に敢て胡蘆を畫かず、若し親切の解答を得んと欲せば來て人に問ふこと勿れ、答所は還て問所に在り、之を思ひ之を念ふて理盡き伎窮る所神將に之を通ぜんとす。是れ即ち十字架教である。孔子曰く書は言を盡さず言は意を盡さずと、然らば則ち聖人の意終に知るべからざるか、否故に孔子又曰く聖人象を立て以て意を盡し卦を設けて以て情僞を盡し辭を繫げて以て其言を盡し變通して以て利を盡し之を鼓し之を舞し以て神を盡す。乾坤は其れ易の緼耶と易の乾坤陰陽は以て『バイブル』の父子神人に配すべし。其象其卦其爻は以て『イスラエル』人の經過及び其遭遇に比すべし、皆言語以外に變通神動を見せて居る。其情僞を盡すに至ては實に隱微にして是れ亦一回十字架に懸らざる人の到底得て覘ふことの出來ぬ所である。例へば『エホバ』の言に我れ已に『ダビデ』を愛し『サウル』を憎めりとあれども何故に『サウル』を憎み『ダビデ』を愛せしか、彼等の情僞何に由て岐るゝかは、唯纔に『ダビデ』の裸體を以て彼此の家風を對照し前後を截斷して居る。『ダビデ』『シオン』の要害をトして始めて其居城を營み『エホバ』の匱を之に移さんとせしに『エホバ』喜ばず彼れ乃ち撰擇せる三萬人を集め『バアレ』と云ふ所より『エホバ』の匱を舁きて先づ『ガデ』の人『オベデドム』の家に入れ其所に奉ずること三月『エホバ』大に『オベデドム』の全家を祝福しければ『ダビデ』之を聞て忻然遂に自ら往いて之を迎へ『オベデドム』の家より『シオン』の居城に至れり。匱を舁く者其行くこと六歩にして『ダビデ』牛と肥犢とを以て獻祭し力を盡して匱前に舞蹈せり。又細家の『エポデ』を身に束ね『イスラエル』の全衆齊く歡呼して笛を吹けるの聲と俱に『シオン』に舁き上り之を『ダビデ』の城内に安置せり。其時『サウル』の女『ミカル』即ち曩に『ダビデ』に嫁するもの窓より之を望觀し『ダビデ』の躍て『エホバ』の前に舞蹈せるを見中心之を鄙めたり。斯くて『ダビデ』は多年の希望も茫に滿足し其喜び言はん方なく、張れる所の幕内に於て燔祭及び酬恩祭を獻じ、萬軍の主『エホバ』の名を以て其民を祝し、『イスラエル』の衆庶男女を論ずるなく一人毎に麵麭一箇肉一斤酒及び乾葡萄を分ち各家に還らしめ、己れも亦内に入て其眷屬を祝せし時、『ミカル』『ダビデ』に謂て曰く『イスラエル』の王今日何ぞ其れ榮なる、自ら比匪者の其身を露はすが如く君も亦臣僕婢女の前に身を露はし給へりと。『ダビデ』『ミカル』に答へて曰く我れ必らず汝の父及び其全家を棄て寧ろ我れを簡みて『イスラエル』の宰となし給ひし『エホバ』の前に在て舞蹈せん、我は自ら省みて或は之よりも尙鄙賤なるものあらん然れども汝が言へる彼等婢女と俱に在て必ず其尊敬を受けんと。是の故に『サウル』の女『ミカル』終に子なくして死ぬる日に迨べりとある。

△野狐は穴あり飛鳥は巢あり、基督は枕する所なし、夫れ富めるものゝ天國に入るは駱駝の針孔を過ぐるよりも尙難し。赤貧基督の如くにして始めて神の子と稱せらるべく、赤裸『ダビデ』にして然して後に『イスラエル』の王冠を得らるべし。然れども小人をして此窮地に在らしむることなかれ、小人窮すれば濫に亂る、是故に深窓の婦は牧人の舞樂を怪み、方舟の子は農夫の醉臥を訝る『ノア』方

舟を出でゝ始めて農夫となり、自ら樹へたる葡萄の汁を取て之を飲み醉て其幕内に臥せしかば其次子『ハム』父の裸なるを見て之を其兄弟に語る。兄弟二人即ち長子『セム』と末子『ヤベト』は倶に衣を取り之を肩に掛けて反走し入て父の裸を蓋ひ回顧せずして出で來り終に父の醜體を見ず『ノア』睡りより醒めて彼等の爲せし所を見一人を咒詛し二人を祝福せり。

吾人は獨一眞神なる基督を見た、神の子なる基督を見た、聖人なる基督を見た、天の使なる基督を見た、當人なる基督を見た、盜賊なる基督を見た、惡魔なる基督を見た、是れ即ち方伯『ピラト』が猶太の王『ナザレ』の耶蘇と雖標したる神子基督にして、猶太人は之れを十字架に懸け、而して今は猶太人も亦ないのである。去れば吾人は基督を何れの處に尋ねて之れに逢ふことを得べきや、天上なるか地下なるか之れを求めて得ず、輾轉反側するもの皆曰く此處に基督あり彼處に耶蘇ありと、天を指し地を指し內に畫き或は心外に憧憬し、譬へば狂狗の土塊を逐ふが如く、痴猴の月影を捉ふるに似て笑ふべく又た悲むべき有樣である。默示錄に曰く汝等自ら謂へらく富有已に財を積み匱乏する所なしと、汝等は實に困苦憐れむに堪へたり、自ら貧窮瞽目裸身なるを知らざるもの今我れ汝等の爲めに謀る、汝等當に純金を我れに求め富有を致すべし、白衣を我れに乞うて汝等の醜を蔽ひ瘞目の瞽を汝等の目に膏り汝等見ることを致すべしと。世の所謂主よ主よと言ふもの彼等は已に自ら救はれたりと謂へり。彼等は神なる基督を見、天使なる基督を見、今日は稍進んで常人なる基督を見出して居る。更に歩を進めて盜賊なる基督、惡魔なる基督を見よ、是れ併しながら世人の最も怪しとする所である。

釋迦或時、結跏趺座、無量義處三昧に入り身心動ぜず是の時天より曼陀羅華、曼珠沙華等を雨らし佛及び諸大衆の上に散じて世界六種に震動す、其の時座に會する道俗男女、龍夜叉、人非人、其の他の鬼畜及び諸小王、轉輪聖王等皆未曾有なりと歡喜し一心合掌、佛面を仰ぐ。爾時世尊、眉間の白毫相より光を放ち普く東方萬八千の世界を照し下、阿鼻地獄より上、有頂天に至るまで周偏せざるなく六趣の衆生、善惡の業緣、生死の所趣、及び受報好醜其の中に於て悉く現はれ又諸佛あつて微妙第一の經典を演說し其の聲清淨にして柔輭、無數億萬の諸菩薩、諸衆生を敎化する所を覩る。又た諸菩薩、皆、戲笑と癡眷屬を離れ一心亂迷を除き念を山林に攝して億千萬歲の間佛道を求め又肴膳飲食百種の湯藥、名衣、上服、其價直、千萬金、栴檀の寶舍、衆妙の臥具、園林華果、清淨繁茂、流泉浴池、意の適する所及び其の中に於て諸佛菩薩、他の惡罵、捶打を忍で能く六波羅密の行を成就するを覩又寶塔高妙、五千由旬、縱廣正等二千由旬、其の數恒河沙の無量無邊なるが如くにして自ら國界を嚴飾して一一の塔廟、各千幡旛寶鈴和鳴諸天龍神人非人等香華伎樂を以て常に之れを供養するを見る。爾時、世尊安詳として三昧より起ち舍利弗に告げて曰く諸佛の智慧、甚深微妙にして難解難入なり、一切聲聞辟支佛の知ること能はざる所以者何となれば佛曾て百千萬億無數の諸佛に親近し盡く無量の妙道を行修して勇猛精進、名稱普く十方に聞え甚深未曾有の法を成就して宜きに隨て說くと雖も意趣甚解し

難しと。是の時舍利弗、懇懃、三たび釋迦に向て從上無量義處三昧瑞相の因緣を說かんことを請ふ。釋迦此の三請の爲めに頓て口を啓き分別解說せんとせし時、座中の道俗豫ねて驚疑の念あるもの五千人忽ち座より起つて釋迦を禮して退く、釋迦も亦敢て之れを制止せず以爲らく此の輩罪根深重、元是れ增上慢の人にして未だ得ざるを得たりとなし、未だ證せざるを證せりとなすもの彼等退くも亦佳矣と。

抑も印度人の言說たるや極めて糅雜又過高過大にして放談無稽に近しと雖も詳かに之を觀察すれば腋下翼を生じて天外に飛翔するが如き快感が其間に生じ來るのである。

△三昧とは梵語にして審さには三摩地と云ひ專念等持等の譯がある。天臺止觀の上に於て之を言へば所緣の境を一心處に收攝し審念觀察、調直正定なるの謂である。儒敎にて惟精惟一とか耶蘇敎にて意を盡し心を盡し神『エホバ』を愛すべしとあるのも或點に於て此三摩地の修行である。釋迦の無量義三昧は此三千世界の時間空間を殘らず眉間の一毫頭上に攝し無量の義理其中に於て圓熟して七花八裂佛界及び世間相を顯現したのである。默然として座し身心動せず所謂死灰槁木なりしは基督が十字架上に絕命したる所である。天臺にては之を止寂と曰ふ。又東方萬八千の佛土とは所謂百八の煩惱にして所有一切の情想互に礙へず乖らず法爾の佛國土を嚴飾し父母所生身即成大覺位の證果にして耶蘇敎の所謂復活である。之を天臺にて觀照と稱して居る。故に止觀とは止寂觀照の四字を節略したるものにして所謂十字架の死と復活を一語に示したものである。又本書に就て見れば頃刻の間に五十小劫を過ぎ六十小劫を經たりと云ふ所幾回もある。是れ基督絕命の一刹那已に地下に葬られたるものにして佛敎にて言へば三大阿僧祇劫の修行敎化此曠時に悉く具備するのである。實に生死の一轉機、其時間、極微なりと雖も其れ斯くの如く貴重なる佛敎を修行するには縱に無量無邊の階級を踏まねばならぬ。橫にも亦無量無邊の階級がある。一々更綜變錯して之れを縱橫に排列し聯結する時には到底吾人の智慧も想像も及ばざる程の數となる。此點より言へば釋迦も耶蘇も今尙修行の途中に在て我等と同じく難行苦行して居るもので決して歸家穩座の人とは言はれぬのである。然れども此に復た最も易簡の工夫が諸宗敎の間に等しく行はれて居る。是れ即ち斯る無限大の時間と空間とを眉間の一毫頭上に攝束して縱橫微塵數の佛界魔界を一時に奪ひ盡すことが出來るのである。故に同じく法華の壽量品に曰く如來は譬へば良醫の智慧聰達にして明練方藥善く衆病を治するが如し、其人多子あり若しくは十、二十乃至百數、或時、事故あつて遠く餘國に至る。其後諸子他の毒藥を飲んで悶亂を發し地に宛轉す。是の時父還り來れば諸子毒に由て已に本心を失ふ者あり、或は未だ本心を失はざるものは遙に父の歸るを見て大に歡喜し拜跪問訊且曰く、兒等愚昧にして誤て毒藥を服す、願くは救療更に壽命を賜へと、父子等の苦惱是くの如きを見て諸經の方劑を案じ好藥草の色香美味皆悉く具足する者を求めて之を擣篩和合して子等に與へて服せしむ。曰く此大良藥は色香美味悉く具足す。汝等速に服して苦惱を除ぐべ

し、復た衆くの患ひなからむと。諸子の中心を失はざる者は此良藥色香俱に好きを見て便ち取て服し病ひ盡く除癒せりと。基督教に於ても亦斯くの如く藥草の色香美味具足するものを擣碎和合して二碑となし又之を煮て一椀の肉汁となし吾人をして之を飲ましめ或は色香俱に佳なるものを分つて三丸となし三丸復た一櫃に納れて一丸となし一丸復た溶いて一靈液となし吾人をして之を服せしむるのである。次に又曰く餘の心を失ふ者は其父來るを見て亦、歡喜、問訊、病ひの治せられんことを求め已に其藥を與へらるゝと雖も而も之を服するを肯へせず所以者何となれば毒氣深く入て已に本心を失ひ此色香、俱に佳なる藥を執て是れ決して美ならずと謂ひ父の命を用ゐず、父以爲らく此子惑むべし、毒に中られ心皆顚倒し我れを見て喜び救療を求むと雖も是くの如きの良藥を肯へて服せず、我れ今當に方便を設けて此藥を服せしむべしと。即ち是の言を作して曰く、汝等當に知るべし我れ今衰老死時已に至る、是れ此の好良藥今留めて此に在り、汝取て服すべし癒へざるを憂ふるなかれと、是の敎を作し已つて復た他國に至り去る。基督も亦斯くの如く這箇の良藥留めて此に在り、之を取て服すれば旨者は見え寒者は立ち跛者は行き聾者は聞く。故に基督曰く我が肉を食ひ我が血を飲む者は復た飢渴なしと、實に基督の血肉は吾人萬刼の飢渴を醫し膏肓の病を治する良好藥である。

若し彼れが一匕血一粒肉を取て之を服すれば其中には百味具足し萬病全癒するの功能がある。然れども彼れ逝いて已に二千年何れの處に往て彼れの血肉を求むべきか、彼れは到る處にあり山にあり河にあり天に在り地に在り人之を避けんと欲して避くること能はず行住座臥彼れと相伴ひ二六時中彼れの鼻孔裡に在て語默動靜す。然るを世人は何故に彼れを見ること能はざるか、彼れ餘りに大なるが爲めの故か極めて小なるが爲めの故か、顯露微はざるが爲めか、玄微形はれざるが爲か、抑も罪人は彼れを拜すべからずとなすの理あるが爲か、否彼れ寧ろ痴人罪人貧者病者の爲めに來る。彼れは大小にあらず、顯微にあらず、內外にあらず、終始にあらず、唯彼れに逢うて智慧を褫がれたるもの、罪惡の愈重きを知りたるもの、貧の益甚しきを覺え、病根の深く且つ遠きを悟りたるもの、能く彼れを見彼れを識ることが出來るのである。

古人の句に去年の貧は錐もなく地もなしと、今年の貧は錐もなく地もなしと、裸々條々『エデン』裡の『アダム』十字架上の耶蘇、眼なく智なく衣も亦なくして玆に始めて彼れを見ること愈明白なるを得るに至るのである。吾人は此身あるを知れば羞耻を知る、羞耻を知れば之を蔽ふべきを知る、乃至食ふべきを知り、見るべきを知り、善惡を別つべきを知り、彼我を知り、愛憎を知る。去れば吾人は徒らに枝葉を除くに齷齪として終に其効なからむより直ちに株根を扳き去るに若かず、否寧ろ盤屈たる此罪根凌蔚たる此苦幹一夜『ゴルゴダ』丘上戒律の風に任せて大地に和して之を吹倒せしむるに若かず、是れ即ち十字架である。

△十字架を誤り認めて這箇の秘藏を開閉するの關鍵とのみ思ふなかれ、十字架は關鍵なり秘藏なり又

其中の奇財珍味である。良藥中の最好良藥秘法中の最極秘法である。佛敎に三千の威儀八萬の細行と云ふことがある。十字架の一瞬間是等の修行を秋毫も餘す所なく成就するのである。又八萬四千の塵勞と云ふことがある。塵とは染汚の義にして種々の邪見煩惱能く眞性を染汚するを謂ひ、勞とは此の邪見煩惱に勞役せられて休息することなく輪轉生死盡くる時なきを謂ふのである。故に之に對して又八萬四千の法門がある。「釋迦喜王菩薩に告げて曰く、修習行法第一光耀より分舍利凡三百五十度の無極法門に至るまで一一の法門各、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅蜜度あり、共に二千一百度の無極門となる。貪瞋、瞋恚、愚痴等に於て四種の衆生に分つ各此二千一百度の無極門を以て敎化して而も之を開覺す、合せて八千四百度の無極門となる、一變して十となり、總じて八萬四千度の無極法門となる。此は是れ三界無上の良藥にして、八萬四千の塵勞を除くと「佛敎は種々の數字に配當して敎を說いて居る。元より牽强を免れざる所もある。然れども亦無意味とのみ限られぬのである。譬へば百八煩惱に對して百八明門あり、八萬四千の塵勞に對して八萬四千の法門ある如く、佛敎を修習するものゝ爲には大に歸趣を明白にする所がある。」此八萬四千の塵勞、八萬四千の法門を約して次第に種別分類すれば、終に一微塵、一乘法に歸す。所謂、萬法、一に歸するのである然れども一も亦守るなかれ、守れば即ち偶像となる。我が十字架の功德は萬法を除かず一を守らず細粗、放約、擒縱、與奪共に自在である。達磨曰く一大事因緣を窮めんと欲せば須らく見性すべしと。眉間の一毫光萬八千世界を照らしたとあるは即ち一毫頭上に吾人の心性を諦らめ延ひて無量の法門無極の塵勞を照破したのである。孟子の所謂萬物已れに備るも皆是れ見性すべしの謂である。基督敎は創世記の始めより福音傳の終りに至るまで頭々皆十字架滴々是れ復活を指示したるものにして、佛敎も儒敎も乃至老敎も其名目は異なりと雖も先づ己心を諦らめよ、自性を見よと敎ふる外はない。就中『バイブル』は見性の外に毫釐の敎義を見出すことが出來ぬのである。夫れ自性を的指明折するには一旦此小天地を破壞せねばならぬ、之を佛敎にて我空と云ふ。已に小天地を破壞し了れば其依所たる千界萬靈、亦同時に滅却する理由がある。之を佛敎にて法空と云ふ。斯くの如く法我、兩つながら空寂に歸して再び建設する。之を佛敎にて證悟と云ひ、又見性と名づけて居る。即ち耶蘇敎の復活である。

△然れども唯二空を得、或は再活現成して寂光淨身をなすと雖も、眞金は須らく是れ紅爐に鍛ふべし、鍛ひ來り鍛ひ去て愈眞なるを見る。大悟六返或は十八返など云へる人あるは幾回か十字架に懸り所謂證悟の數を重ねたることが推し測らるゝのである。二回は一回よりも精となり、三回は二回よりも密となる。粗嚼又細嚼益十字架の妙味を解することが出來るのである。

善財童子と云ふ者がある。已に無上正覺心を發し又一切智々を成就せんと欲して五十三の善智識に歷參し一百十城を過ぎて終に普賢菩薩の所に於て一切、佛刹、微塵數の三昧門を得て歸る所を華嚴經、法界品に說いてある。倩〻見來れば此善財童子は元之れ文殊菩薩と同體にして、恰も『エホバ』と基督

との關係のやうなものである。又善財童子が一百十城を歴五十三の善智識を參問したるは亦是れ基督が死して葬られ三日にして蘇り天地を改造したると皆歸趣を同じくして居る。華嚴經に十信、十行、十住、十迴向、十地、合せて五十の階段が說いてある。菩薩道を成就するには是非共此五十段の修行を經ねばならぬ。加之一段階の修行を假りに一億萬年とし、其間無量の佛を供養し奉るとしても、五十億萬年を要する割合である。然るに善財童子は一踏足にして之を超過して居る。彼れが歴參したる五十三の善智識とは即ち此五十の階級にして（彌勒文殊普賢を加へて五十三となす此三尊は五十の統一性にして體である基督教にて三日三夜と云ふ如し又五十は變化にして用である基督教にて四十日四十夜と云ふが如し）實に激石火の間と見ねばならぬ。是れ即ち十字架の道理である。恰も基督が四千年間の事業を三日にして成就したるものと同樣である。善財童子は如何にして此神通力を得しかと云ふに、彼れ最初文殊の敎を受けて勝樂國妙峰山に往き、德雲比丘に參せんとして普く山中を尋ねたれども逢はず、終に七日を經て始めて彼の比丘別山に在り靜思經行するを見たり。是に於て善財詣いて頂禮白して曰く、我れ先に菩提心を發したれども未だ云何して菩薩行を學び菩薩道を修め乃至云何して普賢の行に於て疾く圓滿なるを得んと。德雲比丘便ち爲に法を說いて曰く我れ念佛三昧門に入て十方微塵世界の佛を供養し一念の中に於て一切諸佛及び其眷屬の淸淨莊嚴、乃至神通遊戯自在方便力を見不可說、不可思議、不可商量の智慧三昧門佛德無壞境界を逮得せりと。去れば德雲比丘は一佛を憶念して一切の妄想を離れ向背なく揀擇なく明暗生死を心に關せず捨身一番水火の中に五體を投じて之を得たのである。之を禪宗の人より見れば趙州の柏樹子（僧問ふ如何なるか是れ祖師西來の意州曰く庭前の柏樹子）喫茶去、雲門の乾屎、橛花藥欄、等の如く名は優さしく又風流氣なれども實參實窮の三昧門に入れば靑鬼黑鬼前後より攫んで身は空中に掠め去られた樣な心地がするのである。所謂十字架である。又淨土宗、眞宗等の人より言へば通常李爺張婆の爲めに說く所自ら是れ別なりと雖も念佛三昧門に入て解脫を得れば一乘圓頓の敎へ三密瑜伽の境も此中に存するのである。故に法藏比丘が世自在王佛の示敎緣て六度滿行を修め末世衆生の爲に四十八の誓願を成就せりと云ふは、試みに十字架敎の面目を以て之を了義すれば、彼れ初め國土を棄て王位を拋ち沙門となり高才勇哲號じて法藏と曰へるは是れ即ち基督にあらずや、此比丘世自在王佛の所に詣り法を聽き後ちに資師一體となりしは『エホバ』と基督との關係にあらずや世自在王佛の時未だ世に罪惡なし預め生死勤苦の本を拔き、淨土を末代の爲めに備へんとして五刼の間思惟せしは『エデン』以前基督が經營せし所と同じきにあらずや、其誓願と云ふは即ち約束の謂ひである。佛の誓願神の約束元より堅く萬に一も違ふことなしと雖も、之を信ずる吾人の力甚だ弱くして縱令佛の善巧方便、神の智術、其の豐かなるを知るも一朝省みて我が身を察すれば洪波激浪に魂銷して救船の堅牢を忘れ、暗礁岩角に魄散じて舟子の練熟を疑ひ、動亂又回顧愁苦更に息む時なし。我が十字架敎は寧ろ船舶を破壞して同乘者と偕に海底に沈むのである。乾坤累卵の如し打破すれば還て康きを得んとは山岡鐵舟が累卵塔に題した句である。法藏比丘も亦斯くの如く彼れは國王の身にてありしも一旦世自在王

佛の說法を聽き心に悅豫を懷き無上正心を發して終に國を去り位を捐て身に垢衣を著け食を乞ひ道を求めたとあるは即ち是れ十字架である。

易の乾九四に或は躍て淵に在りと云へるは即ち地獄の中に身を拋ちたるものにして、潛龍の德見龍の澤終日乾々夕べに惕若も一束して淵底に葬り身と偕に亡びて今度は飛龍天に在りと復活して居る。法藏比丘も亦復斯くの如く世自在王の前に無數の佛あり。彼れは世自在王佛に和して從上無數の諸佛と偕に地獄に淪み燒かれ舂かれ水火の淵、劍刀の山潛り盡し踰へ盡して四十八願本來具足の身なる事を發明したのである。眞言の理趣釋によれば六道の一一に八葉の蓮華を具するを以て六八四十八願となると云うて居る。牽强附會のやうなれども人々本具の誓願力を能く解して居る又眞言の秘密傳法書、儼毗羅（菩深）抄の中には誓願心は即ち秘密莊嚴心なりと說いて居る。儒敎にも天地の醇化に乘ずると云ふことがある。是れ皆一切衆生否天地萬物の自性である。宇宙本來の面目である。今日の學術に於て說く所の進化力なるものも亦同樣である。

△經文に世自在王佛即ち爲めに二百一十億諸佛刹土天人の善惡國土の粗妙を說き其心願に應じて悉く現じて之を見せしむとあるは、論者以爲らく如來の七種性自性に三身を配當したるものなりと、是れ亦穿鑿を免れずと雖も法藏を餘所に覓めず自身是れ法藏比丘なること經文に依て已に明らかである。故に法藏比丘、二百一十億、諸佛妙土淸淨の行を攝取したりとあるは確かに復活して自性を諦らめたる所が見ゆるのである。毫も諍ふべき所はない。蓋し法藏比丘が世自在佛の敎を聽き斯くの如く復活するに至るまでには、必らず一刹那の時間でなくてはならぬ。然らざれば決して宗敎の價値はないのである華嚴方等法華涅槃皆機輪の一轉化即ち電光石火の間を無量劫の經過に見せて居る。基督敎に於ても三日の中に四千年の經過と行動悉く備て居る。若し疑ふものあらば自ら一回十字架に懸つて冷煖自知するがよい。壽餅腹に滿たず隣家の財は已れの富にあらず。（未完）

十字架敎講話集（中終）

十字架教講話集（下）

十字架教講話集（下）

◎所依の經典

或天台宗の師家が詠だ歌に

わが法は賤山かつのもつれ髪
結ふにいはれず解くにとかれず

我が十字架教も亦斯くの如く言ふに言はれず說くに說かれざる點がある故に我が命脉を他に附屬せんとするには畢竟言說の外に於てせねばならぬ去れば之に對して或る淨土門の祖師が

わが法は朝夕なづる稚子の髪
結ふもいはるゝ解くもとかるゝ

と詠だのは其は十字架教本分の草料にあらざるかと云ふに決して然らず隨分言ふに言ひ得られ說くに說き得られるのである否寧ろ從來の諸佛教神道乃至耶蘇教などよりも一層明細に剖拆して何人にも分り易く說き聽かすことが出來るのである。

わが法は唯ありがたきはかりなり

解くにおよばす言ふにおよばす

此の歌は或神道家の詠だ歌である黒住派の人などは大抵皆知つて居る扨明治の教育を受けたる人果して此法喜食が古事記の中より得られるか得られぬかは暫く別問題として兎に角此歌も移して以て我が十字架教安心の趣を人に示すに幾分かの材料とせられぬことはない。

夫れ佛教と云ひ耶蘇教と云ひ乃至神道儒道皆如法に修行すればそれ〴〵の利益がある決して之を忌み嫌ふのではない然れども佛教は全く人生觀を缺いて居る何程宇宙本位に臍を据ゆるとも世教に益なきものは畢竟宗旨とするに足らぬ耶蘇教も從來世に行はれたるものは曾て人の本能を說かず單に一箇の倫理教と見做するより外はない所詮我が東洋人の眼に宗教として映ずることは出來ぬ儒教には社會觀なく神道には世界がない然らば吾人は唯是等の宗教を比較研究して打て一圍となし彼の下體を以てするなき「ユニテリアン」や新佛教徒の如きものなるかと云ふに決して然らず我が十字架教には儼然たる所依の經典がある。

創世記　出埃及記　利未記　民數略記　申命記　約書亞記　士師記　路得記　撒母耳前書
撒母耳後書　列王記略上　列王記略下

以上十卷十二冊は『イスラエル』人に依て世に傳へられたる『エデン』種族の歷史である我が十字架教は即ち之を經典として居る。

茲に最も御注意を乞はねばならぬことがある其は外ではない已に十字架教と云ひ又其の經典は『バイブル』中の書なるを以て讀者は直に耶蘇教の一派なるが如く速斷し或は然らざるも耶蘇教より轉化し來りたるものなど〻見られては十字架教主も甚だ迷惑に存ずる譯である世間には往々此誤解をなすものあれども今後數十回を重ねて說き出す所に由て自ら判然するのである余は一日『エホバ』の神の默示に依て此教を信じてより已に十星霜を經更に今『エホバ』の命を受けて將に弘く世に傳へんとするのである。

天照す神の御德を世の人に
のこらず早く知らせ度きもの

是れは神道家の中に近世高德の聞へある故の黒住宗忠が詠だる歌である余も亦倩々今日の時勢を鑑みて殘らず早く此十字架教を世に知らせたきと云ふ誓願心の一層切なるに堪へぬのである釋迦も孔子も乃至耶蘇も皆此十字架より出たるものである古往今來決して生知安行の人はない世に人間以上として崇拜せらるゝ人皆一度は必ず余が茲に所謂十字架なるものに懸りたる結果である佛教家は之を大死一番再活現成と云つて居る所謂般若波羅密多である金剛經の中に諸佛の無上等正覺は皆此經より出と云ふてあるのも即此意に外ならぬ神道にて修禊、周易にて大川、佛教にて般若、皆是れ諸聖人出身の本である故に今後將に世に起らんとする英雄君子も其出所を窮むれば必ず余が所謂十字架なるものを

多少なりとも經て居るに相違ない筈も命を立て道を行はんと志すものは文學技藝乃至宗教家にまれ政治家にまれ我が十字架教に來る外はない世界にて最も敬信せられたる釋迦孔子耶蘇が前に掲げたる我十字架經典と如何なる關係を有するか又支那の易、印度の諸佛典、日本の古事記及び耶蘇の福音傳と我が十字架教典との間に如何なる系統を待つか前に所謂修禊、大川、般若、乃至又、皇極思想、曼荼羅思想、及び須彌觀等が畢竟何れの邊より流れ出でたるものなるか余が今より次第に說き出す所に由て讀者其の源を明らかにするを得ば神が故らに此新らしき福音を我等に降せる所以を觀併せて余が言を怪まざるに庶幾らん乎

◎大和民族

守居の腹赤いと謂つても其儘では利目がない燒いて粉にせなければ赤誠を顯はすことは出來ぬ世に所謂鄕愿なるものゝ其の水の如き性質を以て自ら常識圓滿なりと誇つて居る然れども狂狷の人が其境遇上自然の煮沸を經て舊の冷水に還りたる時は其の味ひの淡美亦格別である。

却說前回に於て余は我が十字架教の經典を擧げた讀者は定めし其故きを見て驚いたであらふ日新々々と進む世の中而かも國家萬能主義を謳ふ今日せめて耶蘇教とでも云はゞ兎も角も其又昔しの『イスラエル』亡國民の歷史否世界最も古俗の祭典を取出して之を我新福音書と唱ふるに至ては神道家は直に緣起惡しゝと忌み佛教家は何樓の漆器拈出するなかれと斥け耶蘇教にては再び『エルサレム』の殿堂を建つるものなりと咀ひ儒者は危きに近づく勿れと門人を誡むるであらふ然れども我十字架教の經典は始めより終まで一句一言磨すべき所がない更に又古事記及び易之より出で釋迦も耶蘇も皆我が子孫なるを聞かば其の愕きも無理も無い是れ然しながら法華の涌出品に二十四五の者が白髮の老翁を指して是れ我が兒なり我れ曾て之を生めりと云ひ又前回にも言ひし如く金剛經に諸佛の無上正覺は皆此經より出づと云ひ龍樹が其一生涯智度論其他數十部の著書に於て般若波羅密多の道理を縱說橫說して般若の利劍を以て斬り盡し殺し盡し更に復活したる後は我れ天地を創造すと言ふことが出來諸佛の師なり父なりと言ふを得べしと論じて居るのを見たならば佛教家は余に對して聊か其怒りを解き又耶蘇が汝等死して復た生れずば畢竟して天國に入ること能はず乃至姦惡なる世は奇蹟を求む然れども今は豫言者『ヨナ』の奇蹟の外與へられずと言ふて彼れが三年間の說法倫理に道德に及び奇蹟に唯此の復活の玄意を寓し剩さへ躬親ら死して甦つて見せた所によれば耶蘇教信徒も到底余に向つて爭ふことは出來ぬ譯である其他古事記も易も復活の道理より外は決して教へて居らぬ書中戒律を說ける所あり哲理を談ずる所あるも皆此の甦生術の副產物或は材料に外ならぬのである。

如上の理窟には首肯す唯何故に今更『イスラエル』人の神話を擔ぎ出すかとの問は余の玆に俟ち設けた所である蓋し支那に入り印度に流れ猶太に留まり希臘に移りたるもの其源を窮むれば人類學形體

學博言學等の結果今日では何人も中央亞細亞の或る一部を指點するであらふ是れにも無論動かすべからざる道理がある我が日本の言語さへも希臘語が三百以上羅典語脈が凡そ二百『ヘブリウ』語が確かに百四五十もあると數へられて居る我れ〳〵共の日用器具體部の名稱思想の表辭形容詞動詞等大抵皆希臘語羅典語『ヘブリウ』語等を用ゐて居て是れ迄自ら知らなかつたのである而して余が之を知り得たのは佐藤叔治氏（本紙連載の「眞の魯西亞人」の口述者）多年刻苦の賜である次に『サンスクリット』語脈も我が古語中此節大分見出されて來た又宮崎道三郎の調査によれば朝鮮語支那語が大分多い從來人々が邦語と思つて使用し來つた者の中に彼れの轉化或は譯語が澤山雜つて居る是等に因つて最早神道者流の說は陳腐で聞かれぬ事になつた曾に言語のみではない古事記の解釋も自ら異つて來た譬へば『スメル』と云ふ語は統へると云ふ意でない是れは妙高又平安の義で王者或は靈山に冠したる敬語である須迷盧山『スメラミス』等皆同しである是れ或は今も尙殘つて居ると云ふ彼の『バビロン』近傍の聖地『スメロ』より出でたるものならむ創世記十四章十八節及び詩の七十六篇二節にある『サレム』も矢張り泰安妙高等の意である博言學者は大抵『スメル』と同語原と云ふことに一致して居る『エルサレム』之れを譯すれば平安城である又『ミコト』『ミカド』は御事でも御門でもない『ヘブリウ』人は神より嘗を注がれたるものを『ミケード』或は『ミカド』と曰ふ『バイブル』に基督とあるのは即ち希臘の譯語にして原語では『ミカド』である之を譯すれば帝王と云ふ意義になる小澤安左衛門氏の大和民族起原考によれば我が風族人情が殆んど希臘と『ヘブリウ』とを折衷したやうなもので又其の古事記の地名人名及び宗教觀が我が十字架教の經典とよく一致して居ると云ふに至つては是れ吾人の最も研究を要する問題である。

然れども余は從來學者の議論は成丈け避けて居る余が比較研究は唯死して甦るの術即ち十字架の外餘り多岐に涉らぬ方である故に次回には我が十字架教典と古事記の宗教觀とを比較し此復活法が不思議にも我日本に傳はり其の武士道の上に及ぼせる影響と如何に一般日本人の性行に現はれつゝあるか又時節柄日露戰爭にも說き及ぼさん。

◎安全界

世人は我十字架教を以て最新の教の如く沙汰すれども實は余に先立つて復活の道を唱へしもの南天竺に龍樹菩薩あり其れと同時に『パレスタイン』の野に獅子吼したる『ナザレ』の耶蘇あり故に感情の上から言へば御幣人種の爲めには波羅密多教と稱したる方が聊か氣受けよからんと思へども如何にせむ龍樹は之を理論に顯はし耶蘇は之を事實に演じて居る宗教は元實際的ならざる可からず是れ余が宗名を後者に取りし由緣である而して耶蘇も龍樹も共に斯道の解釋者として神前に並び立つべきものにして彼れを傍出とし之を正統とすべきものではない唯其の立教事理の二門に分かれ顯密の兩部に區

別せらるゝまでの相異である余は此の如き突飛な説を持ち出して問難百出固より期待する所なれども今日は前回の約を履むで少しく大和民族の特徴に就いて語らむ。

夫れ大和民族の性格の上には種々の特徴がある第一に皇室に向つて及を加へざると第二に善く安全界に突入すると等は其の最も著しき者として世界の人に環望せられて居る蓋し是等の習はせが支那文明輸入以前の傳説時代にも盛んに行はれ其由來する所神話時代の古事記等によく顯はれて居る一見何人も支那印度と其系脈を異にするは蔽ふべからざる事實である而して明治以後人類學會の研究に因て我が祖先の或る一派が南洋諸島を經過したるものなることも言語風習等に由て已に證せられ出雲種族の多神教徒なること高千穗種族の火教徒なること及び淡路島一派の所謂天津神を奉じて他の二教徒を融會し學に多神教汎神教一神教の混成物とも謂つべき性質のものを建立し兒孫に永く遺したるもの即ち三體唯一の劍鋩璽であるとは強ち穿鑿一偏としても嗤はれぬ説である兎に角に我が日本には多神教の本家なる希臘の風俗もあり火教徒の古郷なる波斯人の趣もあり而して古事記中には一神教徒の本尊『エホバ』の教訓と創世記出埃及記其儘の記事が諸所に散見して居る而して獨り淡路島の兒孫のみが宗教的に精神界の優勝を占めて他二教徒の脊髓となり能く左右の二枝を使役して自ら皇極を成して居る。

以上は大略を云ひたるのみ追々問題の起るに隨つて微細に論及すべく今は唯後段の伏線として聊か述べ置く必要がある。

今度軍隊布教師として從軍せられた鎌倉の宗演和尚が曾つて湯島の麟祥院に於て開講の偈を述べられた事がある其時は聽者三百人以上にも及びたれば中には定めし記臆せられた人もあらう。

孟賁失勇烏獲啼　鷄鳴狗盜奈斯關
勸君直透通宵路　南北東西掉臂還

南北東西臂を掉つて還へるの自由を得るには是非とも一つの關門を過ぎねばならぬ是れ然しながら其れが甚だ難關で血を流して透らねばならぬからして玆に鷄鳴狗盜の小才子にては到底出來ぬと云ふたのである所謂絶して復た蘇るの處にして假設孟賁の如き勇者も烏獲のやうな强力無双の者も是れには閉口するであらう我が戀は細谷川の丸木橋渡るに辛らし渡らねば彼岸の安全界に到達することは出來ぬと云ふ一刹那豈に管に辛らし危ふしとのみ顧慮するのみならんや直ちに是れ喪身失命を免れざる所なれば此處に同情を有する者は必ずや一度此難關を過ぎた人である愁人に向つて愁人の事を説くことなかれ愁人に説向すれば人を愁殺するやら余も亦我十字架に於て同情の感に堪へぬ一人である荆棘林中通路三人携手慕直過。亞當が荆棘林中に葬られてより以後如何にして通宵の路を見出せしや三人手を携へて慕直に過ぎし所即ち是れ父と子と聖靈を一身に圓にして乾坤に獨歩する者豈に所謂眞の自由の人にあらずや之を安全界の人とは稱するのである。

斬り結び刄の下ぞ地獄なる

ふみこんでこそ極樂もあれ

吾人は萬一を期望して踏み込むのではない千は千。萬は萬。決して違ふことなく安全界に入らるゝの術を敎ゆる者は此十字架敎より外はない而して十字架の意が不思議にも我日本人に行はれ幾千年間準備の結果今や三種の神器を奉じて日本海を出で醜露の膽を寒からしむる者は恰も『イスラエル』人が埃及に蟄伏すること四百年又亞拉比亞の野に徨ふこと四十年の後神の約櫃を擔ぎて『ヨルダン』河を踰へ『カナン』の七族三十二王を滅し密と乳とを流すの地に入りし躅に相應ずるの一段は次回に讓る。

◎十卷書（一）

△王寶劍豈投『死屍』。活『斬魔佛』血淋漓。如今拋擲雲峯頂。脚下腥風一『任吹』。箇れは是れ小石川白山道場。故愚長老南隱禪師の偈である。今や當さに我十字架敎徒も。這箇の王寶劍を提つさげて。起たねばならぬ時機に遭遇した。此の處世人に向つて聊か。十字架敎と云ふ名題を。釋するの必要がある。

△十字架は羅甸語にて『くるす』と云ひ。十字形の磔架を云ふのである。『くるす』は『くるずむ』とも變化す。日本のクルシ、クルシム皆同語源である。支那の苦屈の字に相當して居る。羅甸民族は此十字形の磔架を。極刑の具に用ゐて居つたものである。基督以前已に七八十年の頃。羅馬人『シセロ』の詩中には。虐遇。壓制。誣告。强迫。醜辱等の動詞形樣詞に用ゐて居る。

△去れば『ナザレ』の耶蘇基督が。羅馬法律の下に在つて。此十字架に磔せられたるは。當時の極刑に處せられたるものにして。又其の蘇りたるは。所謂虐遇。壓制。誣告。醜辱。强迫等人世の所有極刑より蘇生したるものである。今日本國民は內外に向つて。煩悶苦痛を叫ぶこと日に益甚しく。其聲愈高くなりつゝある。是れ政府の罪にもあらず。國民の罪にもあらず。乃ち我十字架敎を信ぜざるの罪である。

△此蘇生の道理は。獨り我十字架敎のみに在つて說くものにあらず。神道にては之を祓齋と云ひ。周易にては之を渡『大川』と云ひ。佛敎にては之を般若羅密多と云ひ。其に以色列人の割禮と洗禮とを意味して居る。凡そ世界に幾多の宗敎あるも。其は復活の道理を能く明かにするや否やを以つて。其正邪を判することが出來るのである。基督曰く奸惡なる世は。兎角に奇蹟休徵を求む。然れども今は預言者『ヨナ』の奇蹟の外世に與へられずと。畢竟彼れは其他の休徵奇蹟を以つて。世に益なきものと見て居るものである。

△此に『ヨナ』と云へるは以色列の預言者である。彼れ『エホバ』の托宣を受けて。之を『ニネベ』

の邑に傳へんとせり。然れども彼れは禍害の身に及ばんを怯れて。『ニネベ』に往くを欲せず。適使船を得て。『タルシヽ』と云ふ處に向ひ。暫く『エホバ』の面を避けんとせり。然るに忽ち暴風あつて『エホバ』より臻り。海波狂蕩。舟將に覆らんとせし時。舟子互に籤を掣き。終に此災ひが『ヨナ』に原因するを見て。衆齊しく『エホバ』を顧び。彼れを取つて海に拋ちければ。海の震蕩遂に息して全く平靖に歸せり。

△『ヨナ』の海中に投ぜらるゝや。かねて『エホバ』の備へ賜ひし巨魚あつて。彼れを呑み去りければ。彼れ魚腹に在ること三日三夜。即ち『エホバ』に禱つて曰く。

我れ今淵心に投ぜられ。海水我れを環り。波浪巨濤悉く我れに溢る。今我れ爾の目前より逐ひ離さる。然れども我れ猶將さに爾の聖所を覦んとす。我れ曾て陰府の中に於て爾を呼籲し。爾我が聲を聞けり。今我が命危きを致す。深淵四周に環り。海草我が首を裹む。我が靈我が裏に憊るゝ時。我れ則ち爾を記憶す。願くは我れの祈禱爾の前に進むを得て。長へに爾の聖殿に至らんことを。

△『ヨナ』の祈禱『エホバ』に達し。『エホバ』其の魚に命じければ。魚之を乾土に吐けり。之に最も能く類したる神話が。印度にも傳はつて居る。而して『ヨナ』は印度にて日輪の義である。昨夜金烏飛入海。今朝依舊一輪紅。〻禪家の人が咏じたる處と同一理想である。

此三日三夜と云ふ數は。以色列人の神話に於て。輕忽に看過することの出來ぬ數である。『ヨナ』が魚腹を出でゝ後。『ニネベ』の邑に傳道せし日數は明らかならずと雖も。恐らくは四十日とか四百日とか。四の數ならむと思ふ。『ヤコブ』の兒等埃及に拘禁せらるゝこと三日三夜にして。四百年となれり。其の子孫埃及を出る時。三日程郊野に『エホバ』を祭らんと云ひて。四十年に及べり。基督は三日三夜。地下に葬られて。昇天の日まで四十日間。陰府に道を宣べて居る。

△『ノア』の時。降雨期四十日四十夜。摩西飲まず食はずして。『シナイ』山に籠もり。神戒を受けし日が即ち四十日四十夜。基督洗禮を受けて後。飲まず食はずして。惡魔に試みられ。野に在りしこと四十日四十夜。此等四の數も亦必らず三の數より開かれたるものである。此の三と四との關係は獨り以色列人のみならず。印度波斯の古代思想に於て。面白き原理が發見せらるゝのである。法華涌出品の中に。僅か數分間内の法輪を。此間二十小劫を經たりとか。六十小劫を經たりとか云ふことが幾度も見えて居る。斯くの如く基督も僅かに數分間の洗禮が。『アダム』より基督まで四千年間の歴史を罩めて居る。三時間の十字架は之を開けば。四十日となり。四十年となり。四百年となり。四千年となるのである。所謂芥子に須彌を藏する處である。

△華嚴經に十信。十行。十回向。十地。と云ふ階段がある。即ち五十の波多羅蜜である。之を悉く修め盡くすには。幾億萬年を費さねばならぬ。然るを善財童子は。三昧法に依て此五十の階段を。一刹那に通過して居る。基督の十字架も亦斯くの如く。一々階級を逐うて漸進すれば。一重山盡きて山

又山當に四千年間を費すべき行程の處を。一刹那にして能く達し。明かに山雲海月の情を語り盡くさるゝ捷徑法である。

△眞言宗阿字觀の歌に『阿字の子は阿字の故郷立出てゝ。又立歸る阿字の故郷』とある。斯くの如く最初『アダム』は『エデン』の樂苑を立出てゝ。復た『エデン』の樂苑に立歸るの日程が即ち。四千年間である。其中神話時代もあり傳說時代もあり。無論確實なる計算の立つべきやうはなけれども。『アダム』より基督までを凡そ四期に區別したものである。『アダム』より『ノア』に至るまでを第一期とし。此間神を天上に求め。常に淸淨界を望んで居る。基督が試惑者に向つて人は餅のみにて活るものにあらず。凡べて神の口より出る言葉によると錄せらると答へしは。自ら此の期の修行を終りたるを證して居る。即ち割禮時期である。

△『アブラハム』より摩西に至るまでを第二期とす。此間には神を地下に求め。埃及に入り終に紅海に沈み。海底にて神を見神と語り。神の契約を得て。『ヨルダン』河より出でゝ居る。基督が試惑者に向つて。主なる爾の神を試むべからずと錄せらるると答へしは。自ら此期の修行を完うしたる證據を顯はしたるものにして。即ち洗禮の時期である。

△『ヨシュア』より『ソロモン』王までを第三期とす。基督が曾て試惑者に向つて。主なる爾の神を拜し。獨り之にのみ事へ奉るべしと錄せらると答へしは。即ち此期の修行を表したるものにして。先きの割禮と洗禮と一致の時期である。

以上三期の修行を一身に圓かにし。簡易直截。去來今を絕せんとするには。基督の十字架より外にはない。善財童子曾て德雲比丘を訪ひ。如何にして普賢道を獲らるべきやを問ひし時。比丘答へて。我れに唯箇の三昧法あり。我れ之に依つて悉く過去の諸佛に供養し了り。之に依て諸佛の正等正覺を得。之に依て普賢道を修め得たりと曰へり。我十字架も亦斯の三昧法にして。基督は之に依て天地未開以前の人となり。天地の創造者となり。神子となり預言者となつたのである。

△善財童子が曾て妙峰頂上に。德雲比丘を訪ねたる時に。七日七夜。上下四維に之を探がしたれども見えず。終に別峰に於て相會したとある。基督も亦斯くの如く。五人若し彼れを妙峰頂なる『シヨン』山に覓めたらんには縱令下黃泉を極め上碧落を盡くすも。恐らくは彼れを見出すことは出來ぬのである。必らず別峰なる『ゴルゴダ』と云へる刑場に於て。彼れに逢はねばならぬ。『ゴルゴタ』を髑髏と譯す『エルサレム』城外の一小丘にして。當時の刑場である。基督は此にて十字架に懸けられ。其死を望みたる者。此人眞に神なりと嗟嘆したのであつた。

△基督曰く我れと俱に死せざる者は天國に入る能はずと。去れば基督と相見したりと云ふ人は。必らず基督と俱に死したる人でなくてはならぬ。神を觀たりと云ふ人は。必らず神を殺したる人でなくてはならぬ。基督が『エルサレム』の殿堂を毀ちたるは。即ち神を殺したる者である。同時に己れが

殺されたるは神と俱に死したる者である。靈肉俱に滅びて靈肉不二に甦り。神人俱に死して神人一體の蘇生を得る。是れ十字架である。

神と俱に死し。神と俱に蘇るの道理は。實際之を身に驗した人にあらずんば。共に語ることは出來ぬ。獨り禪宗の人は彼等の佛菩薩と俱に死し。俱に蘇つて居る。諸佛教元來殺佛殺祖の道理がある。然れども其の端的を得たるものは甚稀れである。余曾て高野山に在つて故山縣玄淨師に就き。阿字觀を修した事があつた。或時玄淨師曰く我れに殺佛殺祖の劍あり。我祖弘法大師の誡めに三論宗を會せざる者には秘書を繙がしむべからずとある。卿の三論宗に對するの見所若何と。余は余が見所を一偈に賦して直ちに之を呈せり。生相不住滅還差。八不堂前雪似花。閃電猶餘般若手。如何拋擲落誰家。時方に嚴冬の候に際し飛雪紛々庭前の光景に和して大に玄淨師の意を得たり。師は之を肯はれたる後又余に向つて。是れ恐らくは我阿字觀宗より得たるものにあらず。亦卿の十字架教より得たるものにもあらず。蓋し禪宗より得たる見所ならんと語られしに因り。余は其の然らざるを辨じ。更に我が經典を繙いて。一々殺神殺祖の秘密を指點し。之を了義證明せしに。玄淨師頗る奇異の感を催され。其れより余と俱に我十字架教の經典を研贊攻究せられたことであつた。」阿字觀宗の祖。故山縣玄淨師は元是れ明眼の人。其阿字觀に因つて一隻眼を具せられ學德與に相應じ。五千有餘の信徒に擁せられ。佛教界にての大家を以て稱せられ居りしにも係らず。我十字架教に對しては常に謙虛。己れの眞言秘密と對照して。余と俱に比較研究を勉めて居られたのである。師毎に曰く若し弘法大師の時に此の教ありたらんには。必ず之を十住心の中に攝め賜ひしならんと。余笑つて。否弘法大師の明眼必らず我が十卷書を五部秘經の上に置き賜ひしならむと曰ひ爭ひしことなどがある。

我が十卷書と稱するは。創世記。出埃及記。利未記。民數略記。申命記。約書亞書。士師記。路得記。撒母耳記。列王記。の十卷である。秩序あり統一あり。首尾一貫して居る。諸預言者も之より出で基督も之より脫胎したるものである。窮極唯死して蘇るの法にして。其の燔祭は神魔俱に燒き。其洗禮は神魔俱に溺らし。燒き盡し溺らし盡して。意根全く滅する處に復活を見るのである。金剛經に諸佛の正等正覺は皆此經より出づとあり。我が十字架教十卷書に於ても亦。基督の異能權威皆此經より出づと云はねばならぬ。

◎十卷書（二）

『イスラエル』人の祖『アダム』が『エデン』樂苑を失墜してより後。凡そ三千五百年の歷史を。西部亞細亞及び埃及にある彼等の墓中より取り出し。古今未曾有の掘り出し物として。我が同志の中に珍重せられて居る。即ち創世記。出埃及記。利未記。民數略記。復傳。律例。約書亞記。士師記。路得記。撒母耳書。例王記略。以上十卷の書である。吾人是を十字架教の十卷書と稱す。蓋し『ナザレ』

の耶蘇は。其の一生涯の事業。實に此の十卷書を解釋したるものである。彼れは啻に言語を以てしたるのみにあらず。親しく身を以て解釋して居る。耶蘇の行履即十卷書なるか。十卷書即福音傳なるか。彼れ『ナザレ』の耶蘇が最初三十年間の消息は吾人得て得て聞くことが出來ぬ。然れども『ノア』以前を見て『バベル』の塔の出所と。其の性質とを知るべく。『モーセ』の一生涯を研究すれば。自ら其の後身『ヨシュア』を解し得らるべし。耶西の子大闘を見んと要せば。其以前の人物に溯らざるべからず『サウル』は實に其の前身である。『ソロモン』の爲人を知らんと欲せば。其の子『レハベアム』を見るべし。彼れは『ソロモン』の後身である。其の長所其の短所凡べて。其の前後の人に因て。表はされて居る。

吾人は『ノア』の水上四十日を以て。『モーセ』の地下四十年に對すべく。士師時代四百年を以て『ダビデ』の四十年治世に對すべく『アビメレク』を以て其父『ギデオン』を察し。『エフタ』を以て『サムソン』を見。『サムソン』に因て。『ギデオン』を鑑みる等。皆それ〳〵の對照がある。故に『アブラハム』を知らんと欲せば。『ノア』を見るべし。『ヨセフ』を見んと要せば。『バベル』の塔を開くべし。『ヨセフ』の子孫が。埃及に在て四百年。其の何をなしゝやを知らず。然れども『ノア』以前を究めて能く之に對照すれば自ら分明である。」

『アベル』『カイン』の關係は。『イスラエル』人と『バロ』王との關係の如し。『バロ』と『イスラエル』との關係は。猶『サウル』と『ダビデ』の關係の如く。吾人は常に彼れが表を見て。此れの裏を知り。此れの裏を見て。能く彼れの表を解す。故に天に上げられたる『エノク』の子孫には。水上に泛びたるの『ノア』あり。埃及の濕地に下りたる『アブラハム』の子孫には。水中を潛りたるの『モーセ』あり。『バベル』の塔頂。高く其の名を留めんとして失敗したる者。『ヨルダレ』河底。低く其名を殘して成功したる者。各其の由て來る所あり。慢然看過すべきにあらず。『モーセ』は老者幼者六十萬の人衆。其の家畜及び埃及人より掠め得たる。財寶金銀等を併せて。無難に紅海を渡し。『ノア』は潔不潔の動物及び人類の種子。各一對或は數對を。地に遺したり。『ノア』の方舟より割禮を出し。『モーセ』の投水より洗禮を出しゝ等の差別あり。未だ割禮を受けざる者に洗禮を施すべからず。未だ洗禮を受けざる者をして。神殿を建てしむべからず。已に神殿を建て。未だ之を毀たざる者には昇天を許されず。已に昇天を許されたる者。再び此の世に降り來つて。『アダム』以來世々人間のなしゝ事は。凡べて之を爲し盡さゞるべからず。故に耶蘇の三年に因て。其の三十年を知り。其の三十年を以て。『ソロモン』以前の三千年を知らざるべからず。耶蘇の降誕は即ち『アダム』の失墜なり。『アダム』の荊棘林中四千年の苦役は。即ち耶蘇三十年の行動である。

耶蘇三年の傳道も亦。已往四千年間。『イスラエル』人の浮沈に照らして。之を詳にすることが出來る。彼れが三日三夜地下に葬られて。其の間彼れは何をなしゝや。若し之を知らんと要せば。魔に入

り神に入り。天に昇り地に下り。或は異邦人を娶つて他神に事へ。時に散處を免れんと欲して。言語を淆され。主となり賓となり。王となり奴隷となり。明陽に方舟を泛べて。却て暗く。暗裏に約櫃を擔うて寧ろ陽明。三日埃及に拘禁せられたる『ヘブル』人は抑留四百年。三日程『エホバ』を曠野に祭りし『イスラエル』人は。行吟四十年『モーセ』は四十日四十夜飲まず食らはずして山に在り。耶蘇も四十日四十夜飲まず食はずして野にあり。耶蘇の三日三夜は即ち是れ。『イスラエル』人四千年の行路。其の復活後四十日間の説法は。乃し三日三夜。彼れが地下に於けるの行動である。兼ねて亦吾人は。彼れが野に在て四十日四十夜。飲まず食らはずして惡魔に試みられたりと云ふは。取りも直さず是れ。『ヨルダン』河の洗禮。一刹那の內容たることを。明瞭に了解することが出來るのである。

故に彼れの十字架なるもの。其の苦しみの時間を問へば。僅に二三時間。否彼れが最期の一聲。『我が靈爾に托す』の一刹那。其の內容を闡けば三日三夜の埋沒。三日三夜の埋沒は復活後四十日間の説法。四十日間の説法は。彼れが三年間の行動。三年間の行動は。正に是れ『イスラエル』人四千年間の歷史である。

此の四千年間の歷史は。所謂『イスラエル』一師父の墳典なれば。其は墓中より掘り出したる遺骨に過ぎざるのみ。吾人は之に肉を添へ髮を補ひ。始めて彼等の體貌性格を察し。當時の人事を想像せざるべからず。是れ乍併我が十字架上に在つて。全局を瞰下すれば。亦邈焉たるものにあらず。唯老獏窩の講錄を讀め。

一、無眼

昔一人の武者修行者ありけり。日暮れ途遠く。遙に前村を認めつゝ。進み行く處に。一の溪流ありて岩間に渦まく碧潭は。千尋の下。幽なる底に咽びて物悽し。倒るが如き兩岸の上には。唯丸木橋一本を架して。往來の人の用に供してある。流石の武者修行者も。之を見て膽を冷やし。心定めて幾度か渡らんとはしたれども。身戰いて得果さず。兎角躊躇しける間に。後ろより一人の旨者來り。杖の先きにて。橋を探り。頓て其杖を腰に挾みて。宛ながら猿猴の林梢を度るが如く。何の苦もなく過ぎ行きたり。武者修業者之を見て以爲らく。我れは目あるが故に恐れ。彼れは目なきが故に躊躇せずと。是れより後大に發明する所ありて。終に一流の劍法を唱へ。後世の所謂無眼流の祖となれりと云ふ。

肥前の佐賀地方にて行はれたる。彼の體捨流なるものも。元此の無眼流より。派分したるものならむとの説がある。或は然らむ。體捨流は薩摩にても。一時は行はれて居つた。然れども東鄉重位。一たび示現流を唱へてより後は。殆んど勢力を失つて。今日にては獨り佐賀藩の名物として。世に知られて居る。其の示現流と云ひ。體捨流と云ひ。其の術を窮め奧義に達したる人が。肥前薩摩に尙二三人宛は殘つて居る。唯無眼流に至つては。如何なる稽古をなしたものか。何の地方に行はれしか。亦

其の流祖は何の時代に在つて。如何なる人物なりしか。予未だ之を聞き及ばず。然れども我が十字架教は。先づ無眼よりするを貴ぶ。蓋し無眼にして始めて能く。道に入ることを得べく。無眼にして始めて能く。敵及を凌ぎ得らるべし。無眼哉無眼哉。無眼最も是れ。吾人の研究問題である。而して此の無眼の意を知らんと要せば。速に來つて。我が『目なし籠』に入れ。

二、目なし籠

畏くも神代の昔し。我が遠祖。火遠理命。又の名を。天津日高彦穗々手見命と申し奉る。此の火遠理命。兄の火照命に窘められて。一日海濱に徨ひ給ふ。時に鹽椎神來りて。問ひ申しけるやう。命尊き身を持ちて。何故に斯くは衰へ給ひし。我れに事の本末を明かし給はゞ。亦善巧方便もやあらむと。斯く懇ろに申すにぞ。命は世にも嬉しく思召し。某し生れて山の獲物には幸あれども。未だ曾て海の如何を知らず。試みに我が弓と。兄火照命の鉤とを易へ將ちて。海に下りて釣りせんものとて。之を兄の命に乞ふこと再三すれども。許されず。切に乞うて縱に相易へ得て。乃し兄の命は山に入りて狩りし。我れは海に下りて釣りせしも。一も得る所なし。加之某しは其の鉤をさへ失ひたれば。兄命の怒烈しく。某しに元の鉤を需め給ふこと甚だ急なり。某し是非に及ばず。身に佩る所の寶劍を裂きて。五百鉤を作りて。之を償ひたれども受けず。更に一千鉤を作りて。償ひたれども。尙聞かれず。進退窮まりて。此に至れるなりと。始終を包まず。述べ給ひしかば。鹽椎神憫みて。乃ち無間勝間之小船を造り。之に命を載せ參らせて。深く海底に沈め遣りたり。

火遠理命去つて。何れの所に在ます。山河草木是れ命なる乎。潮滿瓊。潮沾瓊。是れ命なる乎。龍神是れ命なる乎。豐玉姫是れ命なる乎。火遠理命は。永久吾人と倶に在ますなり。諸人若し龍宮に遊び。豐玉姫を娶りたくば。我れに來れ。我れ能く鹽椎翁をなして。賢愚貴賤を擇ぶことなく。諸人をして悉く。此の無間勝間之小船に乘らしめん。潮滿瓊。潮沾瓊。是れ別物にあらず。山河草木豈目前の機ならむや。

夫れ鹽椎。之を漢語に譯すれば哲人なり。又智慧とも飜すべし。佛敎に所謂般若波羅密多是れなり。無間勝間之小船。後人之を呼んで『間なし籠』。又『目なし籠』とも云ふ。即ち『無眼耳鼻舌身意』なり。此の『無眼耳鼻舌身意』の船を浮べて。時に『アラヽット』山上に遊び。時に蒼龍窟に下つて珠を將り。或は鉤を四海に垂れて。獰龍を釣る等。豈愉快ならずや。日月を拏き。雷霆を驅るの手も。亦是れ這裏の人に屬す。大和民族の本領を知らんと要する者。須らく下文に意を注ぐべし。

三、反　間

昨今露西亞人の間に。抱腹絶倒に堪へぬ噺が傳つて居るとて。新聞に見えて居る。故廣瀨中佐は露

西亞に留學して。露西亞魂を養ひたる結果。軍神とまで仰がれ。黑木大將の祖父は。西伯利亞の片田舍『カイクタ』の近村に生れたる者。大將の智勇拔群なるは。畢竟露西亞の血液あるが爲めなりと。又曰く。獨逸を苦しめたる『ナポレオン』一世は。獨逸人の後裔『ナポレオン』の覇權を奪盡したる『ウエリントン』は。佛人の血液を遺傳して居つたものであると。

予は之を見て。面白き說をなすものかなとて。感心して居るのである。吾人は今現に魔城に攻め寄せて。敵の珍寶奇財。及び上田下田の術を奪ひ去らんとして居る。『モーセ』曾て。埃及王『パロ』の女に救ひ上げられて。其の子として宮中に養はれ。埃及國の天文學地理學。陰陽術算術悉く學び。人情風俗悉く知り盡して。其の國を逃げ去つて居る。是れ即ち『モーセ』が。埃及人を殺して。沙中に埋めたるの端的である。上は宮中の事。下は民間の情及び國家の秘密を。悉く知り盡したる彼れを。國外に逃がし置くは。甚だ危險な事である。『パロ』が頻りに。彼れの生命を討ぬるも無理はない。孫子の用間篇には。此の處を委しく論じて居る。曰く凡そ師を興すこと十萬。出でゝ千里を征す。百姓の費へ。公家の奉。日に千金を費す。內外騷動道路に怠る。事を操ることを得ざる者七十萬家。相守ること數年。以て一日の勝を爭ふ。爵祿百金を愛んで。敵の情を知らざる者は。不仁の至りなり人の將に非らず。主の佐に非らず。勝の主に非らざるなりと。日本は古來能く之を實行したる國である。聖德太子の如きは眞に。人の將。主の佐。勝の主である。太子の術は唯每日此の用間の一法あるのみ。獨り外交に於いてのみ然るにあらず。內政に於いても道德に於いても。每に用間の外に出でず。其の馬子に對するにも。後日馬子が刑せらるゝの刑具は。馬子自身に造らせて自ら死途を急がせて居る彼れは己れの箭に己れが中つたやうなものである。是れ所謂因明術にして。基督の敵を挫く。必らず悟他の法を用ゐて。敵をして自殺せしめて居る。而して此の術を能く用ゐたるものは。舊約の諸先輩皆一樣なれども。殊に『サムソン』の如きに至つては。殆ど干戈を動かさずして。大平を來たした者である。彼れは先づ敵の女を娶つて。孫子の所謂反間を爲し。已れ廢せられて所謂死間をなし。其の鄕人と交つて。所謂因間を爲し。唯多く用ゐざりし者は。內間と生間との二間である。而して『ダビデ』に至つては。其の『サウロ』に對し。『アブサロム』に對し。乃至其他の敵國に對して。因間、內間、反間、死間、生間の五間俱に用ゐて居る。孫子曰く五間俱に起つて。其の道を知ることなし。是れを神紀と謂ふ。人君の寶なりと。敵國の語を知り。術を知り。情を知る者は。眞に寶である。而して龍神を對治するには。先づ龍宮に入らざるべからず。

四、龍性

東部亞細亞にては。每に龍と蛇とを區別して。繪に書いた龍などは。隨分すさまじき者である。支那人は龍德を贊して能く幽に。能く明に。能く細に。能く巨に。能く短に。能く長に。春分には天に

登り。秋分には淵に潜むと云うて居る。『モーセ』の一杖子。能く乾坤を呑み。之を擧ぐれば。『ナイル』河の水。血と變じ。之を卸せば舊の河水に復し。之を放つ時には蛇となり。之を收むる時には杖となり。或は紅海の浪を開くにも。又之を閉づるにも。唯一本の杖能く潮沾瑕。潮滿瑕の働きをなして居る。是れ即ち龍德にして。人々箇々圓具の性である。又其の形ちに就いては。九似を說き。頭は駝に似。角は鹿に似。眼は鬼に似。耳は牛に似。頂は蛇に似。腹は蜃に似。鱗は鯉に似。掌は虎に似。背に八十一鱗あり。九々の陽數を具す。其の聲銅盤を戛つが如く。口の旁らに鬚髯あり。頷下明珠あり。喉下逆鱗あり。頭上博山あり。氣を呵して雲と成す。既に能く水を變じ。又能く火を變ずと云うて居る。若し默示錄を繙いて。之と照らさば。思ひ半ば過ぐるものあらん。人の靈眼を顯はすに牛を以てし。獅子を以てし。羊を以てし。龍を以てし。其の聲大水の轟きの如く。髮雪の如く。眼星の如く。兩刄の焰劍を。其の口より吐き。其の色靑銅の燒けて火に在るが如しと。智門を言ふ其の裏には。曾て屠られたる羔の如しと。早變りをさせて。能く悲門を說いて居る。『ヒゼケル』『ダニエル』等。皆此の筆法である。」

印度は又格別で。其の說き樣も一種面白い。不動明王の如きは。俱利伽羅龍劍を纏ひたる姿を畫いて之を不動の種子に形どつて居る。是れ即ち龍性を以て。大日及び不動の根本種子を表したものである。

五、不動

其の俱利伽羅龍は。即ち不動の羂索を表し。劍は右手の拆伏門を表して。攝取不捨の慈悲門と。相離れざるの意を示したものである。『イスラエル』人が。亞拉比亞の沙漠中に在つて。神を恨み『モーセ』を呟きし時。其の罰として。神は火蛇と稱する。一種の蝮を降して。彼等を嚙ましめ給へり。彼等の悲鳴天に達し。神は『モーセ』をして銅蛇を造り。之を竿頭に揭げ。彼等に見せしめ給ひければ。痛傷皆癒へ去つて。瘡痍悉く除かれたりとあり。是れ即ち眞言にて修する。俱利伽羅不動と同一の思想にして。俱利伽羅とは蓋し無熱の意。葱嶺の北腹にある。『カラクル』湖の主神である。印度人は其の湖水を阿耨達池と呼び。支那人は龍池と稱して。中央亞細亞の南部に在つて。雪山四方より圍み。地方の靈池となつて居る。

抑も印度の明王部は。皆此の不動より割り出したるものにして。不動の起源は實に此の俱利伽羅不動に在り。之を大日及び四如來等に配當したるも。實は龍樹以後。波斯及び『イスラエル』人の思想を。佛敎に會入したるまでの事である。默示錄には前にも言へる如く。外面に忿怒の相を現はし。內心に慈悲を藏する。所謂印度の明王部と齊しきものを畫き出して居る。又波斯にては火敎派の祖『ゾロアスター』を始め。諸〳〵の神々皆此の。不動尊式の姿である。夫れ吾人の心月輪上に。嫉妬の種字

あり。字形變じて劍形となり。劍形變じて忿怒の相となり。其の色青黑にして。常に火焦三昧に往するの思想は。南方佛教に全く之れなし。釋迦滅後凡そ四百年の頃。大月氏國王。迦膩色迦。天下の僧侶を召集して。佛教の經典を結集せり。之を第三回目の結集となす。支那には即ち此の大月氏國より傳へたるものである。迦膩色迦王の領せし地は。今の中央亞細亞。『アフガニスタン』『ベルチスタン』及び北印度の一部にして。南印度の僧侶は。一人も此の召集に應せしものなかりしと云ふ。之より後ち佛教は南北兩派に分れ。北派は寧ろ雪山以北の思想を。澤山會入して居る。龍樹は多分此の時代の人にして。或は迦膩色迦王を補けて。此の事業を成功せしめたる者は。龍樹ならむとの說もある。其れは兎もあれ北派佛教の祖が。龍樹菩薩たることは。其の敎義に鑑みて。一般に疑ひを容れざる所である。

六、銅蛇

默示錄及び『ヒゼケル』等に在る。不動明王の姿には。印度と同じく。所謂佛、菩薩、人間、天上、地獄、餓鬼、畜生、修羅等の。相を寓して。一目其の內證智を。窺はれるやうに。畫き出して居る。其の水火の間に在つて。動著せざるの意も。其の聲大水の響の如しと云ひ。口より焰劍を吐き。身は青銅の燒けて火に在るが如しと云へる中に。自ら其の寂靜智を寓して居。而して此の明王の內證智は即ち基督である。基督の內證智は蛇である。蛇の內證智は七性に分かる。神なる蛇。天使なる蛇。預言者なる蛇。神子なる蛇。常人なる蛇。惡魔なる蛇。盜賊なる蛇。佛教の龍は六性に分かれて居る。其は神子なる蛇と。預者者なる蛇とを一つにして居る故である。支那人が九似を說けるも。亦龍の九性を表したるものなる處に。眼を着けざるべからず。」

彼れ七性を具有したるの蛇。曾て『アダム』『イーヴ』を誘惑して。『エデン』の樂苑を失墜せしめたり。此の蛇。再び亞拉比亞の野に現はれて。六十萬の『イスラエル』人を苦しめける時『モーセ』銅にて其の形を造り。之を竿頭に揭げて。大衆に見せしめたるに。大衆の瘡傷癒へたることは前に書せり。扨此の不思議なる蛇は三たび『パレスタイン』の野に出現して。大水の聲能く衆耳を劈き。滿地の人をして。其の恢網を出ること能はざらしむ。衆皆怒つて之を十字架に懸けしに。不可思議。不可稱量の彼れは。三日にして蘇り。今尙生きて吾人に說法す。彼れは今ある者。昔ある者。最始最終の者。『アーメン』なる者。而して彼れは水に入つて。形ちを變へず。火に入れても滅せざるの銅である。吾人之を以て。祭壇を飾るべく。武器を製すべく。飯を炊ぐべく。『マナ』を貯ふべし。鐵が今日の必需物たるが如く。銅は其の頃。日用缺くべからざるの寶材であつた。此の寶材を得んが爲めに。魔に入り神に入り。地獄、餓鬼、畜生に入り。乃至盜賊の群れをも厭はぬ。我が遠祖。天津日高彥穗々手見命は。『日なし籠』に乘じて龍宮に入り。先づ最初其の相見たるものは什麼ぞ。

◎薩摩宗

維新以來。隨分澤山傑傑出た。然しながら何んぼ傑傑でも。自ら獨りで出られるものではない。必らず之を造り出すの動機がある。時勢の要求あり。山河の感應あり。教育の陶鑄あり。社交の刺激あり。其の他宗教に文學に。世間百般の關係は。內外より刺衝來坑して。千差萬差の葛藤に絆纏せられ。其の中に在つて呻吟する間に。自然出身の路を與へらるゝのである。夫れ人には愛せられたい。敬せられたい。又人に勝さりたいと云ふ慾望心がある。此の慾望心は即ち。吾人の本能である。故に如何にせば。人に勝さることが出來るか。如何にせば人に愛せらるゝことが出來るか。又如何にせば人に敬せらるゝことが出來るかの。研究問題は人々皆天より與へられて居る。此の問題の解決をなすに就いて。茲に吾人は始めて修行と云ふものを要するのである。

然らば則ち如何。吾人が此の科學に應じて。今量出する所の答案を檢するの試驗官は誰ぞ。天なるか將た人なるか。抑も自己の本能なるか。若し人なりと言はゞ。天と自己とを如何にせん。吾人は人を標的として。一日も安ぜらるゝものでない。若し之れに安んずる人ありとすれば。其の人は必らず鄙愚である。若し天なりと言はゞ。一方に限られたる天なるか。遍一切所の天なるか。心內の天なるか。心外の天なるか。若し神の異名なる天なりとすれば其は一神なるか汎神なるか。抑も亦多神なるかの問題が。直ちに蝟集し來るのである。

然れども是等は皆西洋流の疑問である。我が純粹の日本人には決して。箇樣な面倒臭ひ問題も起らず。又疑問もない。我が日本流は至極簡單で。而かも衆流被斷的である。

若し我が日本人に。汝が天より與へられたる問題に對して。如何なる答案を量出するやと問ふものあらば。一も二もなく直ちに我が事業は是れ即ち我が答案なりと答ゆるであらふ。然り。吾人の答案は是れより外にはない。政治家は政治の伎倆を以て答へ。武人は武の功德を以て答へ。道德者は道德を以て答へて居る。皆それ〳〵の事業が。それ〳〵の答案である。畫の答案あり。彫刻の答案あり。其の他百藝百能。皆是れ答案あらざるなし。而して之を檢定し之を採否するの試驗官は。寧ろ自己の本能である。是れが即ち從來。純粹の日本人にして。自覺心と云ひ。本能心と云ひ。好心自性と云ひ。隨神の道と云ひ。乃至陽明の良知良能。皆是れ日本人の一番好きな神樣である。

我が日本人は。極端なる一神教信者である。又極端なる多神教信者である。同時に極端なる汎神教信者である而して一人にして之を兼ねて居る。之を要するに日本人は本能教の信者である。」

從來孟子の教育は。至て中庸を重んじて居つた。而して此の「中」の取り樣も支那人とは異なつて。共通性の意味に取つて居る。譬へば孟子が。伯夷は狹し柳下惠は卑しと言へば。支那人は直ちに其の中間を取れと云ふ。日本人は然らず。柳下惠の卑き所に柳下惠の中を認め。伯夷の狹き所に伯夷の中を認して居る。日本人は何處までも狂狷である。」

又日本人は戀愛本位である。一休和尚が「我のみか釋迦も達磨も阿羅漢も。この君ゆゑに身を焦しけり」とは。能く日本人の性格を歌うて居る。日本人には利害心が至つて鮮い。貧乏は覺悟で畫家になる。損は覺悟で武士の意氣地を立つる。

かくすればかくなるものと知りながら
止むに止まれぬ大和魂

蓮田市五郎

是れが日本魂である。女も男も百姓も町人も。皆此の戀愛心を以て立つて居る。孝とは親に對しての戀愛心である。忠とは君に對しての戀愛心である。朋友に對し社會に對し。戀愛心ならざるはなし。今日技藝に對して天才と云ふは。或は日本にては。技藝に對して戀愛の強き人と言つて居つたかも知れぬ。

日本人は斯くの如き性質の者なるが故に。半面には非常に激烈なる嫉妬心を以て居る。熾劍を其の口より吐き。足は青銅の燒けて火に在るが如しとは。能く日本人の敵愾心を形容して居る。

日本人には何如なる高等の宗旨もある。又何如なる下等の宗旨もある。而して其の共通性を知るが故に決して爭ひが起らぬ。一人にて佛教にも之き神道にも之き。耶蘇も孔子も。乃至一神教多神教汎神教。自己の概念の下に置いて。其の間全く無碍礙である西洋人は之を見て奇とすれども。日本人にしては決して怪むに足らぬ。

日本人の特徵は尙澤山ある。迚も一時に言ひ盡くせるものではない。然れども一言以て之を蔽へば。「本人は悟つて居る。其の悟道が何處から出たかと言ふに。武的修養より出たものである。忠孝も武的修養に因つて習ひ。文學技藝其他皆武的修養に因つて習うて居る。支那人を知るには彼等の書道を知らねばならぬ。英吉利人を知るには彼等の利學思想を知らねばならぬ。露西亞人を知るには彼等の天を知らねばならぬ。佛蘭西人を知るには。彼等の審美思想を知らねばならぬ。獨逸人を知るには彼等の思索力を知らねばならぬ。英吉利人の創建的なる。獨逸人の秩序的なる。佛蘭西人の虛華的なる。露西亞人の同化的なる。皆〻の由つて來る所がある。日本人の「花は櫻木人は武士」其の意氣な所。皆ま我慢な所。固より因て來る所を見ればならぬ。西洋人が二十年三十年日本に居ても。我が從來の武的修養を知らねば。決して日本人を見ることは出來ぬ。

如上の如き關係あるを以て。維新以來の豪傑を見るには。先づ其の土地の教育及び風俗を知るの必要がある。薩藩の故老の言を聞いて。是等の研究をなすにも。須らく念がればならぬ。今已に澤山は生き殘つて居らぬ。野村綱と云ふ人などは。隨分慨嘆して居らるゝ由を聞く。余未だ一面識なし。其の人今宮崎に居らるゝを以て。門を叩くことも出來ぬ。甚だ殘念に思ふのである。願くは野村綱氏に限らず。薩藩の教育及び武的修養に關すること等。其の材料を與へられなば。一々此の欄内に掲載することゝせん。

夫れ我が十字架教は。死して蘇るの道である。其の生命を惜むものは却つて之を失ひ。其の生命を捨つるものは却つて之を得といふの教えである。而して薩藩の教育恐らくは之より外に出でゝ居らぬ。禪陽明等の教義も大死一番再活現成の外はない。悟道とか見性とか云ふのも皆是れ復活底の當體である。

扨其の見性と云ふのは即ち。自己の本能を認得したるの謂にして。悟後の修行とは本能發揮に外ならず。日本の武士道教育は實際死して復た蘇るの仕組なれば。天地一體萬物同根の端的を得るにも。坐禪を要せず觀念を要せず。直ちに是れ動中の禪を以て。尚親密に得らるゝことが出來る。默照禪や。野孤禪に陷るの憂ひもない。「博く學び内にして出さず」是れ薩摩御流儀示現流の格言なるのみならず。薩藩の武士道教育一般是れである。東郷平八郎等の振舞を見て今更のやうに驚くなかれ。彼等にしては蓋し尋常の茶飯のみ。」

余が茲に薩摩宗と題する所以は。薩摩人には自ら一種の宗旨がある。薩摩人と接して大に他の諸藩人と異なつた點を見る。是れいろ〳〵の原因あれども其の示現流は。殆ど彼等の經典である。先づ示現流に就いて。其の教義が事上に顯はれたる特殊の二三點を示し。次號にて其の性質と由來とを研究すべし。

示現流

『濁り江にうつらぬ月の光哉』。と是れ天正の昔し。京都天寧寺の住職。善吉和尚が。東郷肥前守源重位に。密傳附囑したるの一句である。此の一句は即ち。示現流十二秘法の總持にして。實に薩摩宗の陀

羅尼である。惟新齊島津義弘が。關ヶ原の役に。東軍の本營を踏んで東に遁れ。却つて身を全ふした る驗めし。樺山資紀が。黄海の戰ひに。敵艦を衝いて。却つて安全界に入りたる跡。人皆之を知り之を稱せざるなし。然れども其の何を以て彼等は能く此の活路を知り。之を實行し得たるかと。云ふに至ては。世之を知る者甚だ稀れである。薩摩人は唯勇怒と云ふのみにては。恐らくは彼等を滿足せしむることは出來まい』。

陸に黑木等あり。海には東郷等あり。海陸多くは是れ。薩摩人に因つて將ゐられ。奇功を奏しつゝある。今日に當つて。薩摩宗を研究するは。彼れ等を稱贊するが爲めにあらずして。實に我が十字架教〻薩摩宗との間に。手を携へてゆく所あるが爲めである。世人は陸戰に於ても海戰に於いても。彼等が能く。敵の。射角に入り。殆ど敵の脚根を捉へて。之を斃すが如くなるを見て。或は隼人民族の豬突となし。蠻風となし。久しく武門に養はれたる習慣となし。命知らずとなし。西洋ハイカラ等に至つては。或は見て忠義病に罹りたる。一種の迷信的行爲となすものもあらん。又名譽に驅られ。客氣に煽られ。乃至愚直の民。算數に暗らきの徒となすものもあらん。彼等は從來算盤こそ彈かざれ。決して算數に暗らきの徒にあらず。愚直の民にあらず。寧ろ狡猾と呼ばるゝの民である。彼等は名譽に驅らるゝ者にあらず。客氣に煽らるゝの輕進者にあらず。寧ろ利害心に富み。沈重寡默。敵を殼中に引くまでは。容易に箭を放たざるの民である。彼等は開國の時。已に世に先だつて西洋の文物を輸

入し。宇宿彦之丞。松木廣安。五代友厚の三人を。長崎に遣して。和蘭人に就き。西洋式の築城法。造兵術。及び理科學を學ばしめ。寺島陶藏をして醫學を修めしめ。藩主齊彬公日夜蘭學者を引き。侍講せしめ。取長補短の說を唱へ。富國强兵を急務とし。築港開鑿等。自ら之を董し。洋式の兵法は更なり。運送船軍艦までも。他藩に先だつて。之を購ひ。一方には漢學の弊を正し。其の學令十箇條の如きは。横井小楠や。佐久間象山などの見識が。遠く及んだものでない。其の頃已に諸學諸流の。比較研究を奬勵して居る。彼等は決して蠻カラでない。暴虎馮河の無謀者でない。更に嘆稱すべきは薩摩宗の人に。翩々たる才子風の人が甚だ鮮ない。彼等は大抵無學である。乍併智慧者である。其の愼密なること。機敏なること。到底長州人や佐賀人の。及ぶ處でない。彼等が交際の術に長けたること經濟の道に賢きこと。樸なること。優なること。諂はざること。遣さゞること。職務に忠實なること。長を敬ひ下を愛しむこと。寛容なること通人なること。萬事見かけに似ざること。皆是れ世の勝利者たるに足る。然り彼等は現に同胞中の勝利者である。」

「無論彼等に短所なしとは言はず。然れども兎に角。日本人同士の中にては。優に長者として愛敬せられ得るの。資格を備へて居る。何を以て彼等能く。是くの如くなるを得たるか。薩摩宗の精神敎育は。實に其の養素である。」

「蓋し諸藩皆精神敎育を本とし。君父の爲めに命を捨つるを以て。最終の目的とせしは。皆同一である。然れども其は唯議論と理想のみで。事は半ばにも及んで居らぬ。鹿兒島は然らず。彼等には議論もなければ理想もない。否議論する間も理想する暇もないのである。直下に之を實行せしめて。電光石火。勢の序破急。節の上中下。之を家庭の內。社交の間に。日々否時々刻々。之を實習せしめて居る。舊傳家の常套語に。水到つて渠成る。遣つ付くれば案外に易い。と云ふ覺悟を平生に心懸けしむるのである。舊傳家とは即ち舊傳來學者にして。所謂薩摩宗の傳道師である。本論に入つて。追々是等も委しく述ぶべし。又表德流の修養家には。折田要藏。猪賀源四郎。中江弘三等の類ありて。一休や澤庵も。餘り威張り切れぬ程の。機鋒を持つて居る。是等皆薩摩宗の修養より。出たるものにして世間一般の頓智家流とは。自然異なつた所がある。要するに彼等は。我が十字架敎と等しく。大死大活。全滅全生の道理を會得して。之を事上に施すのである。

彼等は決して智解情量の人にあらず。信得體得。之を心に得ずして。先づ身に得るの研究をなして居る。故に最初兵子組には。必らず不淨觀的の小乘戒を持たせて居る。恰も我が十字架敎にて。洗禮の前に先づ。割禮を受けしむるやうなものである。『アブラハム』の前には。是非『ノア』がなければならぬ。『アブラハム』は即ち『ノア』の復活である。

陸象山が曾て。湯の盤銘を座右に掛けて。唯每日。『日に日に新たにして。又日に新たなり』と。之を唱へ之を觀じ。靜座の時も。行步の間も。此の一句子を拈じて片時も之を離れさりしと云ふは。蓋

し彼れが。『窮すれば則ち通ずの』。道理を工夫して。絶じて而かる後ち。始めて茲に蘇息するの端的を會得したるものに相違ない。薩摩宗の信者に至つては。日日死して日々蘇り。刻々窮して刻々通ずるの術を其の示現流に於いて之を修め。其の社交に於いて之を習うて居る。彼等は活潑々地。日々新鮮なる腦髓と身體とを備へて。常に不老不死の境界である。其の言ふ所行ふ所。眞に若か〳〵しきものである。

黑住教祖。黑住宗忠の教えが。此の若か〳〵しき所を。第一に修行せしむるのである。故に曰く若くなれ。若か〳〵しくなれ。不老不死の境に入れ。生物を捉へよと。黑住教にては老ゆると云ふことを嫌ふ。我が十字架教にても。第一此の老ゆると云ふことが。禁物である。常に生命菓を食うて若くならねばならぬ。此の教えを信ずる人は。自然若くなるのである。薩摩宗の信者が眞に若い。今の元老其の他。薩摩の諸先輩に逢うて見給へ。若いこと〳〵殆ど十七八である。其れに引き替へ。同じ薩摩人ながらも。赤門信者などは。三十以下で親父然として居る。彼れが白髮の童子ならば。此れは黑髮の老翁である。」

薩摩宗の開祖。東郷重位と云人が。いつまでも若か〳〵しかつたと言ひ傳へてある。其の後裔東郷寶政氏。芝の魚藍觀音の門前に住んで居らるゝ。已に六十二三なるよし。性來好きな。酒、圍碁等を全く廢して。親しき仲間にも遠ざかり。內に引籠つて居らるゝ。キチンとした運働時間の外は外出もない。友人怪んで。何をして居らるゝかと尋ねて見れば。是れは驚いた。去年より英語の研究を始めて。此の節は已に歷史ぐらいは讀めると云ふ噺である。是れまで武邊の修行のみにて。餘り腦を耕した人ではない。老後の思ひ出。世人は隨分殊勝に感ずれども。薩摩宗の信者には珍らしきことでない大山權山等皆此の類である。」

覺ゆるが易いか。忘るゝが易いかと言へば。覺ゆる方は甚だ易い。忘るゝ方は甚だ難い。禪宗にては覺ゆる方が三年なれば。忘るゝ方の修行を七年にして居る陽明然り。我が十字架教然り。元來宗教と云ふものは。覺ゆる爲めの修行は全くないのである。談話も聽かする。書物も讀ますする。乍併是れ忘れしむるの爲めの談話。忘れしむる爲めの讀書である。否從來見て居ること。聽いて居ること。乃至知つて居ることゝ悟つて居ることを。善惡邪正に關はらず。悉く奪却し盡すのが。我が十字架教である。禪、陽明等一棒一條の痕。悉く是れ此の作略に外ならぬのである。今度の第二艦隊の司令長官。上村彦之丞は。禪を修行した人でもない。陽明學も十字架教も知らぬ。然れども彼れは。禪僧もお智識も及ばぬ所を持つて居る。彼れは眞に。絶學無爲の閒道人である。彼れは學校にも居り。洋行もして。軍人社會にては。能者學者である。然れども彼れは全く習氣を離れて居る。毫も束縛せられた所がない。誰れが見ても無學文盲の人である。彼れ曰く精神教育は。日新公の伊呂波歌で澤山だ。金州丸の厄より常陸丸に引續いて。新聞などでは隨分攻擊もあつたが。而して陸海軍部內の人は然らず。彼

れが平常職務に忠實なるを見て居る。細心緻密なるを知つて居る。勇敢にして謀略あること。寛恢にして能く人を容るゝこと。謙遜にして下問を耻ぢざること等。彼れの爲人を豫ねて知りたるものは。未だ一人も彼れを咎めぬ。唯深く同情を寄せて居る。

上村に反して。全く讀書力なく。訓點の力で。ヤット靖獻遺言を。偏と傍とで。而かも重箱讀みに遣つ付くる。歩兵中尉大浦兼武は。亦學者も及ばぬ。頭を備へて居る。宗教にては調直と云ひ。專心一意と云ひ。無念無想と云うて。所謂三昧に入らしむるのが。一般の修行である。然れども示現流の無念無想には到底及ばぬ。示現流にては。若し有念有想なれば。敵と立合ふことは出來ぬのである。禪宗にても。孤危險峻。惡辣な和尚の室に入るには。隨分恐ろしいものである。然れども示現流の本場稽古となつては。全く命の取り遣りをするので。眞劍勝負と少しも異つたものでない。其の極意は唯。人を殺さんとするものは。先づ己れの命を捨てろと謂ふのである。此の捨命投身の教えは社交上にも執務上にも。自然波及して居る。否此の懸崖撒手的教基の上に。彼等の社會が組織されて居るのである。

大浦兼武が職務なるか。職務が大浦兼武なるか。兼武と職務は全く一體である。世人は謂ふ大浦兼武は職務の忠僕なりと。余は曰ふ職務と兼武は。互に相忘れて居ると。斯く無念無想を養ひ得たるは彼れが薩摩宗の庇蔭に成長した爲めである。爲君幾下蒼龍窟職務三昧になるとか。對待相絶するとか。乃至彼我相忘るゝとか。云ふ境界を得るには。幾たびか蒼龍窟に入つて。頷下の珠を採るの思ひをなした人にあらざれば出來ぬことである。」

◎澁川流の柔術と十字架教

澁川流の遠祖關口氏成

澁川流の柔術を評するには。最初其の遠祖。關口氏成。及び其の子氏業を。見て置かねばならぬ。

關口氏成は。本と日向の人。初め柔術を以て。紀州の南龍公を干し。終に公及び閤藩の歸仰する所となり。紀藩の師範役として。子孫世々業を承けて。和歌山に住せり。氏成の逸事逸話に就いては。和歌人士の口碑に傳ふる所。頗る多き者にて。中には神怪に渉ることがある。兎に角。當時の人に。鬼神の如く敬畏せられて。居つたものと想像せらるゝ。蓋し氏成は其の頃一般武人の常例に洩れず。文字には稍疎き方なりしならむ。然れども。南龍公と氏成との關係は。猶三代將軍家光と。柳生但馬守との關係の如きものにて。兩人の間は。頗る親密であつたやうに傳へてある。時に師資の如く講究

授受し。或は朋友互に。其の私を輔くるが如く。殆ど君臣と云ふ上下の離を撤して。相親まれた場合も見ゆる。又往々。内外の樞機に參して。意見を奉り咨詢に應じたるなどの。形跡もある。

夫れ南龍公は。英邁の資。宗家の老臣等。之を忌めども亦如何とすること能はず。一たび其の爪牙に觸るゝ時には。いつも氣を呑み。手を收むるのみであつた。此くの如きの人に事へて。此くの如きの親幸を受けたる氏成は。其の頗る英靈漢なりしこと。是れ亦疑ひを容れず。彼れは。他の兵家者流の言を聞いて。席上の水練と嗤ひ。機鋒頴脫。作家と稱せられたる禪僧等も。往々虎鬚を捋るの。思ひをなして退いたとある。唯單に。柔術一片の自得。其の應機接物の用。實に萬境に臨んで。礙へられなかつたものと見ゆる。

氏成は。八幡太郎義家の爲人を慕ひ。一生之に私淑して居つた。彼れ三男二女あり。之に命名するに。八幡太郎義家の五字を配して居る。即ち長の氏業を八郎左衛門と稱し。次の氏英を幡右衛門と稱し。季の氏曉を彌太郎と稱し。又二女をお義お家と名づけて居る。初め氏成は。瀧野彌六左衛門と稱したことがある。季子氏曉にのみ。特に己れの諱を分けて居るが。此の子果して。武名を揚げたるや否やは。記錄に傳はらず。唯俗說には。一生名を晦らまして。函根峠の轎夫に身を寥し。許多往來の人を鑑せし中に。獨り宮本武藏を得て。之に法を傳へ。後ち終る所を知らず。と云ふ噺が殘つて居る兎に角。關口彌太郎とて。當時天下の人に。想望せられたるものに相違ない。而して能く父の業を承げ。衣鉢を澁川流の祖。澁川義方に傳へたる者は。長子八郎左衛門氏業である。

世の勝利者

夫れ戰ひは勝に在り。然れども百戰百勝。必らずしも善の善なるものではない。未だ戰はずして。能く敵を屈するもの。是れ眞の勝利者である。『ヤコブ』は。其の髀樞を折られても。『イスラエル』(勝利者)の名を失はず。基督は。身將に殺されんとする時に。我れ世に勝てりと言ひたるが。果して彼れは。世の勝利者にてありき。十字架敎十卷冒の中。士師記には。『ギデオン』と云へる勇士が。常に表を行き。己れの劍を以て他を殺し。又『サムソン』と云ふ力士が。毎に其の裏を取つて。敵の棒を用ひ。敵を殺したる。二樣の戰術を書いてある。然れども。畢竟するに『勝』の一事は。其の何れよりするも。吾人の理想である。

若し夫れ。我が遠祖。天忍穗耳命に冠するに。正哉吾勝勝の名を以てしたる由緣を攻へ。更に十字架敎眼を以て。之れが宗敎的趣味の。解說を施すを見て。從來の兩部神道家。及び垂加神道者流。果して怎麼の感を催すか。讀者をして能く。吾人平生の直覺を。會得了する所あらしめ。與に手を携へて。有文千二三百年間の。葛藤を出で。覿面相逢うて。天神と俱に語るを得ば。正哉吾勝勝。是れ別人の稱號にあらず。偏へに悲しむ。大和民族の眞面目は。支那印度の文物に覆はれ。降つて御用學問

の浮雲となり。官房學の濃霧となり。偶〻庭前に馥ふ八重櫻は。是れ當年旭日光頭。天心を競ひし山櫻花にあらず。正哉吾勝勝の大和民族。誠に善く。世の勝利者たるの名に負かず。活氣活體。未だ戰はざるに敵を屈し。己に敗れたるものに勝つの。手脚を具せんと欲せば。當に如何して可なるべきや。此の消息を今日に傳ふるもの。獨り澁川流を舍いて。他に見る處なし。是れ吾人が。柔術において全く門外漢ながらも。敢て我が專門の十字架教復活說に。比較商量して。世人をして自ら。其の間に體得する所あらしめんと欲する所以である。而して。最初より勝ち盡くすが是乎。先づ負け盡くして而して後ち復活するが是乎。之を明らかにするには。玆に氏成の子。氏業を紹介せざるを得ず。

關口氏業

柔術一片の自得を以て。其の用は千變萬化。人事に天道に。學者も來い坊子も來い。時に政治家と語り。時に美術家と親しみ。水泳には海士を。後へに瞳若たらしめ。木登りには。猿も三舍を避くるの能者。武藝十八番の奧義を。窮め盡したる達人。關口柔心氏成は。慶長二年の生れにして。寛文十年和歌山に歿せり。歿する時已に七十四歳の。高齡に達し居りしも。平生の靈氣は。尙彼れが烱々たる眼光と。滿面の紅色とに。溢れ居たりと云ふ。氏成通稱を八郎左衛門と曰ひ。其の長子氏業も亦八郎左衛門。氏業の子氏連も。亦同じく八郎左衛門と稱せしを見れば。八幡太郎の八の字は。何處までも。關口家の印璽である。八幡太郎。勿來關外に落花を詠じてより後は。到る處の關門。一彈指の下八字に豁開したるを追想して。吾人は亦關口流の柔術。善く天下の鬼門を撤し。魔殿を除きたるの蹤跡を。聯想せざるを得ず。

氏業は魯伯と號せり。天性不羈。其の强頸には。父氏成も。軛を施しかねたりと云ふ。十五歳の時家出したる儘歸らず。固より親の箕裘を紹ぐの。志もなかつたと見ゆる。然れども壯年に及んで。父の病い篤しと聞き。悔恨自ら禁ずる能はず。急ぎ歸りて。之を省すれば。父は已に言葉なし。唯臨終の際に。一言之を氏業に傳へよとて。母に貽し置れたる語があつた。曰く『臍腹綿食い拔いてなりと勝て』と。

氏業が。此の一語を母より傳へ聞きたる時。如何なる感をなしゝか。吾人は之を知るを得ず。又玆に其を詮索するの必要もなし。吾人唯彼れ氏業が。此の一語に耳を裂かれてより後は。之を坐右の銘となし。之を斯道の秘訣と信じ。『勝』の一字關。竪に咬み横に咬み。咬破し盡くして。細嚼又細嚼。裏より潛り表より推し。或は歸納し或は演繹し。術に試み思ひに凝らし。終に父氏成の藝術十八番。悉く徹底曉通して。胸中又一塵の立するなく。覩面父氏成に相見し得たるを知る。恰も是れ粟粒大の鯉子を咬破して。其の中より。大鵬九萬里を出したやうなものである。

夫れ澁川流には。來學を接するに。順下逆上と云ふ語がある。字義より言へば。一多。多一の外に

出でず。然れども。禪宗の所謂棹上抑下。又臨濟の奪不奪等の場合にも用ゐてある。蓋し氏成は善く其の子を識るもの。彼れが『勝』の一字關を以て。剛愎彼れか如きの氏業を接得したるは。自ら術ありと謂ひつべし。陰氣なお念佛を喜ぶ道行衆あり。陽氣な題目を有りがたがる信者連あり。陰性陽性一律にはゆかぬものである。大隈重信や。故星亨に向つて。勝たんと欲する者は先づ負け盡くせとか。强からん爲めに先づ弱くなれとか。言うて聞かせてもどかしくて到底彼等の耳には這入らぬ。勝て！。强かれ！。の正令を提げて。驀地に進入せしむる外はない。

負け盡くせ

然れども。我が十字架敎の立義は。自ら是れ。南に向つて北斗を見せしむる方にて。强からん爲めに。先づ弱くならねばならぬ。勝たんが爲めに。須らく先づ負け盡くせの敎えである。是を以て。天上にては却て神を見る能はず。地下に降つて始めて神を見。火は水中より出で。水は火中より涌き。空に雖く虹の約束は消へ果てゝ。地獄の中より渝らぬ約櫃を擔ぎ出だし。『バベル』の塔上に名は殘らずして。却て『ヨルダン』河底の石面に譽れを留め。天に揚げられたる人人は下りて農夫となり。水を潛りたる六十萬人は。上りて牧伯となる等の仕組である。關口父子の『勝』は。勝つ者のみ必らずしも。之に達するにあらずして。寧ろ負け盡くし死に盡くして。活氣活體のお淨土に。往生するの捷徑。其の裏面に横はつて居る。

故に前者は難行道にして。自力の法門の如く。後者は易行道にして。他力の法門とも言ふことが出來る。我が十字架敎は。雙方より之を說いて居る。即ち前者は『ノア』の境界にして。後者は『モーセ』の境界である。然れども。未だ割禮を受けざる者が。紅海を涉るを。許されざりしが如く。澁川流にても。勝ちに勇むの野心なき者は。縱令善く負け盡くすの。道理を敎えられても。活氣活體の約束地に復活するの。彈力がないと言つて居る。否斯くの如き人は全く負け盡くすの。勇氣さへ持たぬとも說いてある。

玆に澁川義方とて。關口氏業に從つて。柔術を學び。廿六歲にして許しを受け。其れと同時に破門せられて。關口流と稱するを許されず。江戶に來つて別に道場を起し。自ら澁川流の一派を唱へたる人がある。

此の義方先生は。紀州の人。承應元年に生れ。寶永元年に歿し。其の間五十三年の芳躅は。載せて數十卷の書にあり。其の術は嫡々相傳して今日に至る。本鄕丸山福山町の尙義館は即ち其の正脈を傳ふる唯一の道場にして門に及ぶ者已に數百人。之に敎ゆるに先づ。負け盡くせの法を以てす。次號には義方先生の爲め。及び其の敎義。修養法を論じ。併せて。師氏業の許しを受くると同時に。又破門せられたる所以に說き及ぼさん。然れども。予は所謂芝居の見巧者のみ。元是れ役者にあらざれば。實

修家の噴飯を免れざるは。最初よりの覺悟である。（未完）

◎禪僧

佛敎の般若波羅密多。耶蘇の十字架。神道の祓齋及び。周易に所謂大川。皆是れ其の名は異れども其の實は同じきものである。然れども畢竟其れ什麽の用をなすものなるか。之を修して果して什麽の功德あるか。今は唯其の形式のみをなして。眞實を世に傳ふるもの固より之れなし。然り我が大和民族。而かも武人の間には其の武的修養に因て。多少は其の血脈を存して居る。然れども無意味に之を傳へ。無意味に之を用ふる者。吾人聊其の間に憾みなき能はず。從來禪宗にて大死大用の消息を傳ふるなきにあらずと雖も。彼等は唯觀念に死して觀念に甦り。四疊半に歿して四疊半に浮ぶのみ。之を活世界に出して。決して作家と稱すべきものにあらず。殆んど幽靈に等しきものである。』

若し夫れ四疊半の隱寮に踞して。金毛の獅子を氣取り。時に威を振うて一吼せしめば。或は不意打を食うて狼狽するものもあらん。或は耳聾するものもあらむ。然れども其れは唯、位に坐し。杓柄、手にあるの時に限る。所謂虎の山に靠るが如しとは。世間の難有屋に對して之を言ふべく。龍の淵に憑るが如しとは。鈍魚、餌を貪るの叅徒。乃至拾ひ上げの小僧に臨むの機である。彼等は富士山上の隻手を解して。未だ『マンチエスター』の隻手を知らざる噇糟禪。彼等は巧みに蘆葉の達磨を畫くと

雖も曾て蹈海の耶蘇を賦する能はざる擔板漢。彼等が何程氣位高く稱へても。向上一場の慷慨。畢竟女の木登りである。愈高くて愈ざまがわるい。

抑も彼等が多少垢抜けたる所あるを以て。お智識と稱せらるゝを得ば。世間にはお智識が澤山ある藝人、封間、娼婦の中には。寧ろ大善智識を以て。稱せねばならぬものが多い。

池の面によな〳〵月は通へども
水も濁らず影もとゞめず

此の作者などに至つては却々垢抜けて居る。之を世に澤庵和尙の作と傳ふれども。實は二葉屋の抱へ二代目瀨川の歌である。昔への遊君には斯くの如き類が澤山ある。一々枚擧に遑あらず。又幇間藝人の中には。迚も今日の禪僧等が遠く及ばぬ程の洒落者がある。禪僧等は還つて洒落を裝うて居るのである。

更に其の道々に於いて列擧すれば。柔術劒術の先生達。畫家彫刻家の中には。其の識見と云ひ。其の信仰と云ひ。共に今日の哲學者や宗敎家が。恐らく其の穎の端にも取り付くことの出來ぬ人が多い禪宗の僧侶などは殆ど茶の湯の宗匠か。花のお師匠ぐらいのものである。故に禪僧が伎倆を揮ふ唯一の場所と言つたら。先づ四疊半の茶席が相當であらふ。其の外には殆ど彼等が平生の閑伎倆を呈するの場所がない。

禪僧の雙收雙放。一虛一實の伎倆は。三軍を叱咤し一國を統率するの上に於いて。何の用をもなさぬ。畢竟して一人に敵するの勇に外ならぬ。之を彼の梅ヶ谷や常陸山に比して寧ろ遜色なき能はず。

世人動もすれば。寒餓饑凍の困學參徒が。二十三十相携へて。沈重寡默。各威儀を正し。作務に從事し或は法用食齋。灑掃應對、庖厨の靜粛等を見。乃至參禪供養の際に於いて。八萬の細行此に在り。三代の禮樂此に存すとなすものなきにあらずと雖も。是れはお客の目を悪く舞臺上の事である。樂屋内の事は自ら別である。

彼等が僧林に在つての四威儀。舞臺に出ての一時の所作振り。余も亦之には感心して居る。然れども僧林の風を見て。直ちに師家の德を稱するは大に間違つて居る。元是れ一般僧林の式法習慣で。即ち昔しよりの習はせである。

昔し馬祖道一と云ふ大德の法嗣に。百丈山の懷海禪師と云うて。極めて謹嚴なる人があつた。一日不作一日不食と云ふやうな愼み深い人であつたが。其の人當時一般僧林の風動もすれば。無賴漢の集會所と云ふやうなる。有樣に陷りゆくを慨いて。佛祖の戒律に基き大に刷新を行うた。即ち百丈淸規八卷の中に。大小洩らさず悉く書き示されてある。寢樣起樣。洗浴の法、菓子の食ひ方、湯の飮み方甚しきは厠中の作法、出で〻後ち手の洗ひ樣。屁の放り方まで書いてある。天童の宏智禪師など〻は。餘り八ヶ間敷之を唱へられた爲め。世間から禪律と呼ばれた人である。

扨百丈禪師より後は僧堂の風。全く人を器械にして居る。左なくては治まらぬのである。禪僧と云ふものは小僧の時から。已に童稚の相を失うて全く不自然な性情を養ひ來つた者で。老猾陰險彼等の悟道である。而して若か〳〵しくない皆耄けて仕舞つて居る。是れが彼等の一絕一息を口に唱へて。其の實全く甦らぬ證據である。彼等は即ち蛇の生ま殺し見たやうな性情を備へて居る。

『モーセ』曰く性を盡し精神を盡くすと。彼等も見性見性とは言うて居る。然れども性を盡さゞるものが。見性の出來る筈がない。易に曰く理を極め性を盡くし以て命に臻ると。曹洞宗の人は理を極めて性を盡さぬ。臨濟宗の人は性を盡くして理を極めず。共に命に臻らぬ徒である。縱令理は極めずとも性を盡くせば立派なことである。然れども無字大明神の公案三昧ぐらいで。今日の複雜なる性情を盡くし得るの道理がない。

公案も古來他の發達と俱に發達して居る。例へば阿含經に牧牛十二法を說いてある。又大論には牧牛十一事と云ふ者を出して居る。之れが石霜の牧牛、潙山南泉等の水牯牛の公案となつて。其の間次第に發達して居る。次に十牧牛の圖も出來。更に進んで五祖演の牛過窓櫺となり。又趙州の柏樹子の話が鐵牌覺の先師無此話の公案となり。更に關山國師に至つては柏樹子話有賊機とまで。人を荊棘林に墜して居る。此の牛過窓櫺の話も亦柏樹子話有賊機の話も。此の上まだ〳〵進まねばならぬ。我が十字架敎の十卷書の中には。まだ〳〵六ヶ敷公案が澤山ある。而して皆實用的である。實際行履の上に就、

いて冷煖自知することばかりである。臨濟の四料揀やら洞山の五位くらいな事は「パルミテーション」或は曼荼羅思想を解するものゝ爲めに。決して命根を抜き去る程の毒草ではない。我が十字架敎に來つて。余が許に三ヶ月間辛抱するならば。僧堂の三年五年の修行は成効させて見する。

無字の業識性邊の事ぐらゐを見て。其れに一二の著語でも添ゆれば。其れで大抵悟つた積りで居る。是れも無理はない。實は其れより以上の修業が禪宗にて一般に難いのである。其れ故に彼等は實際の用に立たぬ。其れより以上の修行をさせやうとすれば。今少し野心も增長せしめねばならず。覇氣も發充せしめねばならぬ。爾かすれば又弊害が多くて世間の害物を造り出すの恐れがある。天童の宏智禪師は戒律を嚴にした上に。南無阿彌陀佛を唱へさせて居る。雲棲の袾宏即ち蓮池大師に至つては。全く唱名三昧になして仕舞つた。是れが今日の支那禪である。

什麼としても禪宗は。學人を器械にして育つるより外はない。少しく緩むれば放縱となり。天命を惶れざるものとなるのである。百丈禪師が彼等を器械にしたは無理もない。」

果然彼等は器械となつて僧林に入り來るのである。此の百丈禪師の率束法は大に圖に當り。是れが後世までも僧林の規約となつて。今日にまで續いて居る。師家は因習と積威とに依賴して。其の位恭く。大衆は餓鬼の斷食と諦らめて。先づ當座の御辛抱である。而して其の希望は早く寺を持ちたい。大黒を祭りたいの一事である。且つ日本にて君主、支那にて父母と云ふ如く。印度にては師恩と云ふものが第一で。大義名分殆ど師弟の間に限つたやうに心得て居る。故に如何に不德な僧侶でも。師家となれば、それは〳〵威張つた者である。即ち佛樣である。

去れば禪宗の師家が。信者や凡僧に尊敬せられたからとて。直ちに之を以て高德な人、能ある智識と見るのは。大に誤つて居るのである。

之を要するに。吾人は一般禪僧を見て如何なる眼負眼を以てするも。彼等を智慧あるものとは稱することが出來ぬ。唯頓智のよき小才子にあらざれば。即ち頑瞑不靈の我慢人か。然らざれば狡猾一編の掠虛頭漢である。

然れども佛敎諸派の中に在つて。兎に角多少なりとも、佛祖の命脈を護持するものは、獨り禪家である。其の他は殆ど之を名狀するに苦しむ。

夫れ佛敎は應病與藥と談じて。八萬の煩惱に對して八萬の法門あり。九品の根機に對して九品の淨土あり。其の品變はり其の門異なる所に。各引接の方便を異にして居る。其の陀羅尼三昧と云ひ。座禪三昧と云ひ。大死一番再活底の外はない。幾多の方便門皆此の大死大活の上に立られて居る。故に我が大和民族の本領に培ひ「扶桑木をして愈益繁茂せしめ。全世界を我が庇蔭の下に置かんと欲せば。無論佛敎よりも亦其の肥料を仰がざるべからず。然れども肥料の豐富なるは。寧ろ我が十字架敎の十卷書に如かず。是れ未だ世人の知らざる者。今吾曹數千年の滯貨を。玆に始めて世界の人の面前に展開する

ゐである。

◎ゴルゴタ邱　一

△佛說大方廣佛華嚴敎に、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を成就するには、先づ十信十行十住十回向十地の菩薩行を修め悉く之を成就せねばならぬと說いてある。而してこの五十階の中一階級を成就するにも、一生二生にて出來ることでない、數十生を重ねて、尙ほ達する人は甚だ稀である、蓋し中途にして破戒するものあり、自墮退轉するものあり多くは是れ無慚無愧に身を陷れて、再び出離の念起らず阿鼻提の鬼に捕えられて永く發菩提心の緣絕ゆ。夫れ一階級の修行すら、尙ほ是の如し、況んや五十の階級を滿足に通過することは、常人に於て固より企及し得られぬことである、爾るに佛敎にては、三昧法と曰ふものあつて行者若し此の法に乘ずれば、五十乃至百千の階級縱へ難信難行難住の法なりとも、一瞬時間に之を成就することが出來るのである。』

△三昧は梵語三摩地或は三摩鉢底の略にして等持と譯して居る。是等は佛敎の術語にして惛沈散亂兩つながら相離るゝを等と曰ひ、心を一境に住せしむるを持と曰ふのである、又之を調直定といひ、正定とも曰ふて居る、龍樹の智度論には一切の禪定亦定と名づけ、亦三昧と稱すと曰ふてある、去れば佛敎にて念佛稱名乃至諸種の陀羅尼を稱するもの、結跏趺蹉するもの、或は經行するもの、皆此三昧法である。但し座禪にも支那南北朝以後は祖師禪如來禪と岐れ念佛にも平安朝以後鎌倉時代にかけて正因念佛と報恩念佛との別が出來た、報恩念佛は恰も、祖師禪のやうなもので、之を在家禪と稱したこともあつたのである、隨て一念安心多念安心等の論諍も起り、今日に至るまで諸流派各自に之れを相續して居る。然れども皆惛沈散亂を離れ、心を一境に住するの三昧法たることは無論諸流の一致する所である。念に邪念正念あり、定に邪定正定あり、正邪の二字は唯他流と對較したるの語である。』

△それ信仰を以て入道の鍵鑰となすことは基督敎も佛敎も、乃至儒敎も異つたものでない、信仰のあるところ、必ず玆に希望がある、希望のあるところに我が心あり、心のあるところ即ち三昧である、禪宗にて接心と曰ふは、心を一境に收接するといふ意にして、孟子の所謂放心を防ぐの意である、基督曰く窄き門より入れと、基督は彼の『ゴルゴダ』邱なる窄門より入つて、昇天を得たのである。『ゴルゴダ』は猶太の都『エルサレム』城外の一邱にして當時の刑場であつた。支那語に譯すれば髑髏といふ字に當つて居る、基督も此所に於て、十字架に懸けられ、身死灰の如く、枯木の如く、三冬暖氣なきの境界を經て、再び蘇生したのである、誰も皆『ゴルゴダ』の刑場に牽かれては神より外に賴むものはない、此に於て平生の正念或は正定が大事である、基督と俱に十字架に懸けられたる盜賊二人の內、一人は邪念の爲めに地獄に墮ち、一人は正念の爲めに天國に擧げられたとある』

△天國は何處にあるか地獄は如何なる場所なるか、一旦死し又蘇つて見なければ分らぬ、邪念も正

念も、死すれば必らず蘇る、即今死して即今蘇ることが出來るのである、基督が『ニコデモ』に對して、人荷も更生するにあらざれば、神の國を見る能はずと曰ひしは此處である、其の時『ニコデモ』之を解せず、人既に老ぬれば如何で更生するを得ん、豈重ねて母胎に入りて生るべけんやと曰へり、約翰傳三章 是れ獨り二千年前の『ニコデモ』のみにあらず、今日の保羅教徒も之を信せず、予が十字架說を聞て之を嘲けるのである、然れども基督も已に之を證し予も亦實地に之を證して居る。』

△佛教にて二種の生死を說く、曰く、變易生死曰く、分段生死分段生死は、讀で字の如く、唯一分段の生死にして、全死全生の生死にあらず、恰も『ノア』方舟に隱れて、水上に浮び、水去つて後再び善惡生死の荊棘林中に農夫となつて創世記三章十七節と同九章二十節對照 背に汗せねばならぬ、變易生死は然らず猶『ゴルゴタ』邱上基督の復活の如く、四十五十乃至千百の生死、段階を一時に透過するのである、後者は所謂大乘の生死にして、前者は小乘の生死である、今日保羅教徒の說く生死は前者に屬して居る、故に之を小乘と謂はねばならぬ。』

△予が粤に大乘の生死小乘の生死といふを見て、我が這裏生死なしとて嗤ふものもあらむ、然れども生死を離れて涅槃なし、生死即涅槃である、夫れ天國の模型なる『エデン』の樂苑中に生命樹あり又善惡を別つの樹あり、神『アダム』を誡めて曰く、苑中の樹菓、汝の意に任せて之を食ふべし、唯善惡樹の菓實は之を食ふべからず、汝食ふの日に必ず死せんと、蓋し善惡樹を離れて生命樹なし、生命は即ち善惡の共通性である故に、基督出るも世は無善惡にあらず、唯共通性の生命樹を得て、生死の苦に陷らず、善惡の途に迷はぬのである、去れば『アダム』は生命樹を離れて、唯善惡樹を貪りしが爲めに、荊棘林に汗するの身となり、第二の『アダム』なる基督の恒に生命樹を離れずして、時に善惡樹を副食とせしやうなものである、一回十字架に死すれば生命樹の中に善惡樹あることが會得せらるゝのである。』

△『エデン』の樂苑中の事は每に三を以て成り立つて居る、神と人と惡魔『エホバ』と『アダム』と『エバ』及び『エバ』と『アダム』と蛇、斯の如く神も亦三體なる事が後に十字架の上に於て分かる、神己れの像に肖どりて人を造り、之を祝し且之に謂て曰く、生育衆多にして地に滿盈し、汝克く之を治め並に海魚飛鳥及び地上有生の諸動物を治めよと、支那人の三才說と善く似て居る、天地は恰も芝居のやうなものである、百約記には神と惡魔と『ヨブ』と芝居をして許多の觀者を泣かせた事がある、其樂屋の內は秘密なれども、十字架に死して蘇りたるものは皆樂屋の內に入り、種々の形に扮して、又芝居を始めるのである、佛教にては之を輪回といふ、大乘家の眼より見れば輪回は決して悲しいものでない、輪回あつて始めて世の中が面白いのである、故に之を遊戲三昧とも稱して居る。』

△神といひ、人といひ、惡魔といひ、乃至天地萬物といひ、決して異りたるものではない、『バイブル』は每に三者相對せしめて居れども、其一は必らず他二者の共通性である、此の共通性を知らずして待

對の二者のみを見、或は三者を格別に見るものを、小乘といひ、三者を融通して或は合し、或は開き雙放雙收善く自在なることを大乘といふものである、基督が我を信ずるものには自由を與へんといひしは、即ち是である、彼れ蘇て後時に密室の中に顯現し、或は數十里を隔てゝ諸所に散在せる弟子等を殆ど同時に見舞ひしなど、その神出鬼沒の行動は、之を十字架に因て得たのである、斯の如く八面玲瓏にして十方虛空の如く、三界牆壁なく、出入無礙なる所彼も亦之を十字架に依て、得たるものとすれば、吾人も亦彼に從ひて十字架を負はねばならぬ、十字架は即ち遊戯三昧の樂屋に入る關鍵にして、吾人は先づ『エルサレム』城外なる『ゴルコタ』の刑場に於て、基督と會見すること最も肝要である。』

ゴルゴタ邱　一

△華嚴經を讀で入法界品に至れば善財童子が文殊師利の敎に因りて、德雲比丘を妙峰頂上に問ひ却て別峰に於て相合する一條の話がある、初め文殊師利善財童子に謂ひて曰く、汝已に阿耨多羅三藐三菩提心を發して菩薩行を求む、若し夫れ衆生あつて、能く阿耨多羅三藐三菩提心を發する、是の事難しとなす、能く發心し已りて更に、菩薩行を求む、倍々難しとなす、善男子若し一切智を成就せんと欲せば應に決定して、眞善智識を求むべし、善智識を求めて、疲解を生ずる勿れ、善智識に見えて厭足を生ずる勿れ、その誨ゆる所に於て應に隨順すべし、と、是より善財童子が五十三の善智識を歷問して、終に普賢の行願に於て、疾く圓滿し、阿耨多羅三藐三菩提心を悉く成就せしことが說てある

△阿耨を譯して無と曰ひ、多羅を譯して上といひ、三を正といひ、藐を等といひ、三菩提を正覺といふ。所謂最極最大にして、比況なきが故に、無上といひ、究竟眞實にして、假名を離るゝが故に正といひ、圓妙淨明にして遺餘なきが故に等と曰ひ、凡聖を超越して、二障を斷ずるが故に正覺といふのである。夫れ佛道を成就するには發心修行菩提涅槃の順序がある、善財童子は文殊師利の許にありて、已に發心し了りたりと雖も、之を圓滿に成就して、所謂涅槃位に達する迄には、尙諸善智識に親近供養して、更に幾多の修行を積まねばならぬと云ふことを、其師文殊師利に敎へられ、善財乃ち文殊に白して曰く、唯願くは聖者廣く我が爲に說き給へ、應に云何してか菩薩行を學び、應に云何してか之を修し、之を行ひ、之を淨め、之を成就し乃至之を憶念し、之を增益して、普賢行を速に圓滿するを得べきと』

△爾時文殊師利善財童子の爲めに頌を以て之を說く其大意に曰く、若し菩薩有つて生死の苦を厭はずんば、疾く普賢道を具し、徧く無量の諸佛に見えて、速に諸願海を成就せん亦一切聽法のものをして、皆菩提心を發せしめ、之れをして悉く普賢乘に載せしめんと之を說き已つて更に指示して曰く、此南方に於て一國土あり、勝樂國と名づく其國に山あり、妙峰といふ、彼の山中に於て一比丘あり、

德雲と名づく、汝往いて之に問へと』

△摩西『イスラエル』人に諭して曰く、汝等嘗に汝等の中より我に等しき預言者の興るを見るべし、汝等往いて之に聽從すべしと、爾來『イスラエル』人は二千年間許多の師父預言者に逢ふて云何して其王を得べきか、云何して天國に入るべきか、乃至云何してか應に敵國の軛を脱して自由の民と稱せらるべきかを問ひ、終に最後の大師父大預言者なる基督耶蘇を見て、箇の無上道を滿足せり、夫れ文殊師利と善財童子は元一體にして二なく、恰も『エホバ』と基督との關係の如く、眞實親子相見るの所は必らず『ゴルゴタ』邱上である、又吾人が基督に遭會し兼ねて天父の面を見る、須らく此『ゴルゴタ』に於てせねばならぬ』

△善財童子文殊の敎を聞て、感懃、瞻仰恩を謝して退き南行して勝樂國に向ふ、夫れ摩西乳と密と を流すの約束の地に入るを許されず、『ピスカ』の山巔より之を望むことを得て、其身は『モアブ』の地に死し、其所の谷に葬られ、今日迄其墓を知るものなし、（申命記第三十四章）然れども『ゴルゴタ』に基督と共に死するものは、摩西の墓を知る事が出來るのである、今善財童子は文殊の許を去ると雖も、妙峰山の別峰に於て三昧法を得し時に、山河草木、悉く是れ文殊なる事を見得たのである、摩西死したるは百二十歳なりしが其目矇せず氣力衰へすとある、豈啻に矇せず衰へざるのみならんや、活潑々地の摩西の面容は今も尙吾人を圍んで居る、蓋し百二十等、凡て十二の比數は常に『バイブル』に於て圓滿具足縱橫無邊際を表するの語である』

△文殊は智慧に屬し、普賢は慈悲に屬す、猶摩西と基督との關係の如く本來同體のものである、善財童子文殊に問ふて、曰く、我應に云何せば、普賢の行に於て速に圓滿するを得べきやと、蓋し『イスラエル』人が摩西を失ひたる時、哭泣悲働三十日間其喪を修めたとある、當時彼等は摩西を哀悼する外に、又未來に就て一種の憶想が起らねばならぬ即ち摩西が謂ひし所の、己れに等しき一箇の預言者（申命記十八章十五節）とは如何なる人ならん、又其人の願行を疾く滿足するには、如何せば可ならんとの意が、彼等の胸中に浮びしことは、自ら忖度せらるゝのである。抑も摩西が『アラビヤ』の野に於ける四十年間の說法は、暗に『ゴルゴタ』邱と指して居ることは、予が特に後章に於て論せんとする所にして、又所謂我に等しき預言者とは無論基督である』

△善財童子妙峰山に登り、其山上に於て東西南北四維上下觀察求覓渴仰して德雲比丘を見んと欲すれども終に見えず、斯くて七日を經たる後、德雲比丘別山にありて徐步經行するを見たり、吾人基督を見んと欲するも、亦斯の如く『シオン』山上に於て東西南北四維上下、彼を求覓觀察するも、到底見ることは出來ぬ、彼を見んと欲するものは、十字架を負ふて彼に隨ひ、『シオン』城外の『ゴルゴタ』邱上に於て相見せねばならぬ。』

△基督曰く、此處に基督あり、彼處に基督あり、と曰ふて僞基督出ることあらん、汝等之に從ふこ

と勿れと、吾人は彼と共に『ゴルゴタ』の刑場に於て、裸體にせられ、磔せられ、我神我神、爾何ぞ我を棄給ふやと彼が叫びし如く、肉裂け熱散じて、身は髑髏と化し去るの一刹那を經て始めて彼を見る事が出來るのである、然らざれば、上碧落を極め、下黄泉を探るも、決して眞正の基督を見ることは出來ぬ。是より以外何れに於て彼を見たりと曰ふものあるも、皆僞基督である。』

△善財童子妙峰山の別峰に於て德雲比丘が經行するを見、直に其處に詣り、足を頂禮し、右遶三匝前に於て住まり、是の言を作して曰く、聖者我れ已に阿耨多羅三藐三菩提心を發す、未だ云何してか菩薩行を修め乃至應に云何してか普賢の願行に於て疾く滿足するを得るやを知らず、我れ聞く聖者善く能く誘誨すと、唯願くは垂慈我が爲に宣說せよ、應に云何せば諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得んと、德雲比丘善財童子に誨ゆるに、唯三昧法を以てして曰く、我自在力を得て信眼淸淨、智光照耀、一切の障礙を離れ善巧明徹、常に十方國土に往詣して諸佛を供養し一切の正法を總持す、乃至一念の中に於て、無量無邊の佛刹を莊嚴し、一毛端上に不可思議不可商量の如來出現するを見る、此の奇特の法門、我之を念佛三昧に依りて得たりと基督の吾人に誨ゆる所も、亦斯の如く、叩けよさらば開かれん、覓めよさらば與へられん、と曰ふに過ぎず、吾人之を叩き之を覓めて、懈怠を生せず、厭足の心を起さず、一意專心進みて已まざれば、終に十字架の下に到達す、是れ即ち『ゴルゴタ』邱である。』

コルゴタ邱　三

△夫れ『ゴルゴタ』邱は『シオン』山頭『エルサレム』城外の刑場にして、基督の磔殺せられたる所である、譯して髑髏邱と稱して居る、髑髏邱は實に天國の門である、鎌倉の宗演禪師が曾て湯島の麟祥院に於て開講の喝を示されたる時に『孟賁失勇烏獲泣、雞鳴狗盜奈斯關』といふ何があつた、禪宗にては唯此『ゴルゴタ』の關門を通過せしむる爲に師家も非常に力を用ゐ、學人も亦容易ならぬ修行をするのである、勇力孟賁烏獲の如きも泣き出す場合が必らず一度來るのである、基督曰く、婦產に臨みて艱む、其艱むは後に慶びあるの兆なりと、吾人も亦その希望を以て進まねばならぬ、雞鳴狗盜の灰殼には出來ることではない、小智は實に菩提の妨げである』

△禪宗にて公案といふは、公府の案牘と云ふことにて、所謂死刑の宣告文である、基督は『ラビト』の法廷に於て死刑の宣告を受け、其上辛棘なる笞杖を加へられて、肉裂け骨碎くるの毒痛あり、加之彼が平生の法敵は、此時得たりといふ勢にて所有方便を盡して彼を苦めんとせり、棘冠を編みて其頭に冠し、顏面より血滴る所を、或は唾し或は掌にて打ち、紫袍を着せて其前に跪き、之を拜して愚弄し、其他潮罵嘲笑至らざるなく、頓て刑具を肩に負はせて『ゴルゴタ』邱に牽き行く間にも、如何ばかりの苦痛を彼に與へしかは想像するに餘りあるのである、彼は途中にて六回地に倒れたりといふ、

去れば其度毎に足にて蹶られもしたるならん、鞭にて打たれもし、乃至綱かけて牽かれもしたらん乎、眞に屠所の羊である、其間にも彼は怨嗟の言を發せず、唯從容として他の爲すに任せて居つた。』

△斯くて彼は『ゴルゴタ』なる刑場に牽かれて、手足を十字架に釘せられた、此後の苦痛は無論前に勝つて居る、然れども彼は決して悲鳴の聲を擧げず、亦敢て身を悶くこともせず。然れば許多の婦人等が泣き悲しみ、彼に附き隨ひて來るを見、道すがら之を誨ゆるに、極めて慇懃であつた、又十字架上より其母に慰籍を與へ、敵の爲めにも天父に祈禱を捧げて、後一言われ渴くといへり、蓋し終日血を流したる結果である、又彼が我神よ我神よ爾何ぞ我を遺つるやと言ひし語に因て、益彼が人格の高かりしを證してゐる、夫れ基督は最初より人を相手にせず、言動常に父神の懷を離れずに居る、曾て其弟子に敎へて曰く爾等箇の嬰孩の如くならざれば、天國に入る能はずと、彼れは全く赤子の態である。

△彼は渴く時には渴くと曰ひ、哀しき時は哀しい聲を發し、怒る時には怒る、彼は血の涙を以て三度神に祈り、願くは此の杯を我より離し給へと言へり、偶々天よりの語彼の意を强ふせしに因て（馬太傳廿六章三十九節）其忍ぶ所まで忍びしと雖も乃至苦痛の頂上に座して、將に忍びの緒も絶えなんとする斷末魔の一刹那、唯だ天父に向つて一言の哀請は、凡そ血肉あるものゝ一般に禁じ得ざる所である。堯舜も旻天に向つて號泣せしことあり、孔子も嗚呼天我を亡ぼせりと嘆聲を發せし事がある、是れ人の性順にして決して彼等の愚痴でない、亦血迷ひでもない、吾人は之に因りて、堯舜孔子が赤子の心を失はず天人善く親子の情あるを見るのである、斯くて基督は窮して愚に亂れず、益々信仰と希望の緒を固くし、我が事成れりと曰ふて、其靈を神に付せり、此所四福音傳均しく彼が末後の辭と共に其首を附せしことを書いて居る、去れば此時まで彼は姿勢を亂さず、端正なるものであつたと見ゆる、百夫の長基督の最後を見て、是れ眞實神の子なりといひて膺を拊て歸つたとある、吾人は今、百夫の長が那邊に就て如何に感せしやを知る事が出來ぬ、然れども『ゴルゴタ』邱上の彼は、慥かに常人の及ばぬ所がある。』

◎失樂園

一、「エデン思想」（上）

「阿字の子は阿字の故郷立出でゝまた立歸る阿字の故郷」とあるが如く、良知の子は良知に歸らんことを求め神の子は神に歸らんことを求め、右往左往各其故郷を探して走廻て居る、這の心之を修養と云ふのである、蓋し其本に歸らんとするは有生無生皆然らざるはなく、是の故に若し修養と云ふことを廣義に解すれば宇宙は直に是れ修養世界である。

昔希臘人は、何故に吾人は美を好むかと云へる問題に答へて、吾人は元美を盡し善を盡したる神の

世界に住して居つた、今此穢土に在て常に之に得らんことを求めて居る、是れ吾人美を慕ふの心であると云ふ說をなして居る、蓋し斯くの如き思想は獨り希臘人のみならず世界到る處にある、我が日本人には高天原思想あり印度人には須彌思想あり以色列人には「エデン」思想あり、各其故鄉に復らんことを求めて、之に由て宗敎立ち風俗成り、それ〳〵に修養法も起つて居るのである。

眞言宗の行者には阿字觀と云ふものを授ける、其阿字觀が一通り成就すれば又次に須彌觀と云ふものを授ける、其須彌觀の事は破地獄經と云ふ密部の經文に詳しく出て居る、今其大要を摘まんで言ふならば、先づ中央に須彌山がある、金、銀、瑠璃、硨磲の四寶より成立て居る、之を四寶莊嚴の須彌と云ふのである、其頂上に寶樓閣がある、寶樓閣の中は阿字がある、阿字の四方に四如來がある、此四つの如來は各性質を異にして居る、北方の阿閦如來は怒つたやうな佛である、南方の法鼓如來は笑うたやうな佛である、東方の藥師如來は懇めたやうな佛である、西方の彌陀如來は泣いたやうな佛である、是れは皆折伏門攝取門と云つて嚴父と慈母と相對したるものである、父母が其子に對する時には怒ても見せねばならぬ、笑ても見せねばならぬ、嗚呼不憫と母は泣くこともある、厄介な奴と父が懇めることもある、斯くの如く寬嚴相對して四方に分れて居る、而して之を統一するものは阿字である、阿字は則ち中央大日如來である。斯樣に須彌山の上に寶樓閣があつて、それを金の龜が背上に載いて居る、此金龜は水陸兩棲のものを用ゐて即ち佛界衆生界に通ずる煩惱を表したものである、又其下が水輪、風輪、空輪となつて取卷いて居て、之を圖にしたるものを壁に掛其前にて觀法に入る、之を須彌觀と稱するのである、勿論金、銀、瑠璃、硨磲の四寶に就いても乃至龜の足に就いても一々口傳がある、又開合と云ふことがあつて、之を內より觀じて開くことがあり、外より觀じて閉ることがあり、色々取扱ひやうはあれども要するに自己心內の須彌山を觀ずるの外はないのである。

今『エデン』思想を按ずるに此須彌觀と少しも異つた事はない、苑の中央より川が流れて遍く苑に灌ぎ、更に派分して四流となり四方の國々を潤して居る、其東南に往くものは『ヒデケル』と云いて激流の意である、西南に去るものは『ユフラテ』と云いて緩流の意である、四如來の折伏攝取相對する處に全く一致して居る、又北方に向つて流るゝものをビソンと云ひて、是は中流の意である、伊邪那岐神が阿波岐原にて禊祓し給ふ時、上津瀨は速し下津瀨は弱しと詔給ひて、中津瀨に降り滌ぎ給ふたと云ふ其中津瀨の義と同じ意味である、此中流『ビソン』の流域に金銀珠玉を多く出したと云て居る、更に『ギボン』と云ひて東北に向て流るゝ河がある、今は涸渴して亦其字義も研究が付いて居らぬ、兎に角『エデン』樂苑と云つても一の須彌觀に過ぎないのである。

須彌とは須迷盧の略音である、昔『ユフラテ』河沿岸の地に『スメル』と云ふ國があつた、其處に『スメル』山と云ふ小高き靈山がある、是は或聖王が曾て此山にて神の律法を授かり、名敎之より四方に布かれた時代があつて、恰も今日西藏人の拉薩に於けるやうな工合に、後世の人も之を聖地として尊崇した

ものである久しき以前已に此須迷廬國は亡びて今は唯人種の名として存して居る。却説小亞細亞中亞細亞にては、一般に此『スメル』を貴人又聖地の尊稱語として用ゐたものである、『バイブル』には『サレム』となつて居る、佛書にも『バイブル』にも共に妙高又は平安と譯して居れども、其實譯すべき語ではない、矢張原語の儘に讀むがよい。

以上說き來つて支那の崑崙山なども、矢張須彌觀『エデン』思想と等しきものなる事が明らかである今日の崑崙山は地理的實在のものなれども、昔舜の耕したる崑崙は金銀珠玉より成り麗水之れより流れたりと云ひ、其上に又理想的聖人が之を耕したと云ひ、『アダム』が『エデン』の園を守りて之を耕しゝ當時の光景に比して其思想が窺はるゝ、又我神代にても黑潮の急流に濱する地を筑紫と云ひしは、『ツグリス』と何かの緣故を持てるにはあらざるか先きに云へる激流『ヒデケル』は、之を埃及語にて『ツグリス』と曰ふ、猛烈又は迅速の意である、之に對して一方の緩潮を由良門と云ひ、『ユフラテ』と音相近く又其緩潮に沿うて由良の地あり、希臘語にて『ユラ』は緩漫の意である、斯くの如く右手には劍を提さげ左手には勾聰を持ち、智慧と慈悲とを左右にし中央に高天原ありとは、能く『エデン』思想を出現して居る、高加索地方に『タカマハラ』と云ふ語があつて、帝王の宮殿と云ふ意なるよしを、曾て彼地に遊んだ某氏が傳へて以來、大學派の考證學者も大に其頭を惱まして居ると云ふ噺がある余は是等の學者に對して何も議論の必要はない、唯余が宗教觀よりすれば斯くの如き思想は人々箇々當然起るべき筈のものにして佛教にては之を曼荼羅思想と稱して居る、曼荼羅は圓滿具足の義にして、元牧畜人種の星交觀察より起つた語である、孔子の所謂北辰の其の處に居て衆星之に拱ふが如しとは、能く此思想を言ひ盡して居る、『バイブル』中に萬軍の主『エホバ』とある、萬軍とは西部亞細亞の牧畜人種が天上の衆星を指して呼びたる語にして其中の主人公即ち北の一ッ星に己れの神を配したるものである、權兵衛が若し己れを一ッ星とすれば、八兵衛も太郎兵衛も乃至山河大地悉く衆星である、太郎兵衛若し一ッ星ならば、其他は皆衆星にして凡べて之に拱うて居ると云ふやうな思想は終に自己心內の中央本尊を見出さんとする研究法となり之を地理に察して出來たものが即ち『エデン』思想である。

一二、エデン思想（下）

試に地圖を披いて『アルメニヤ』の地形を察せよ西に大海あり東に裏海あり、北に黑海あり南に光明海あり、而して土地の中央に『アララット』山ありて、三湖之を周り鼎足をなして居る、北にあるものは『リキニッス』湖、東にあるものは『アゼルビジャン』湖、西にあるものは『ワン』湖である、更に又其語義を明かにし得たならば一層趣味ある研究となるであらう、但『アララット』は或は貴き意ならむとの說、稍信ずべき邊がある、斯くて前に曰へる如く、四派の川流其中央より流れて四海に注ぐ愈亦奇ならずや、全く自然の曼荼羅をなして居るのである更に大奇なるは『ユフラテ』及び『ツグリス』の二川即

ち文珠と普賢の二派が相合して波斯灣に注ぐ、所謂光明海である。

斯くの如く自然の地理其儘が其曼荼羅組織をなして、彼等の『エデン』思想を之に据付けて居るのである、是れは我日本にも往々あることにして、高天原の遺跡を今日日向の高千穂に於て見ることが出來る、是等は恐らく萬國至る處に珍らしくないのである、抑も創世記に畫ける『アルメニヤ』の地を以て、以色列種族發祥の『エデン』とするの說は暫く舍く、若し之を原始人發生の地と見做すに至つては迷信の最も甚しき者と謂はねばならぬ、如何となれば、『アダム、』『エバ』失落の時には宗敎あり法律あり、社會の制裁も秩然として立て居る、更に驚くべきことは、互に意を通ずる文字樣のものさへ出來て居るのである、又金銀珠玉を寶とし貿易等をもなして居たものと想像せらるゝ點が、創世記二章三章の間に往々ほのめかされて居る、二三代の後には已に銅工鐵工までが出來て居るのである、又世の比較研究者に向て特に注意を促したきことは、開闢の篇中古への水原派、火原派、勝論派、聲論派、數論派の學說が互に經緯をなして、密に織成されて居る、恰も五派の學說を集めて大成したるものゝ如くに見えて居るのである、餘りに其巧妙なる點より察すれば、『エデン』思想は須彌觀と同じく、決して太古人の思想ではない、哲學の見地よりするも、將た宗敎上の觀察よりするも、人類發生以後恐らく六大期を經過して、第七期の前半期に成立したる、『エデン』民族一派の宗敎觀乃至哲學思想である。

然れ共世の學者が『トガルマ』或は『アルメニヤ』の地方を以て、人類發生の地と攷證するのは全く別問題の事にして、是れは何も我が『バイブル』と關係のあることではない、斯くの如き宗敎系統の詩的觀察は、自ら他の考證學者と其研究法を異にせねばならぬ、佛說起世經の中には之と同思想の『エデン』樂苑が澤山出て居る、其著しきものを擧ぐれば、先づ阿耨達池と云ふ池がある、其池水が派分して四派の川となつて四方に流るゝ、又四方に四箇の阿耨達地があつて四流の川之に注ぐ更に其四箇の阿耨達池にも亦各四方に阿耨池があつて四流の分水又各之に注ぐ、一々斯くの如くにして相聯なる其中央は、即ち奇花異草珍樹及び寶石を以て盈されたる樂苑である又樓炭經には其中に置かれたる原始人が、粳米を過食して墮落したることを書いて居る、是等は前に云ふ彼等の所謂須彌觀にして、曼荼羅組織と稱するものである。

今より八九年前米國の『ペンシルヴニヤ』大學にて、亞米利加土人の遊戯具を研究したことがあつた其報告書によれば彼等は周易と同系統のものを持つて居る、之にて運命をトし學術研究天文觀察等にも亦之を用ゐて居る、算木の組樣は四爻或は六爻となつて居る、又大極圖がある、而して其圖樣は全く繪像曼荼羅に等しきものである、次に研究者の說に因れば、之を形體學上より察するも又言語學上より證するも、決して支那傳來のものではなくて、正しく波斯系統のものであると曰つて居る、然らば支那の易は其初め何れより來りしものなるか、抑も支那特發のものなるや否や、其研究は暫く學者分上の事として、余は唯此に支那人の曼荼羅思想を集めんに、先づ其著しきものは、庖犧時代の河圖

である、其次に禹の洛書である、其次に周易である、周易は殷の末に起り周の初代に成り、河圖洛書の變態應用に過ぎずと雖も、其窮通自在千化萬化、理を極め性を盡したるもの、余は以色列の十二卷經の外、此周易と眞言の四曼三密を取るものである、又殷の制度を箕子が武王に傳へたるものと稱する夫の洪範九疇なるものも、後世之を曼荼羅組織に配合して、憲法倫理宗教及び天命の傾斜中心の移動、社會の親疎生剋等之を一目に判せしむるやうになつて居る更に漢時代に及では五行論九星術等が頗る盛に行はれて、最初は俗間の遊戯に過ぎざりしものが、終には學者士君子の間にも珍重さるゝやうになつた、又いつ頃よりか淘宮術と云ふものが起つて、人の業障を天の十二宮に配し、之を淘汰融和する一種の修養法となつて居る、而して此淘宮術が以色列の十二種族と、其軌を一にして、消長變化生剋の道理が不思議にも能く一致して居る。

以色列と稱せられたる『ヤコブ』に十二人の子があつた、其の十二宮に配せられて、十二人の勢力互に消長をなして居る、一星耀けば必ず他の十一星が之に拱つて拜伏するのである又互に相生相剋して、其間に淘汰磨礪して居る、蓋し淘宮には六人を陽とし他の六人陰として、之に自ら攝取折伏の二門を寓して居る、而して以色列の十二族にも自ら此攝取折伏の二門がある、折伏門の六人は『エメル』山と云ふ呪詛の山に登て、天下の惡行を詛うて居る、攝取門の六人は『ゲリジム』山と云ふ祝福の山に登て、天下の善行を祝して居る、佛教の曼荼羅も金剛界胎藏界と云つて、全く斯の組織をなして居るのである。

畢竟國家の組織社會の組織、乃至一家族一心內の組織、皆此道理を離れては建立順行することが出來ぬ、故に以色列の營幕組織が即此曼荼羅法にして、先づ中央に約櫃がある、櫃中に『マナ』と戒碑と芽杖を納めて居る、『マナ』は鏡、戒碑は劍、芽杖は璽と云ふやうに三位一體をなして居るのである 之を中央本尊の神體として、其左右に立てる二箇の天使が翼を以て兩方より神體を掩ひ、又周圍には二重に慢幕が懸つて內院外院と別れて居る、佛教の須彌壇寶樓閣等に見る所と少しも異なつたのでない、次に祭司の一族が之を內護し、他の十一族が之を東西南北に外護して內陣外陣となつて居る、又聖壇を飾る器具の構造及び配置が極めて高妙にして、若し燈臺及び慢幕の結連法等、一々寓意の存する處を究むれば更に多趣味の觀察が起る、要するに最初に『エデン』思想を毫も離れたるものにあらずして、基督が我れは葡萄樹なり、我れに聯らざる枝は果を結ばざるべしと云ひし根本原理が、其構造及び配置に能く說明されて居るのである。支那の中華組織なるものも自ら此『エデン』式の構造をなして、其禹貢に記されたる所、王城の外輪五百里を甸服とし甸服の外輪五百里を侯服とし、侯服の外輪五百里を綏服とし、綏服の外輪五百里を要服とし要服の外輪五百里を荒服とし更に殷の後に至つては東夷南蠻北狄西戎又は四海など云ふ外廓の名稱さへ起つて居る、斯くの如く以色列の『エデン』思想に於ても亦『ソロモン王』が天下を一統せし時、木材を獻ずるもの、金銀銅鐵を納るゝもの職工を貢ずるもの、各其國に因て之を制し集めて中央の神殿を營み、更に王宮后宮を建てゝ『ダビデ』城と三足をなし高く神殿を撐

へて居るのである、恰も『アララット』山中央に聳へて三湖之を周ぐるの勢をなして居る。

三、兩頭の蛇

『エデン』樂苑上『アダム』『イヴ』及び蛇の三身相聯りて、中に『エホバ』の神を擁したるは、恰も政治中心の東京と商業中心の大阪と及工藝中心の京都が互に氣脈を通じて、三者鼎足をなし、靈山富士を高く雲表に撑へたるが如き觀をなして居るのである、若し三者の氣脈相通せざらしめば、中央の豬山空しく突兀たるのみ。

今『イスラエル』の十二卷經を取て之を究むれば、神より『アダム』出で『アダム』より『イヴ』出でたるが如く更に『イヴ』より蛇出でたるを見るのである、而して蛇と神と相聯なる處是れ全經の統緒にして、佛敎家の所謂生死を說く者と一致して居る、佛敎にて生老病死と云ふは生るゝものは必ず老ゆ、老ゆるものは必ず病む、病むものは必ず死す、而して此死するものと生るゝものとの關係が、我十二卷經に於て神と蛇との關係を說く所と、方に其歸趣を一にして居るのである。

玆に十二卷經とは何を云ふか、是れ『バイブル』の歷史部にして、即ち創世記、出埃及記、利未記民數略記、申命記、約書亞記、士師書、路得記、撒母耳前書、撒母耳後書、列王記略上、列王記略下の十二卷である、『バイブル』にある預言書は凡べて此歷史に依て說を立てたるものにして、中に就て

預言者基督の一生は其の行動言說正さに我十二卷經の說明である、其事蹟を案ずるに、彼れの身は實に我十二卷經より脫化したるものにして一身直に是れ箇の說明に外ならず、而して彼れの說く所神魔不二靈肉一體、生死別なく神人合一のものにして、佛敎に於て生老病死の四苦相聯りて環の端なきものなるが如く、我十二卷經に在ても善惡生死は元別物にあらず、唯其相を異にするのみである、されば神より人を出だし人より魔を出し更に魔より神を出し、三者一にして二なゝ亦三なきの端的は、十二卷經到る處に說き盡し論じ盡して讀者をして明白ならしめて居るのである。斯くて基督に至て箇の洞然明白の慧命を稱して聖靈を受くると云ひ、更に之を神格視して保惠師と呼び、佛敎にて所謂法身佛と同位のものとなして居る、故に報身佛なる父神、應神佛なる子神及び法身佛なる保惠師は、一神靈の用に於て三者須臾も離るべからざるものとなつて居るのである。

夫れ『エデン』樂苑上の三身は神と人と萬物とを以て示されたるものあり、生命と善と惡とに見はれたるものあり神と人と蛇とに分れたるものあり、又『アダム』と『イヴ』との三體を以て那一人を表證し、乃至『アダム』と『イヴ』と蛇との三位を以て三玄三要の妙用を示せるものありて、種々の配合種々の變態は、凡べて皆神の靈能宇宙の樞奇大極の秘奧を顯ばさゞるはないのである。

抑も善惡兩頭の蛇は何れより出で來れるものなるか、是れ謀略に富める神の運籌果して其の宜しきを得たるものなるか、神の善功方便は往々人をして其搏掠に苦ましむ、然れども我十二卷經を百讀千

讀する間には必ず其全影を提ふるの日あるべく、但是れには繪に畫けるの想なかるべからず、之を文學者は隱顯法と名けて居る、看經の眼を具するものは取別け此隱顯法が必要である、譬へば雲中に龍を畫けるもの頭あり爪あり尾あり、又縱に胴の一部を瞥見せしめ其全身を示さずと雖も、看者若し想を以て補へば畫家の意匠を知る難からず、寧ろ印象を深からしむる趣向のものである、『エデン』樂苑上の蛇も十二卷繪中其頭を見其尾を見其爪を見、出沒其胴を瞥見して終に其全體を占むるに至れば、此蛇果して其何物たるかを了することが出來るのである、彼れ『ユダ』の赤綬となり、窓に掛つて其『バレズ』を出だし、又曾て草間に伏して『イスラエル』人を嚙み毒すること甚しく、『モーセ』銅を以て一の蛇を造り、之を杆上に置いて、凡べて嚙まれたるものに仰ぎ觀せければ、其の傷み忽ち癒へたとある、銅は當時の必需品にして今日の鐵の用と等しきものなれば人は暫くも之を離るべからず、上は祭器より下は什具に至るまで銅の用處は最も廣きものであつた、一生戰ひを事とせし當時の人民は、攻むるにも守るにも唯一の武器材として此銅を用ひたるものである、されば『エホバ』の嫉妬は直に是れ『エホバ』の愛なることを此の銅蛇に依て解することが出來る、恰も佛敎にて煩惱卽菩提と云ふが如きものである、次に所謂此煩惱赤繩子は妓婦『ラハブ』となつて『エリコ』城の窓牖に掛り三偵者を縋して之を出だし『イスラエル』人を導て迦南の地に入らしめ終に永く『イスラエル』人と偕に住して居る、又此赤繩子は『サウル』王宮の窓に掛つて、色と能とを草間の一牧者に讓て居る、彼れは久しく草間に伏して『サウル』王の踵を嚙み、終に人立して赤面郎と謳はれ猶太王國の祖となりたるものである、斯くて其兒孫は熖々たる業火に沒して、化して再び蛇となつて出でゝ『バレスタイン』の野に蟠り、自ら神と稱して彼れ人を嚙むこと無數、劍熖の舌を吐いて毒氣天下を覆ふもの三年終に十字架に懸られて死す、之を見しもの皆彼れを眞に神なりと稱して、齊しく膺を拊つて家に歸りしと云ふ、此赤繩子甚不思議である。

佛敎にて迷悟相對して言ふ時には迷は常に差別と編するものゝ謂である、之を惡差別と稱す、平等と偏するものも亦斯くの如く之を惡平等と稱するのである、若し『アダム』をして善惡差別の兩頭の蛇に觸れざらしめば、彼れも亦惡平等の人にして畢るのである、神は『アダム』をして惡平等に座せしめず、又惡差別に墮在するを許さず、平等より差別に入り差別より平等に入らんと欲す、『アダム』は實に箇の平等より差別に入り差別より出でゝ平等に歸るを得て、『イヴ』と合して一體なることを知つたのである、然れども知るは尙會するの親しきに如かず、再び擠一擠して之を不滅の火坑に葬り、更に超一趣して黑暗の淵底に沈め之を洗ひ之を煉り幾生殺の後、出して之を歸家穩座せしめるのである、此に至て生もなく死もなく善もなく亦惡もなし。畢竟先きに火蛇に呑まれて斯くの如くなるを得たのである。

然れども平等は之を差別に附するを好まず、差別は之を平等に還すことを欲せざるは未發心者の狀態にして、『アダム』は生命樹と善惡樹との間に處して左右を顧視すること久しく、終に妻『イヴ』の

勸誘に因りて一たび善惡樹果を食ひしより後は、暫く差別界に座して出入無礙なることを得ず、是れ彼れの死であつた、彼れは如何にして生に回ることを得しか。

◎無一物（一）

△宗敎の目的は何であるかと云へば、無宗敎になすのが宗敎の目的である、學問の目的も其通りで無學になすのが學問の目的である、味噌の味噌臭きは上味噌にあらずと云へる如く、學者の學者臭きは鼻向けもならぬのである、世には悟つたとか知つたとか云つて得意がる人あれども達人の目から見れば、其人の境界こそ誠に氣の毒なものである、知る人は決して行ふものでない、『凡夫悟れば是れ聖人聖人悟れば是れ凡夫』と云ふことがある、玆に聖人とはまだ味噌臭き處を云ふた言葉である、眞正の聖人なれば全く凡夫と等しきものである、故に悟りと云ふことは修行中一應は必ず來るものなれども堂奥に進むに從つて此悟りと云ふことは追々なくなる、されば人は先づ悟つたがよい、悟つた後は其悟りをなくなしたがよい。

△斯くの如く、宗敎は先づ人を導いて其信者たらしめねばならぬ、信者たらしめた後は其宗敎を褫ぎ取らねばならぬのである、耶蘇敎などの風として永遠は神だとか宗敎だとか重い荷を擔がせて居る彼等は基督が神の殿堂を毀した道理をまだ解せぬのである。摩西の律法を其儘守らせようとしてゐる是れも基督が律法を破壞した所以を知らぬのである、神の殿堂を破壞して始めて自己と云ふ殿堂が出來る、摩西の律法を破壞して吾人の利害心此身此儘が直ちに律法となるのである、吾人は神にして同時に律法の主人公である、決して律法の奴隷によらず、此道理を示したのが即ち基督の十字架である基督が十字架に懸つて絶命した時に、殿堂の幕が上より下まで二つに裂けたと云ふのは、神と人と一體になつた端的を示したのである、吾人の靈と肉とは決して別物ではない、又神と人とも決して二性あるものではない、此處が即ち神とか律法とか云ふ重い荷物を取除いて、人に安樂を得せしめた新約の血である。

△大阪の米田治右衛門と云ふ眞宗の信者に向つて故鳥尾中將が『其許は何になる目的にて南無阿彌陀佛を唱へらるゝや』と問ひしに、治右衛門氏は己れの鼻を指さし『此治右衛門になる目的で御座る』と顏を突出したと云ふ話がある、南無阿彌陀佛の御問行も此に至て却々侮られぬのである、耶蘇敎の人が化して天の使ひになるとか、天國に往生するとか喜んで居るのと雲泥の違ひである、昔一遍上人東海道を通らるゝ時にはいつも三島明神がおもひに出たと云ふ、斯くて上人が千光國師に逢ふて道を談せし時、上人の安心如何と國師が問ふたれば、上人は高らかに

唱ふれば佛も我れもなかりけり
南無阿彌陀佛の聲ばかりして

と一首の歌を唱へた、すると國師は承引せず、然らば上人は定めし變化の物を認めて御座らう、我が無一物の宗旨にては

唱ふれば佛も我れもなかりけり
南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

と下の句は更に聲を勵まして唱へたれば、一遍上人忽然として大悟し、其後は東海道を通る時にも三島明神が出なくなつたと云ふ話がある。

△南無阿彌陀佛も待對に取て向ふに見てはならぬ、直ちに之を自己に返照せねばならぬ、「聲ばかりして」では未だ意識分別が除れぬ、之を佛敎にて阿賴耶識の境界と云ふのである、大燈國師が

三十あまり我れも狐の穴に栖む
いま化かさるゝ人もことはり

と詠ぜしは、正しく此阿賴耶識即ち意識分別の情量を除かねばならぬと云ふ戒めの歌である。

無一物（二）

△禪宗にて無一物と云ふは、決して空無の意ではない、妄想分別の全く除れたのが無一物である、故に無一物とは心に一物なきの謂ひにして、山は山、水は水、柳は綠、花は紅の灑々落々たる境界である、論語に孔子は六十にして耳順ずと云つて居られる、孔子も六十歲頃は最早世事人情に熟達して好惡の境に出入して毫も耳障りと云ふことのなくなつたる自己の經驗を、其畫像に題されたる語である、是れは耳に於て無一物を云つたものである、斯くの如く聖域に入りたる人は目に於ても耳に於ても凡べて無一物でなくてはならぬ。

△詩三百一言以て之を掩ふ、曰く「思ひ邪なし」とある、此無邪が即ち無一物の謂ひにして、芭蕉や蕪村の俳句を見ても此無一物の當體が顯はれて居る、俳句家の戒めに、句は見るやうに作れ聞くやうに作るなと云ふことがある、之を味へば彼等は慥かに此無一物の意を心得て居る、佛敎にて即心即佛とか此身此儘とか云へるも矢張無一物、論語に可もなし不可もなしとあるも同じく無一物の謂ひである。要するに事物に處して、サラリ〳〵と滯りのないこと障りのないこと、是が眞の無一物である心に理屈を挿まぬ處是が無一物、又本來の面目とも稱する、禪宗にて無墨礙と云へるも即ち是れである。

△昔火敎の祖「ゾロアスター」の庭に一本の木が萌へた、段々成長して葉が茂つた「ゾロアスター」之を食せしに智慧が生じた、又花が咲いた、取て之を食せしに愛情が生じた、終りに實を結んだ、又之を取つて食せしに解脫を得た、故に之を菴摩羅樹と稱した、菴摩羅とは解脫の意である、而して此木の葉は無花果に似、花は柘榴の花の如く、實は杏菓に類して居たと云ふ、此話は火敎派に傳へて云

ふことなれども、佛典にも『バイブル』にも同じく此教義が顯はれて居る、即ち智慧或は惡魔を表する時には無花果の葉または實である、愛情或は人を表する時には柘榴の花又は柘榴の實を用ゐてゐる、解脱を表する時には必ず杏花或は杏實である、但し佛教にては獨り密部の經に杏或は梨と譯されてある其他は大低菴摩羅果となつて居る。

△此菴摩羅果は佛教にて第九識即ち佛の悟りに置かれてある、眼耳鼻舌身意の六識より摩那識が第七、第八識が先きに謂へる阿賴耶識、第九識は即ち此菴摩羅識である、阿賴耶識までは尚凡夫の境界で、是れが更に解脱して始めて菴摩羅識となるのである。

△扨禪宗にては此無一物即ち無量礙の境を菴摩羅果と稱するのである、されば無一物の人は取りも直さず佛果を得たる人と云はねばならぬ、天皇は法律の主權者である、法律は天皇の意思を行ふものなるが故に、一國の法律は天皇を罪する權がない、斯くの如く吾人は此菴摩羅果を得れば戒律に束縛せらるゝ憂がない、無論之に由て刑せらるゝ懼れもないのである、即ち戒律の主人なるが故に常に戒律を行使するものである、基督が我れを信ずるものには自由を與へんと云ひし、其自由を得たものである、佛教にて之を解脱と云ふのである。

△此解脱は是非阿賴耶識が一旦破れて、それから出たるものでなくてはならぬ、有名なる獨逸の「ニーチェー」が超人と云ふたのは即ち是れである、阿賴耶識は之を含藏識と譯して人世凡ての智識を之に包含して居る、今日の哲學者は何程奥妙を極めても皆此阿賴耶識の分際である、天地間の道理皆解からぬ事はない、然れども百尺竿頭に一歩を進めると云つて、此圓滿の智識の中より一歩超出せねば菴摩羅果を得ることは出來ぬのである、故に佛教にては賴耶の八識田中に一刀を下すと云つて居る。

△吾人は修行の順序として、先づ此阿賴耶識と云ふ智識の渦中に葬られねばならぬ、之より復活して始めて無一物を得るが故に學問も亦大事である、畢竟するに學問に死して學問より蘇り、戒律に死して戒律に蘇り、蘇りする間に智識の垢を去つて、終に無一物を得るのである。

◎赤心錄

一、戒律

▲論語に禮儀三千威儀三百と云ふてある、禮儀の數は三千、威儀の數は元三百と限られたものではない、威儀と云ひ禮儀と云ひ其の數無量無數、數へ切ぬ程多くあると云ふことを示したものである、佛教にても耶蘇教にても同樣に示してある、唯宗教的には之を戒律と稱するのぢや、政治上に法律と稱するものも畢竟は同竟義のものである、唯粗密内外の別あるまでの事である。

▲偖吾人は茲に講究を要することがある、戒律の奴隷となるか戒律の主人となるかの問題である、

戒律に使はるゝか戒律を使ふか、使ふものは逸樂して身安く、使はるゝものは苦しくして身常に困憊するは言ふまでもない、然れども世は大低戒律に使はるゝ人のみである、苛酷な主人に逆使せらるゝやうに天地窄く、惴々焉として世を送つて居る、隨て心僻み剛愎になりて、恰も纖子育ちの捻れものゝやうになつて居る、世を悲觀する者惡事を働く者、衷心する者嫉視する者皆此捻れ根性の發現じや之を醫する爲に神や佛は種々樣々の方便を立てゝ轉迷開悟の道を示して御座る、是れが即ち宗敎ぢや。

▲然れども最初先づ戒律の奴隷とならずして直ちに主人となることは出來ぬ、大閤秀吉が天下を統べ群雄を顧使したる以前には先づ信長の草履を執つたのである、秀吉を學ぶ者は彼れが大閤たりし後の事業よりも、先づ彼れが信長の草履を執りし時代の藤吉郎を學ばねばならぬ、今日學校生活のみにて成長せし人達には、兎角此消息が通せない、故に丁稚小僧上りの人に先を越されて居る、古來の英雄決して文字の學問のみにて出來たものではない、寧ろ無學な人が多い、幼時の履歷には隨分慘憺たる物語を持つて居る。

▲更に最も戒むべきは今日の女學生である、然れども亦同情に堪えぬ點もある、要するに唯女子は女子社會にて自ら新世界を發見したがよい、今に方角に迷ふて居る姿じや、新航路に往々犧牲者を生ずるを見て驚く者は寧ろ愚である、暗礁の上には一々浮標を留めたがよい、然れども柔順は女の本性である、柔順ならざるものは已に女の本性を損して居る、先きの所謂捻れもの纖子育ちの僻根性である、此僻根性を醫するの最良藥は戒律である。

▲近代の女英雄と云はれた支那の西太后も、盛春の時三千の寵愛を一身に集めたにも拘はらず能く正妃に事へて誠に柔順であつた、日本の英雄豐太閤も信長の忠僕であつた時節がある、斯くの如く吾人は先づ佛の前に柔順でなくてはならぬ、戒律の忠僕となるのが何よりの先務である、學校の生徒は先づ先生に服從して先生以上の人ともなることが出來る、佛の戒律に絶對服從して始めて佛となることが出來るのである、禪宗の行者などが動もすれば間違つて居る、心戒心戒と稱して佛に柔順ならず戒律に不忠實にして、直ちに佛とならふとして居る、否、已に佛となつた心持で居るかも知れぬ、沙汰の限りである。

▲戒律を守り、守り〳〵て行けば戒律に殺さるゝ場處がある、此處が一超直入如來地の處である、『護生須らく殺し盡すべし、殺し盡して始めて安居』とは此場合を云ふたものである、保羅が「戒律は人を殺すものなり」と云ひし如く、佛敎にても矢張り戒律は人を殺すものである、然れども戒律に殺されねば更に蘇つて戒律の主人公となることが出來ぬのである、此處に宗敎の秘密がある而して戒律の主人公は即ち佛である、要するに戒律の奴隷より進んで戒律の主人即ち佛となるには其間に必ず一度血を流して通らねばならぬ關所がある、耶蘇の十字架が即ちそれである。

二、彼岸

▲昔埃及王の苦軛に堪えかねて「モーセ」が以色列の人民を導いて埃及を出でし時、後からは埃及王「パロ」が追かけて來る、前には淼茫たる紅海がある、進むにも退くにも是れ谷つた時「モーセ」は如何にして之を逃れしか、此物語は「バイブル」出埃及記の卷に委しく說いてある、此一段の話は基督の十字架を釋するに最も適當の場處である。

▲佛敎の淨土門を大成したる善導大師と云ふ人は、二河白道の譬へを出した、或曠漠たる原野を一人の旅客が通行する時、右に虎狼の群が見ゆる、左には毒蛇焰を吐いて居る、後方よりは盜賊が追かけ來る、前に水火の二河ありて、中に一縷の白道がある、水火兩方より其道に打寄する、旅客之を逃れんとして稍躊躇せし時、盜賊遙に後より喚て曰く其危險の道を行くことなかれ、我等は汝と同じく行旅にして汝を掠むる者にあらず、汝を好箇の旅伴と見て此に追ひ及べるなりと、然れども旅客は盜賊の言に耳を假さず謂へらく、止まるも死す進むも亦死す寧ろ進んで死せんのみと、將に步を擧んとする時前岸より喚ぶ者あり曰く、汝正念にして來れ我れ汝を待つこと久しと、又後方より聲あり曰く汝決定して行け前岸に樂土ありと、旅客此招喚の聲と推遣の語とに勵まされて、水火相迫れる此細き白道を踏みて前岸に達すれば、諸善人諸菩薩相迎へて歡樂の中に導きたり、是が即ち極樂淨土である。

▲此譬へは「モーセ」が紅海を渡る時の話と全く一致して居る、其時以色列人の多くは此曠野に死せんより寧ろ埃及に回りて「パロ」の奴隸となるを勝れりとすとて「モーセ」に向つて數々の怨言を吐いた、然れども「モーセ」は衆人の言を容れず、杖を擧げて紅海の水を擊ちたるに、水は忽ち兩分して其間乾士となり、易く之を通過して前岸に達し、追かけ來たる「パロ」の軍隊は盡く水に呑まれて死し、衆皆歡喜踊躍したのである。

▲夫れ戒律は凡て我等を亡ぼす者である、今此物語に於て後より追かけ來たる「パロ」も戒律である、前面に横はる紅海も戒律である、後に還りて再び埃及王の軛を負ふは易く、進で紅海の荒波を踏むは難い、寧ろ難い方を履で活路を得たのである、基督曰く窄き門より入れ亡滅に入るの門は廣く、生命に入るの門は狹しと、彼等は狹き門より入りて生命を得たのである。

▲又玆に復活の道理がある、斯くの如く最も難き戒律を履み、全く神に命を托して險關を冒したる者は活き、退いて易道を求むる者は皆滅ぶるのである、死して蘇るとは此事である、故に戒律は人を殺し又能く人を蘇らすものである。

▲二河白道の譬へに於て、若し旅人が盜賊の言を聽いて後に引戻すか又は左右に避けたならば、忽ち彼れは生命を失はねばならぬ、正念惑はず進むも死す止まるも死す死は一なりとの決心は、即ち神の門に入る諸宗敎の祕訣である、之を佛敎にて般若波羅密多と云ひ「バイブル」にて十字架と云ふの

である、汝等死せざれば天國に入る能はずと基督の宣ひしは此處である。

▲「色は匂へど散りぬるを、我が世誰れぞ常ならむ」と此二句は此岸である、又終りの「淺き夢見し酔ひもせず」は彼岸である、中間の第三句「有爲の奥山けふ越えて」が即ち先きの紅海水火の二河白道である「我が戀は細溪川の丸木橋、渡るに恐し渡らねば、思ふ御方に逢はれない」と云ふ此丸木橋に臨んだ處じや、「我れのみか釋迦も達摩も阿羅漢も、此君ゆえに身を焦しけり」此君とは誰れの事であらう、眞實罠めたる此君に戀愛を遂ぐるには、是非共此丸木橋を渡らねばならぬ。何が故ぞ

深深海底猶嫌淺。　更向金剛水際行

◎火烈之法

一、火烈の法

以色列の神『エホバ』は火烈の法を出して、『モーセ』及び當時の以色列人に之を示せり、蓋『ノア』の神は善人を存して惡人を滅すと云ふ神である、次に『アブラハム』の神は善人も惡人も共に之を存すると云ふ神である、『モーセ』の神に至ては如何なる善人も如何なる惡人も、同等に之を滅し盡すと云ふ神である、此滅し盡すと云ふ處に於て火烈の法が示さるゝのである。

『ノア』の神も『アブラハム』の神も、共に常識を以て解することが出來る、乍併獨『モーセ』の神に至ては、容易の看を以て之を解することが出來ぬ、人々自ら火烈の法に處せられて、而して後に冷煖自知するより外はない。

二、復　活

『ノア』の神にも『アブラハム』の神にも、共に復活と云ふことはない、『モーセ』の神は極善人も極惡人も同等に滅却する代りに、此に復活と云ふことがある、是れ『バイブル』の一大事因緣にして、基督は此世に降臨して吾人に何を示したかと云ふに、唯此復活の道理を事實にして之を吾人に示したるのみの一生涯に外ならぬ、故に基督は預言者約拿の休徴の外我れ汝等に示さずと云つた、多くの預言者は唯道理を以て火烈の法を說明せしも、基督は身を以て具體的にそれを說明したのである、余は『モーセ』の火烈之法を說き出す前に少しく約拿の事蹟を語る必要がある。

三、預言者約拿

昨夜金烏飛入海、曉天依舊一輪紅。此約拿と云ふ人は以色列王朝の初期に出た預言者にして、約拿とは蓋し日輪の義である、彼れの事蹟は恰も日輪が海中に沒して曉天再び東方に現出したるものゝ如く

に相似て居る。彼れ初め『エホバ』の命を帶びて都邑『ニネベ』に往き、邑人の罪惡を問責すべきものなりしに、彼れ畏れて『エホバ』の面を避け、舟に乘じて他に向ひつゝある途中、風烈しく起りて遂に海中に投ぜられたり、斯くて『エホバ』の豫め備へたまへる大魚口を開いて彼れを呑みければ、彼れ魚の腹中に在て『エホバ』に祈て曰く

四、約拿の祈禱

我れ患難の中より『エホバ』を呼ぶ、其れ遂に我れに聽け、我れ曾て陰府の中より呼びしに爾我が聲を聞けり、爾我れを淵心に投じて海水我れを環り、爾の波濤激浪悉く我れに溢る、我れ曰ふ我れ爾の目の前より逐はれたれども、復た爾の聖所を望まむ、水我れを環りて我が靈に及び、淵我れを圍みて海草我が頭に纏ふ、我れ曾て山根に下る、地の關我れを陷れ永遠に及べり、されど我が神『エホバ』よ爾は我が命を深き穴より救ひ上げたまへり、我が靈我が裏に憊れし時『エホバ』を呼べり、我が祈爾に至り爾の聖殿に及べり、虛浮に向つて供事する者は乃ち自己の恩澤を棄つ、唯我れ感謝の聲を以て獻祭をなし、我が誓ふ所は必ず之を償はん、蓋し救拯は『エホバ』より出づ。

五、三日三夜

彼れは斯くの如く祈りて魚の腹中に在ること三日三夜なりき、神は遂に其祈りを聽き魚に命じて彼れを陸上に吐き出さしむ、是れ恰も以色列人が埃及を出で、紅海に身を投じて、『ヨルダン』河より出で來たりし、其間の泉下旅行と途轍を同うして居る。

基督は三日三夜地下に葬られて四十日間の傳道をなせり、此三日三夜と四十日間とは是れ同か是れ別か、『バイブル』を讀むものは先づ此三と四との關係を知らねばならぬ、約拿魚腹を出で〻『ニネベ』の邑に入り宣言して曰く、猶四十日を歷ば『ニネベ』の邑は必ず傾圮せんと、『ニネベ』の人神を信じて大より小に至るまで禁食して皆麻衣を著く、王も亦之を聞て位より起ち、朝服を身より脫して麻衣を着け灰に座し、令を邑中に出して曰く、人も牛羊も等しく何物をも食ふべからず水をも飲むべからず、人畜皆麻をまとひ疾呼して神に籲ふべし、各其惡途を離れ邪行に遠ざかるべし、神或は其烈怒を息めて冀くは我儕の滅亡より免るゝを致さむと、夫れ『ニネベ』は大邑にして歷程三日を要すと云ふ大都會であつた、約拿其の邑に臨み行くこと僅に一日程なりしに、已に其言を聞て改悔復歸能く此くの如くなるを得たるは、抑何を以て然るか、邑人の齊戒四十日と約拿の魚腹三日三夜とは、其の間に人々の自得を要するものがある。

六、同條死

斯くの如く問罪使約拿は『ニネベ』に臨みしも、邑人已に改悔して畜類に至るまで悉く『エホバ』に復歸し罪の問ふべき者一も存するなく、草木園林自ら東風の管するありて、更に彼れが栽培の力を假らざりき、彼れは功を樹つるに由なくして、空しく還り去るに及べり、されば彼れと同條に死するものは、必らず彼れと同條に生ることを得べく、『モーセ』の四を了得するものは、又自ら基督の三を會することが出來るのである、夫れ基督は修行地にありしこと三十年、傳道に從事せしこと三年、又陰府に下りて其處に三日を經て居る、此三の數は『モーセ』の四の數を離れて解ずべきものでない、『モーセ』は陰西埃及に在ること四十年、陽臬『ミデアン』に在ること四十年、再び降て中央泉下を旅行すること四十年にして、彼れが一生の事業を畢つたのである、斯くの如く彼れ三變して地に歸し、終に先祖の數に加はりたれども、彼れは常に天に在ることを知らねばならぬ、基督三移して終に天に歸し神の右に座したれども、亦常に地に在て吾人と肩を交ふるを看ねばならぬ。何ぞや、

七、水中の火

『ノア』方舟に乘じて天に達し全く地を離れたれども、其處には神を見ること能はず、『モーセ』は地下を潛りて九泉の下、神に逢ひ神と語り又神の位に座して居る、彼れは水中に在て猛烈の山を蔽ふを見て居る、是れ地獄か是れ淨土か、蓋し『バイブル』を讀む者は、火中に水あり水の中に火あることを知らねばならぬ、故に『モーセ』が水を出す時には必らず西乃山（シナイザン）の熱石より出して居る、穢は淨中より出で藥は毒中より來り、苦きは直に甘きに變じ、悲しきは直に喜びとなり、賤しと思ふものは却て貴く、得と思ふものは寧ろ失となり了る、是れ『バイブル』である。

八、地藏菩薩

斯くの如く見來て更に點檢すれば、地を離れて天はないのである、天竺の神話に驢唇仙人と云ふものがある、彼れの母驢馬に合して彼れを產み彼れの唇が驢馬の唇に似て居つたと云ふので爾く名けたものである、又彼れは能く物を嗅ぎわけると云ふので香味仙人とも呼ばれて居つた、抑彼れは當時の天文學者にして、常に伽拉諦耶山と云ふ山に住して天文を研究して居つたのである、次第〳〵に天文を研究して、其極に達したる彼れは、地を離れて決して天なし、天文地文畢竟一法界なることを知り寧ろ邇きに求むるの便且つ易きに若かざるを見て、終に地文學者と變はつた、地藏菩薩は即ち是れである。

九、父　神

然れども彼れは其初め天文學者たらむと欲して還つて地藏菩薩となつたのである、斯くの如く吾人

は能く人たらむと欲して先づ神にならねばならぬ、此神を佛教にては報身佛と云つて即ち天に在ます父神の位に當る佛である、佛教に法身報身應身と三身の別あるが如く、以色列の神にも父神、子神、聖靈と三位が立てられて居る、畢竟一體には相違なけれども、其働きの顯はる處に於て自ら別名が附せられて居るのである、斯くの如く三位にして神の全體具はると雖も親しく其全體を覩はむと欲するものは、先づ在天の主即ち父神より始めねばならぬ、父神を見ること熟して後子神といふものが出で來たる、子神と父神と合する處に於て更に聖靈と云ふものが現はるゝ、此聖靈と云ふものが現はれた時には、吾人の自己本來の面目が見ゆる本來の面目が見ゆれば直に神の三位一體が手に入るのである。

十、「バベル」の塔

されば吾人は自己を見むと欲して先づ神を見、神を見むと欲して先づ父神を見るの順序である、『アダム』、『エバ』が樂苑を失墜してより後は、天國は何くに在り、神は那邊にましますかと、切りにそれを尋ねて所有方面を徘徊した、由來人の想像する處先づ天上にあらざれば山上と云ふやうになつて居る『アダム』の子孫は水草を逐うて牧畜を業とする種族なりしを以て、其憧憬する所自然天上の星に在つたのである、而して『エノク』と云へる者神と偕に歩み、終に携へられて天に昇りし爲、下界は穢土にして聖宮は天上に在りと云ふ信仰、彼等の性となつて終に『ノア』に及んだのである。

『ノア』の子孫が『シナル』の地に平野を得て、其處に住ひし頃は尚全地一音一言語にして、舊信仰方に其絶頂に達せし時であつた、彼等は塔を建てゝ其頂を天に至らしめむとして且曰く、我等人衆の四方に散るを免れよ、我等の名は長へに此塔上にあらむと、後世『バベル』の塔と稱するもの即ち是れである、今も尚此『バベル』の塔を築かんとするものが多い、特に東洋には最も多いのである。

十一、破壞の神

舊信仰は此『バベル』の塔を以て終つて居る、而して之を毀ちしものは『アブラハム』の神である、神は彼れを『カルデア』の『ウル』より挈へ出でて、『ユウフラテ』河を渡り迦南の地に往きて住はしめたり迦南とは彼岸の意にして、又彼れが墳墓の地と定めたる『ヘブロン』は水を渉るの義である大川を渉り彼岸に達したる彼れは其觸るゝ所の者根基毎に動搖せざるなく、世界の所有『バベル』の塔は彼れ及び彼れの子孫に因て毀たるべく、神は彼れに一の生命を賦したり、されば彼れが福祿の源泉實に此に在るを以て、子の『イザク』孫の『ヤコブ』皆其業を享け、『ヤコブ』は劍を用ひ、『イザク』は德を以てして到る處『バベル』の塔を傾け、三代能く『エホバ』の命を完うしたりければ、他日彼岸の地迦南を占領せしむるの約束は、此時に成立して居るのである。

十二、難解の問題

抑水を渉りて彼岸に達したるものは、何故に能く『バベル』塔を毀つを得るか、是れ一たび水を渉りたるものにあらざれば、解することの出來ぬ問題である、『モーセ』紅海を渉りて東方の諸王悉く路を開き『ヨシュア』、『ヨルダン』河を渉りて、迦南の五族三十一王忽ちにして斃れた、夫れ以色列人は一行の旅人に過ぎず體軀倭小武器も完からず、辛うじて糧に敵に藉て戰ふたのである、繇て敵を見れば山河の形勢に憑り、城壁堅牢人皆魁偉、以色列人は彼等に比して殆蝗蟲の如くなりしと云ふ、加之敵は常に戰ひに慣れ、當時最も精巧の武器を用ゐて、馬に騎り駱駝に跨り又鐵車を以て、我れに當つて居る然れども神軍到るの一聲に皆魂を銷して、戰ふ力なく、向ふ所相迎へて刃を受けたのである、彼等は更に大國相約して同盟軍を組織し、終局の決戰を試みたれども、更に其甲斐なかりき、已に斯くの如くなれば山河草木も彼等の有にあらず、其處には『アナキ』人とて最も以色列人に懾れられたる强力偉大の蠻族ありたれども、亦神軍に敵する能はずして屏息するに至れり、而して以色列人も自ら其力を識らざりぎ唯不思議不思議とのみ思うて居たのである。

十三、十二卷經

然れども基督十字架に懸りて、秘密の鑰一たび吾人の手に屬せしより後は、此事決して不思議にあらず、基督曰く我れと偕に死せざれば天國に入るを得ずと、基督と偕に死し基督と偕に蘇りし者は、何人も之を怪まぬのである、而して此死と云ふことに就ては『バイブル』は最も痛快に之を示して居るのである、其中にも出埃及記、利未記、民數略記、申命記の四書は、死の內容を最も明細に而かもそれを極めて適切に見せて居る、我が十字架教にては、創世記より列王記略下までの歷史部十二卷を所依の經典として、之を常に讀誦せしむることゝなり居れども、中に就て出埃及記利未記民數記略及申命記の四書は十字架の內容を會得するに最も大切のものなれば、讀誦功德も隨て亦大なることを特に注意するのである蓋し基督の『ヨルダン』河洗禮の上より見れば十二卷經全部が取りも直さず十字架の內容である、即ち基督の前三十年間は彼れが受洗期にして、其『ヨルダン』河より出でゝ四十日四十夜惡魔に試驗せられたるは、即ち彼れが修行期三十年間に在て、如何なる境遇に接し、如何なる經驗を履み、又如何なる慾望思想を經て、其間幾變遷せしかを一目瞭然たらしめたるものである而して四書は其中堅をなして居る。

十四、四千年の旅行

夫れ十二卷經は『アダム』が智慧出で眼開いて『エデン』の樂苑を離れ荊棘林に彷徨すること四千年終に『バビロン』王『ネブカドネザル』に捕へられて、子供は目の前にて殺され、己れは銅索を以

て繋がれ、兩目を抉り出されて黑暗無底の獄に投ぜられ、忽ち舞臺廻つて一變すれば、彼れは獄衣を脱して紫服を著け、諸王の上に座し、善言を以て慰められて居ると云ふ一段にて、大切りとなつて居る。

斯くの如く舊『アダム』の幕は四千年に亘つて、其間幾變遷幾小段落となつて居れども、畢竟するにアダム一人の歴史である、敵あり味方あり善人もあり惡人もありて、無數の人それ〳〵に所作を演ずれども、箇は凡べて『アダム』の心性を示したるものに外ならず、若し之を別人と見ては十二卷經は解せられぬのである、終りに至り其一轉して衣を更へ諸王の上に座し、善言を以て慰められるゝものは、彼れが四千年の旅行より歸り來つて家に穩座し、家人の慰めを受けつゝある、新『アダム』の姿を示したるものである。

十五、無眼流

斯くの如く舊『アダム』は、最初智慧づき眼ひらけて『エデン』を出で來り、新『アダム』は無智無眼となりて『エデン』に歸て居る、昔一人の武者修行者あり日暮れ途遠く遙に前程を辿りつゝ行く處に、一の溪流ありて、千尋の下岩間に渦く碧潭は、幽かなる底に咽びて物悽し、削るが如き兩岸の上に唯丸木橋一本を架して、人の來往に供してある、流石の武者修行者も、之を見て膽冷え身戰いて渡り得ず、兎角躊躇しける間に、後より一の盲人來り、杖の先にて橋を探り、頓て杖を腰に挿みて、宛ながら猿猴の林梢を度るが如く、何の苦もなく過ぎ行きければ、武者修行者之を見て以爲らく、我れは目あるが故に恐れ、彼れは目なきが故にためらはずと、大に發明する所ありて、終に一流の創法を唱へ之を無眼流と稱せしと云ふ。又薩摩人に示現流と云ふものがある、昔し東郷重位と云ふ人が紫野大德寺派の天寧寺住職善去和尚に授けられたる劍法にして、捨身一番敵の手元に斫り込むのである、島津義弘が關原の役に、東軍を踏で東に遁れたるためし、樺山資紀が黄海の戰ひに、敵艦を衝いて却て全きを得たる等、皆此示現流より出たる彼等得意の技なりと云ふ、彼等は處世の術に於ても常に此示現流を用ひて居る、天正以後の薩摩人には實に商の特色がある。維新前まで佐賀邊に最も流行して居つた體捨流と云ふものも、亦彼の無眼流と等しく、情想意識を滅し全く眼を瞎却して敵に對するのである、一歩退けば危險界に落ち、一歩進めば安全界に入るは、百般の道に於て同じである。

十六、目なし籠

此心法は遠く神代の昔より我が邦には具つて居るのである、彦穗穗手見命、兄の火照命に窘められて一日海濱に徨ひ給ふ、時に鹽椎神來りて事の本末を問ひ奉り無間勝間之小船を造りて、之に命を載せ參らせて海底深く沈め遣りたり。

命は海底深く沈みて龍宮に入り、龍神の女豊玉を娶りて歸り來り威勢甚盛なりければ、兄の火照遂に服して其臣僕となれり、是れ即ち目なし籠の謂れである、此神話は『ヤコブ』が兄の『エサウ』を避けて『パタンアラム』に入り、其處にて妻を娶り多くの子女隷僕羊驢を得て歸りしと一般、又『モーセ』が埃及を遁れて『ミデアン』に入り其處にて祭司『リウエル』の女を娶り、『ホレブ』山にて潮滿瑲潮沽瑲の杖を得て歸りしと一般、其他此系統に屬する神話は『バイブル』中にも古事記中にも澤山ある、蓋し吾人の容易にすべからざる教義が此神話の中には含まれて居るのである、而して必らず皆無眼にして龍宮に入り、無二の寶珠を得て歸つて居る、又其龍女と初めて相見る必らず井傍に於てす、是れも亦大に意味あることである。

十七、龍宮

佛教家が龍宮の光景を徐して、七重の垣墻七重の欄楯周匝莊嚴にして七重の寶鈴珠網間錯、復た七重の多羅行樹あり扶疎として蔭映圍繞妙色觀るべく、衆寶莊校謂ゆる金銀琉璃頗梨眞珠硨磲馬瑙の七寶を以て成る、又四方に於て各諸門あり各重閣樓觀あり、又諸々の園苑泉池あり各花草あり、行伍相當り並に諸樹あり、種々の花葉種々の菓實種々の香薫あり、又種々の鳥あつて各自に鳴くと曰うて居る、是れ何を意味するかは須らく宗教眼を具して窺はねばならぬ、支那人は龍の形に九似ありと說いて、頭は駝に似、角は鹿に似、眼は鬼に似、耳は牛に似、頂は蛇に似、腹は蜃に似、鱗は鯉に似、掌は虎に似、背は八十一鱗ありて九九の陽數を具す、其聲銅盤を戛つが如く、口の旁りに鬚髯あり頷下明珠あり、喉下逆鱗あり頭上博山あり、又尺水と名く氣を呵し雲と成す、既に能く水を變じ又能く火を變ず、と斯く奇怪なる想像を龍に托して居る。

十八、兩頭の蛇

此奇怪なる龍說が『イスラエル』神話に於ては其如何に顯はれて居るかを見るに、最初彼れは善惡兩頭の蛇身を現じて、『エデン』樂苑上苦樂憎愛生死等の荆棘を發生せしめ、樂苑は忽ち變じて苦土となつたのである、次に彼れは一條の赤綬と現はれ『ユダ』の腰に纏ひ、又破壞の『ネバレズ』を縋下して窓より出せり彼れは更に亞拉比亞の曠野に伏して『イスラエル』人を嚙むこと無數、人皆聲を擧げて叫ぶ、其時『モーセ』銅を以て蛇形を造り之を竿頭に掲げて人に看せしむれば其傷立所に癒え去る、此赤條子甚不思議である。

十九、銅蛇

竿頭の銅蛇を見たるものは、諸谷埋められ山崗夷げられ曲りたるは直く崎嶇は易くせらるゝの道理

あり、先に『イスラエル』人を惱ましたる者は何物ぞ、今彼等を癒やしたる銅蛇は是れ又何物ぞと、深く研究する所に初めて『アブラハム』と相見ることが出來るのである、何故に天上の『ノア』は神を見ることを得ざりし也、『モーセ』は如何にして神を見しや、天上の方舟は唯八人を載せ、地下の花箱は無量無數の人畜を救ひ、『バベル』の塔の經營は終に徒勞に歸し、名譽は還て地獄の底なる踏石の面に留め雲上の虹は消へて約束の神樞は九泉の下より昇ぎ出さるゝの次第因緣は、悉く出埃及記利未記民數略記申命記の四書に認められてある、四書は實に草間に伏して行人を惱まし、火蛇の焰毒である、一轉して銅蛇となりしは龍宮の光景である。

二十、ゴルゴタの刑場

佛說に善財童子が妙峰頂に德雲比丘を訪ふた、七日七夜山の頂上を尋ねたれども見當らず、終に別峰に在りて德雲比丘の逍遙するを見て、之に就て道を問ひ三昧法を得たと云ふ話がある、之と正に等しく『シオン』山上に基督を尋ねても到底見當ることが出來ぬ、必らず別丘の『ゴルゴダ』と云ふ刑場に於て彼れを見ねばならぬ、曾て『ノア』は『アララット』山上に於て彼を見ることを得ず、今還て『アブラハム』の子孫は地獄の底なる『シナイ』山に於て彼を見ることを得て居る。夫れ當時石器時代已に過ぎて鐵器時代未だ來らず、方に是れ銅器時代なりしことを念へば、煩惱即菩提生花即涅槃、嫉妬の神は、直に是れ愛の神なることに想到するのである。

廿一、アブラハムの神

斯くの如くにして『アブラハム』は、才步を移さずして天に上り地獄に入り、微塵刹界に其の身を現じて常に帝座を離れぬのである。（未完）

◎十字架教講話（口述筆記）

第一講　十字架教の綱領

十字架教の綱領は一に讀誦、二に復活、三に統一なる事は豫て云へるが如し。然れども其要を云へば復活にある事明かなり、如何となれば人の心的病症は何より起るかと云ふに、凡て一事を固執したる結果に外ならず。是れを佛教にては執着、愛、染等と稱す。十二卷經の所謂偶像是なり。此偶像を破壞するを目的とするは獨り我十字架教に止まらず佛教儒教神道等に於ても亦然り、神道にては禊、佛教にては波羅蜜多、易にては大川を渉るなど云へる即ち我十字架と稱するものなり。

是を換言すれば破壞すると云ふ事にて其破壞に二あり。佛教にて所謂我空法空と云ふものにして、我空とは我を破る事、法空とは我に對する神、佛、物即ち對象物を破壞して殘さざる事なり。禊、大川を渉る等同じ。十字架教の所謂十字架にして神も我も共に滅する事なり。基督が十字架に懸りしは即ち此破壞を行ひたるものなり。

基督は己を破壞すると共に『エルサレム』の殿堂を破壞したり。彼が死して血を流せし時に『エルサレム』の殿堂幕上より下に破れたりと云へる即ち是なり。

十二經に之を徵すれば『ノア』の洪水『モーセ』の紅海『サムソン』の死等凡て己を空し同時に他も亦變ずるの意なり。

『モーセ』が『シナイ』山上にありて十戒を受けたる時に其手に二つの石碑を持ちて山を下り民衆が金の偶像を作れるを見て、先づ其偶像を破壞せざる前に己の身なる石碑を拋ちて之を破壞し、次に偶像を破壞したる所以をよく〳〵味ふべし。

斯の如く破壞したる結果は即ち神なる『モーセ』と人なる『アロン』と一致し、一の大なる人格をなせり。是れ即ち『ヨシャ』なり。否『ダビデ』及び『ソロモン』基督等皆是れ神人一體天地同根を表したるものにして。即ち統一なり。故に破壞に入る前に先づ讀誦し、其結果天地自然の統一を來すの道理あり。十二卷經を讀むには二つの割禮を知らざるべからず。第一の割禮は洪水にして、第二の割禮は紅海なり。此紅海なる第二の割禮を後世洗禮と稱せしなり。基督は『ヨルダン』川の洗禮を以て第二の割禮を表せり、是れ即ち十字架にして我十字架教の名を冠する所以なり。故に十字架には第一第二の割禮凡て我洗禮上の復活に要する素質を悉く含有するものと見るべく佛教にて波羅蜜多、神道にて禊、易にて大川を渉る等の事皆此外に出でず。

禪宗にて座禪するも、念佛宗にて念佛するも、我十字架教にて讀誦するも、皆此復活に向つて進むの修業なり。故に復活を求むるには、讀誦最も肝要なる事云ふ迄もなし。

統一を得れば人々皆種子と云ふ者を得、『ヤコブ』の『イスラエル』と稱せられたる、『アブラム』の『ア

ブラハム』と稱せられたる、『モーセ』と稱せられたる、皆此種子を表したるものなり。故に十分已に統一の智識來る時には『イスラエル』は如何にして兄『エサウ』に勝ちしや、『サムソン』は如何にして強かりしや、『ダビデ』王が王となりしは如何なる長所を持しや、等の根本種子を分明に見るを得べし。例へば伊藤が立脚地の固き、西郷が人望を得たる、其所以實に顯微鏡にて僅に窺ひ得べき程の微分子一粒を有する事迄も之を明かに見る事を得べし。千遍萬遍十二卷經を味ふ中に之を自ら自得するの期あるべし。是れ即ち統一の端緒にして天地は只一家の微分子に依て統一せられたる事を見るべし基督が所謂芥子粒程の信仰あるのもは天地を得べしといひ、汝等は地の王なりと云へる皆之なり、是れは一旦十字架に懸らざれば明らかならずと雖も。讀誦の問に其道理丈けは自然に會得せらるゝ所あるべし。

第二講　十字架教の特徴

我十字架教に於て其特徴を列擧すれば元より指を屈すべからず。今其一を茲に掲げんに我十字架教時代の思潮に適する事、否時代思潮が寧ろ十字架教を追ふて推移する事是れなり。我十字架教に於て最世も人の忌む所二あり。即ち偶像を拜する事勿れと云ふ教と破壞する教と是なり。是れは佛教にも儒教にも等しく說く所にして最も肝要なる一事なれども、我十字架の如く著しく言ひ現はし且嚴重に之を教ふる者はあらず。

凡そ物には反對の結果あり。例へば內陰なる者は外必ず陽なり。內陽なる者は外必ず陰なり。即ち文珠は內陰にして外陽なり。普賢は內陽にして外陰なり。恰も折伏門なる『ヤコブ』(推除ける義)が母より出で攝取門なる『イザク』は父より出つるが如し。斯の如く『エホバ』の狹隘にして偏重我は烈々なる嫉妬の神と云へる所に彼の博愛なる作用存するを知るべし。

『エホバ』が天に導き地獄に導き或は埃及の奴隷となし或は『ミデアン』に客たらしめ又士師時代王朝時代に於て常に敵國の軛下に服せしめ殆んど寧日なからしむる者は吾人をして圓滿なる頭腦を養はしめんが爲めなり。斯の如く吾人を困難の地に導くには彼の偏狹なる所謂嫉妬の神に非れば能くせざる所にして恰も父の嚴重は其子をして種々の艱難に堪へしむる効あるが如し。父と母との區別を以て『エホバ』と基督との關係を見るべし。基督の愛は即ち母の愛にして父の嚴格之に先だゝざれば其効力鶏の出づる前に先づ枯淡なる『マナ』を與へたるが如し茲に知る夜は鶏となり晝は『マナ』となりたるも畢竟『マナ』變じて鶏となり鶏變じて『マナ』となり其實體を同ふするが如し。之を要するに極めて博愛慈仁の德を養ふには狹隘なる『エホバ』の家庭に入らざるべからず時代思潮の圓滿なる風潮を遂ふには最初其導かるゝが儘に水中にも火中にも天上にも地にも隨所に從ひ行かざるべからず。之れ即ち雲の柱火の柱にして先の所謂破壞なり。

第三講　十字架教の目的

十字架教の目的は之を要するに天下の人を一個の家族制度となすことあり。之を統一するものは即ち復活したる『ミカド』なり。『ミカド』に幾十人幾百人乃至幾千萬人あるも十字架教に依て復活したるものは、互に相矛盾する事なし、只復活の經路に依て或は禪、儒其他種々の方法に依て異る所ありと雖も、若し專一に我十字架教の經典たる十二卷を讀誦する結果、復活をなしたるものは一器の水を一器に移すが如く方杭に方枘を打ち込む如くなるべし。其相違はとの慮は畢竟未だ復活せざるものの杞憂に過ぎざるべし。

第四講　讀誦

太古宗教の成立して一の戒律起るや先づ之を寢食寤寐の間に誦せしものなり。次に經典出づるや朝夕之を讀誦したるものなり。

回々教は其經典『コーラン』を讀む事恐らく他宗の及ばざる所、凡そ『バイブル』位の書を或者は一生に八九萬遍も讀むといふ。朝比奈和泉が土耳其に遊びし時聞きし所によれば、五十餘りの老兵に向つて『コーラン』を幾遍繰返せしやと問ふに七萬遍と答へしといふ。更に驚くに絶えたり。此讀誦功德は獨り回々教のみならず佛教にも之れ有り。則ち試に法華經を繙き之を見れば只讀誦のみを勸めあるが如し。

特に讀誦品といふ一冊さへあり。其内に謂ふ讀誦の功德は三千世界に滿てる財寶を以て人に施すに勝るとあり。又最勝王經に此讀誦功德を示して其誦する所極めて誇大なるが如し。又金剛經にも此讀誦功德を書せり。要するに佛教は華嚴、方等、般若、法華、涅般、等皆此讀誦を以て最も功德の大なるものとせり。支那に法華傳と云ふものあり。法華經を讀みし者の受けし功德を載せて讀誦の功德の大なる事を教へたる書なり。又日本に本朝法華傳なるものあり、深草の元正坊の著にして、同じく法華經を讀みし者の受けたる功德を示したり。斯くの如く佛教は讀誦に最も効ある事を誦せり。

斯の如く古は殆んど宗教の儀式として又其功德を受くる方法として終りに修行の極致として此讀誦功德を積みたるものなり。支那も又斯くの如く孔子の如きは素讀百遍義自から通ずと云へり。我神道の大祓の如きも即ち神の戒律を簡單に纏めて之を讀誦したるものなり。日蓮の題目、親鸞の稱名皆之れ讀誦に外ならず。座禪は此一歩進みたるものと見て可なり。故に畢竟宗教なるものは其變化に於て種々樣々ありと雖も元は一の讀誦に過ぎざるなり。婦人の如き日夜多忙にして教を聞く事能はざるもの、或は無學にして理を解する事能はざるものも只讀誦を以て復活する事を得るなり。

我十字架教に於て其十二卷經を細かに讀破すれば此讀誦の功德を現する所多く、凡そ三四ヶ所も表はれたり。基督も又人の愚なる間に對しては常に聖書を讀む事の足らざるが故に斯の如き愚かなる問を發するなりと叱せり。然れども別段に讀誦功德を稱せざるものは抑も故あり。即ち讀誦といふ一の偶像を鑄造するの恐あればなり。然れども畢竟するに基督教は十二卷經の讀誦功德に外ならずして、

基督其人が取りも直さず此讀誦に依て復活したるものなり。之れ普通の所謂耶蘇教徒が容易に肯ふ事能はざる所なれども久しく讀誦する間には自ら之れを心に誦する事を得べし。

◎謀反の神

政黨員となる人、社會政策家となる人は、世に謀反の神あることを知つて之を信ぜねばならぬ。昔『イスラエル』に『サウロ』と云へる王樣があつて、其下に『ダビデ』と云ふ家來があつた。此『ダビデ』『サウロ』王に忌憚せられて諸所を逃げ廻る間に、六百人の者が彼れの手下となつて、苦樂存亡を共にしたのである。此六百人は何者なるかと云ふに、皆是れ負債ある者、苦心の者、患難の者、社會の競爭に敗北して賴る所なき者のみであつた。是等が一人の『ダビデ』を擁して旗を擧げ、遂に『サウロ』王の天下を奪うて『ダビデ』の手に歸せしめた。

△元來『イスラエル』の神と云ふものは、弱い者に加勢をする神である。昨日の智者を今日の愚者とならしめ、去年の富者を今年の貧者とならしむる神である、蓋し貧者が富者となり、富者が貧者に復り、智者愚者弱者强者相循環するは、一般世間の常相なれども『イスラエル』の神は、此循環を速かならしむる方法を人に敎へ、又內より之を助くる神である。『ダビデ』は此神樣の意を能く了得し、『サウロ』は然らざりし爲に、天下を失うたのである。

△譬へば此に貧者富者王者及び神と云ふやうに四種の階級がある、貧者の上には富者富者の上には

王者、王者の上には神、而して神の上には何があるかと云へば、最下の貧者は神の又神である。『イスラエル』の神は實に此くの如きものである。『ダビデ』『サウロ』王に殺されむとして遂に亡命し、諸國を流浪する間に、患難と云ふ患難に出逢ひ、加之『サウロ』は千金を懸けて、『ダビデ』の首を求めた、世には又同病相憐むものがある、即ち負債ある者、患難ある者、苦心ある者『ダビデ』と同じく世に容れられざる者があつて、一人來り二人來り、次第〳〵に來り附いて、終に六百人集つた、此一團が中堅となつて天下之に歸したのである。

△此の如く『イスラエル』の神は、常に貧者に與みして富者に與みせず、貧者をして常に上らしめむとし、富者をして常に下らしめむとして居るものである、張九齡の所謂、高明逼二神惡一である、世人若し神意を解して、神は貧者に與みするものなるを知らば、吾人は此に貧者萬歳を叫ばねばならぬ如何となれば神は貧者を以て啻に之を子とするのみならず、能く父となし主となし友となし、之を敬するものを神も亦之を敬し、之を侮慢するものを神も亦侮慢するのである、世人は神が貧者を子として愛しみ、友として親しむことは之を知るも、或は父とし主として之を敬することを知らぬのである。

△神は常に貧者を益し、富者を損せむとして居る、之を知らざる者は曰ふ、神は富者をして益々富ならしめ貧者をして益々貧ならしむと、獨り知らず、貧者或は是れ眞の貧者にあらざるを、若し眞實貧ならば窮まつて必らず變ずるの道理じや、決して憂ふることもない恐るゝこともない、貧者よ貧者よ汝等意を強うして可い、貧之神は却て富者の中に宿り、福の神は常に汝等と與に在り、汝等全身を放つて貧に向つて進め、去年貧有レ錐無レ地、今年貧無レ錐無レ地と云ふ處まで進め、進み進みて貧の底に達したる時には必らず其處に富あらむ、一陽來復の節其處に在りと知れ、外に向つて富を求むるなかれ、富は貧所に在り、何ぞや。

△神は己れを濱するものも之を救す、己れを詛ふものも亦之を救す、然れども貧者を詛ふもの濱するものをば之を救さず、之を侮るもの虐ぐるもの、之に向つて無情なるもの不利なるものは、凡べて神の敵である。譬へば吾人己れに對して無禮なるものは能く之を忍ぶも、我が父に對して無禮を加ふる者あれば、寸時も之を容忍することは出來ない、斯くの如く神は貧者を以て父と做し、主と做すが故に之に敬愛を拂ふを福の最上なるものとなし、之を冷侮する者を罪惡の極となすのである。孫子に先づ其の愛するところを奪ふとある、是れは敵の根據を奪ふ最上の方法となつて居る、貧者の心を奪ふは即ち神の最も愛する所を奪ふの道理にして、此外に決して神を捉へ得る方法はない、農は國の基なりと云ふ語がある、余を以て言へば、貧者は國の基である、貧者の心を失うて一日も國家は立つものでない、故に古來政權を爭ふ者と戰ふ者は、不レ知不レ識貧者を奇貨として、其心を得むことを勉めて居る、貧民窟裏政權の爭地あるを知つて、先づ之を占領したる者が、能く天下を取るのである。

△『ダビデ』は其敵『サウロ』王の愛子『ヨナタン』と靈が一體となつた、『サウロ』が『ダビデ』を尋ねて

之を殺さむとせし時、『ヨナタン』は父の計謀を『ダビデ』に通じて、毎に難を遁れしめたのである、斯くの如く吾人は貧者と靈の一致を得れば、敵の計謀は容易に之を諳することが出來る、貧者は毎に反間を爲して吾人に款を通ずるの作用をなして居る、故に貧者の心を失ふものは敵を知り亦己れを知ることが出來ぬ。『サウロ』は又『ダビデ』に其愛女『ミカル』を妻はして、『ダビデ』を計らんとした、然れども『ミカル』は、其夫『ダビデ』を愛して、毎に其干城となつた、貧者は實に吾人の干城である。

△斯くの如く貧者は毎に吾人の反間となり、干城となつて、敵情を吾人に知らしむるのである、敵情を知悉したる吾人は、如何なる敵の弱所をも之を衝くことが出來る、西洋には貴族を除き盡すと云ふ一派の組合がある、貴族や富豪を除くには必しも血を流すには及ばぬ、必しも過激なる辯論を用ふるを要せぬ、唯個の貧者と一點靈犀相通ずる所あれば、それで什分足りて居る。故に『ダビデ』は如何なる場合にも、其敵『サウロ』に向つて、干戈を推さなかつたのである、『サウロ』は『ダビデ』の手中に落ちて、之を殺し得べき機會は幾度か與へられ、部下の者は機失ふべからずとなし、戈を擧げて之を殺さむとしたれども、『ダビデ』は毎に之を制して、敢て手を擧げて天の貧者に向つて禮を失ふなかれと敎へ、唯自ら身を全うせむことを謀つた、然れども彼れ曰はく、王よ爾は誰れを尋ぬるや、恰も一の跳蚤を尋ね又鳧鴨を野に逐ふが如しと、今日權力反抗者を羅致せんとする者に向つて、宜しく此言を發すべきなり、彼等は鳧鴨を逐ひ跳蚤を尋ぬるものと一般である。

△夫れ富豪と云ひ權威者と云ひ、天の貧者である、之に向つて禮を失する者には、吾人も亦與みすることが出來ぬ。然れども若し貧者に對して不利なる者は、是れ神に對して不利なるもの、貧者の仇は即ち神の仇である、神の仇は吾人の仇吾人は一日も之を忍ぶことは出來ない、縱令干戈を動かさるも兵法自ら在る有り、我等の宗敎は即ち其れである。謀反人なる哉、謀反人なる哉、壓逆者暴利者に向つて謀反するは吾人の天職である、男兒快心の事此謀反を含いて他に求むべからず、宗敎と云ふ平和の戰爭は、弱者を扶けて强者を挫くにあり、而かも此くの如くなりと雖も、謀反の二字を讀者は如何に解するか。

△謀反の二字は敢て强者に向つて反抗するの意にあらず、之を誤り解せられては甚迷惑である。抑も社會には、智者あり、愚者あり、貧者あり、富者あり、强者あり、弱者あれども、鶴の脚は長く鴨の脛は短く、皆能く調和して其の平を失はない、例へば地上山あり川あり、峻嶺の下必らず幽谷あるが如く、天は高く地は低く、世間相は自然の美を得て居る、中に何としても調和することの出來ぬ性格の者がある、是等は社會外に排斥せらるゝより外はない。『ダビデ』の如きもの即ち是れである、彼れは『サウロ』の天下に容れられず、終に去つて、同じく排斥に遭ひたる彼の六百人と共に、理想の天國を造つて之に居ると雖も、『サウロ』の天下に向つて、一矢を放たず、寧ろ『サウロ』の藩屏となつて、之を保護したのである。

△今日の社會主義者を見るに、或は無政府主義を唱へ、權力者を罵り、富豪を嘲り、財産平均とて目も鼻もなきノッペラボウの面相を描いて居るものかある、吾人は曲線の配合よき凹凸美人を愛するものである。然らば謀反の二字は何を意味するか、唯社會の最下級弱者の靈に一致する是れ强者に對しての謀反たり、吾人の謀反は極めて平和である。夫れ社會は貧者を足とをす、吾人は其足を捉ふるものである、基督其弟子『ペテロ』に向つて、汝魚を漁するを以て業となす、我れ今汝に人を漁する術を敎へむと云ひし其術とは、即ち貧者の足を洗ふことなりき、權力者も富豪も其足を捉へられて、復た何をか能くせむ、再び請ふ謀反の二字を誤り解するなかれ。

十字架教講話集（下終）

「バベル」の塔

以色列神話

バベルの塔（上）

◎大洪水

天下の口音は唯一にして言語も亦一なり。茲に人衆東に徙りて「シナル」の地に平野を得て其處に居れり。彼此互に論じて曰く。來れ相共に甎石を作りて之を燒かんと。遂に石の代りに甎石を獲。更に灰沙の代りに石漆を獲たり。又曰く來りて邑と塔とを建て。其塔の頂を天に達せしめ。以つて我等の名を揚げ。天下に散處するを免れんと

這れは猶れ以色列人の神話にして。創世記第十一章に見えたる。數節の話である。抑も彼れ等の祖先「アダム」「エバ」が。「エデン」の樂苑を失墜して後。其後裔に「エノク」と云へる者あり。神に接られて身を隱せり。蓋し其子孫は彼れが神に挈られて天に登りしものと信ぜしならん乎。「エノク」の曾孫「ノア」も亦穢を避け淨を求め。天に向つて去り方舟に乘じて。諸山より高きこと十有五尺の處に達し。周易に所謂天地否 ☰☷ をなして。上下交はらず。地上の生物救ひ得たる者は。同舟の八人と獸畜昆蟲の唯僅に數ふべき底に過ぎざりき。其他は皆蓐漫たる洪水の爲めに掃却せられて天淵始めて其の源を塞ぎ。風吹き雨息み。次第に水退きて一百五十日の後。方舟は終に「アララット」山に止り。彼等舟を

出で山を下りて。人畜昆蟲生育蕃庶。再び地上は賑ひたりと雖も。其子孫猶高所に名譽を留め。天下に散處するを免れんが爲めに。邑と塔とを建て。其の塔の頂は天に蹠からしめんと冀ふたのである。

◎『バベル』の塔

「ルイ」十四世は。朕が後には大洪水あらんと曰へり。茲に「ノア」の後にも亦再び大洪水は來れり。蓋し人衆相議して高所に名を留め。天下に散處するを免れんと企てたる。彼の邑と塔とは神「エホバ」の惡む所となつたのである。「エホバ」曰く視よ民は一にして言語も亦一なり。今既に此擧あれば。すべて彼等の爲さんと圖維する所。終に禁止するを得ざるに至るべしと。夫れ小人は未だ得ざる時には之を得んことを念ひ。既に得ては之を失はざらんことを念ふ。是等の一念凝つて邑となり將た塔となり。空中高く蜃氣樓を現じて。乃ち名爵を萬代に保せんと欲する者畢竟其の頼み難きは。獨り「ノア」の子孫のみに在つて爾かるにあらず。今も昔も同じく歴史は繰返されて居る。

王者は其の公器を私して。散處するを免れんとし。富者は其の資本を私して、散處するを免れんとし。僧侶は其の教法を私して。散處するを免れんとし。政治家軍人其の權勢を私して散處を免れんとし。衆庶も亦人々箇々其の胸中に。高く「バベル」の塔を築いで。各散處を免れんと謀るのである。

高塔天に聳ゆと雖も。之を「エホバ」の眼より觀れば。夢幻空華露の如く又泡の如し。「エホバ」之を觀んと欲して天より降臨し。其の罪惡の結果たるを認め給ふ。是に於て其口音を淆して言語互に通せざらしめ。其處より衆を散じて遍く全地の表面に之を分布し。塔邑を建つることを罷めしめ給ひければ。人其の地を稱して「バベル」と曰へり。「バベル」とは淆亂の義である。蓋し神が人の口音言語を淆し給ひたるに因つて。此名出でたるものである。

「ルイ」十四世の所謂大洪水とは箇の淆亂に外ならず。去れば彼れも亦祖先罪惡の結果、當時已に「バベル」の塔高く聳ゆるを見て。淆亂の期早く己に脚下に迫り來れるを見て。そゝろに此言を發したるもの乎。

◎契約の虹

世人佛蘭西の革命を呼で大洪水と曰へる如く。余も亦「バベル」の淆亂を呼で大洪水と曰へり。然れども神は「ノア」に約束して。人畜昆蟲凡べて彼の方舟より出たる者の裔には。再び洪水を降さず。復た洪水の地を湮むるあらずと誓ひ給へり。曰く我れ雲間に虹を置いて。我れと世と約を立つるの徴となさん。將來我れ雲をして地を蔽はしむる時に。雲間に必らず虹あつて現れん。其時我れ之を觀て我れと地上の凡べて血氣ある者との間に立てし水世の約を憶はん。汝之を以て我が永約の徴となせと虹は果して雲間に鬚き亘れり。

然らば如何。此の約束は果して「ノア」の子孫に記憶せられしや否や。彼等は果して此信念を永く後世子孫に傳へしや否や。將た虹の雲間に消せしが如く。塔邑の地上に滅せしが如く。彼等の信念記憶は塔邑虹霓と倶に消散して。痕なきに至りしや否やの問題は。余が次章に說き出さんとする。契約の櫃なるものを研究せば。其間に自ら了得するを得ん。

最初神は自ら其の口を以て。戒律と誓約とを「ノア」に授け給ひき。又再び洪水を降さゞる永約の徵として虹をも示し給ひき。然れども一厭其の正確を見。更に愈其の綿密を表するには「モーセ」の時に及んで。驚くべき神の異能。畏るべき神の威嚴。讃嘆すべき神の慈悲と攝理とを以て。之を證明し給ひき。彼等以色列人は彼の虹と塔との意旨。其那邊にありしかを此時に至つて初めて解せしならむ。

◎契約の櫃

「エノク」が神に接られて玄々の中に住するが如く。「ノア」が「アラツト」山上に名を留めしが如く其子孫も亦天を淨土とし地を穢土とし。卑濕を避けて高燥を覓め。照々靈々高潔の場所。以て名を留め譽を揚ぐるの地となせしは。自ら忖度せらるゝ彼等の情願にぞある。是れ即ち佛敎の所謂辟支佛果なる者にして。彼等は常に之に達せんとを願うて居たのである。「バベル」の塔も宜しく此點より割出して攻ふべし。故に「ノア」の方舟も「モーセ」の紅海に對して。此れを小乘とし彼れを大乘とせねばならぬ。

斯くの如く天上に現はるゝ虹に。彼等の信念を繫ぐは。當時の人情を能く表明して居る。然れども「バベル」の塔は壞れて其衆散せられ。虹は消えて痕なきに至り。彼等は神の誓願力に信賴せんと欲して。斷續隱顯の虹雲而かも手攀づべからず胸に把捉すべからず。身に遠く心にもどかしく。尋思追求其の運意に憶れ。脚跟地に著かず。枯淡口に適はず萬刧の肌終に消するに由なくして彼等の子孫は更に凡情と親密なる穩座地を他に求め。之に向て崎嶇をたどり終に糧食を求めて埃及に下り更に海中に入りて龍宮より神の約櫃を擔ぎ出したる一條の話は更に後章に入つて之を參究せよ。

◎嬌々たる珍木の巔

「バベル」の塔滅して。彼等の名譽は何れの處に留むべきか。「ノア」以前より已に「ネピリム」即ち偉丈夫の世に在るあり。獵に勇なる者藝に巧みなる者等。茸々として叢出するの當時に在つて。其間に名を揚ぐると云ふとは彼等の最高欲望心である。

醉生夢死水草を追ふて漂泊するの境に比して。多少進歩の度が認めらるゝ。然れども道は一往一來一陰一陽の消長にして。固定沈澱すべきものではない。破壞建設元別物にあらず。把住放行豈二途ならんや端的を得んと要せば。天鎚一下唯百雜碎あるのみ」

果然神は彼等が無變化の地に閒居し。其の不善至らざる所なきを見て。之に一大打擊を加へ給へり彼等が三々伍々相提へて去りしか。隊商を組んで遠征を試みしか。乃至水草を追ふて任意に散去せしかを知らず。而かも究竟窮極。己れの名を留むべきの場所何れに在るか。因緣の屬する所。將た何處に存するかを。各搜がし求めて。其の向程を擇びしことは。暗裏に彷彿たるを見る。

夫れ「アブラハム」の生命は信仰である。然れども彼れも亦此信仰に因て何を獲んとせしか。彼れが信仰に因つて義とせられたる。所謂義の標證は彼れの道德である道德の標證は彼れの利達である。利達の標證は彼れの精力である。精力の標證は彼れの勝利である勝利の標證は彼れの名聲である。之を易の乾の卦☰に配すれば。信仰と名聲は上下の二爻に比すべく。道德利達精力勝利は中間の四爻に比すべく。又初爻と四爻と相應するが如く信仰と精力と相應じて子「イサク」を陶成し。二爻と五爻と相應ずるが如く道德と勝利と相應じて。「ダビデ」王を鍛成し。三爻と上爻と相應ずるが如く。利達と名聲と相應じて「ソロモン」王を鑄成して居る。然れとも名には虛名あり利名あり功用と伴はざるは是れ名にあらす加之亢龍悔ゝ有の凶は何人も凡て免れ得ざる所其の床下に潛める侮慢の鬼を防ぐ爲には。常に多少の餘勢を存して。勝利者の位置に立てる夫の「ダビデ」王を學ばねばならぬ。是れ易に於ても同じく然るを見る所以にして。此處張九齡が的切に其感懷を述べて居る。

側見雙翠鳥。巢在三珠樹。矯々珍木巔。得ゝ無ニ金丸懼ゝ

「ソロモン」王は毎に夢中神と面晤し。又榮華の夢中能く神の殿堂を經營せり。然れども人情は常に榮華を夢み。榮華は完全を夢み。完全は合閒を夢む。三者相聯つて環鎖をなし。其中に吾人の理想鄕を建立して居るのである。去れば佛敎諸典にも佛國を讃嘆するに。必らず此三者を併せ說き。基督は神の完全なるが如くに。汝等も須らく完全なるべしと勸め。我が名の爲めにと云ひ。父の富有を談じて天國を想望せしめ。孔子も亦世を沒へて名の聞へざるを耻づと云ひ。富若し得べくんば執鞭の賤職をも敢て辭せざるの意を示し。富四海の中を有つの文王を夢み。周公の材の美を嘆じ禹王の閒然すべきなきを稱して居る。名を後世に揚げんと志して。「バベル」の塔を築く者をのみ强ちに咎むべきにあらず唯彼等が言語を一にして而かも散處するを免れんと圖維せるの一事は。乃し神の惡みに逼まりし山緣である。

◎破壞と建設

社會主義の「マークス」は。若し一人にて資本を專有せんとするものあらは。箇は神人共に容れざるの罪惡なりと論じて居る。名譽富貴權勢を私して之を兄弟に分つまじと圖維する者。宗敎家にも之れあり政治家にも之れあり。資本家にも之れあり。乃至軍人社會にも往々見えて居る。一將功成つて萬骨枯るるの慘劇は。今目前に之を演じつゝあるにあらずや。然れども余は敢て戰爭を非とする者にあらず

宇宙間の事皆戰爭である。名のなき戰爭をこそ忌むべけれ。戰爭を外にして吾人の業務なし吾人の福利なし。唯戰爭に是れ依て吾人の生を得。吾人の生を保ち。吾人の生を安からしむるのである。哲學者にもあれ科學者にもあれ。唯宇宙間の戰鬪力を研究するものに外ならず。預言者「エゼキエル」は。此の宇宙を直ちに一箇の修羅場と見て居る。曰く我れ旋風の北方より來るを見る。又大雲あり。其の中に極めて熾んなるの火を孕み光明之を環繞せり。火の中に鎔金の焜耀して外に發するが如きあり。又四生物あつて其の中より出づ。各四面四翼あり。其の足跖は光華炫耀磨光の銅の如し。翼下に人手あつて各四旁より出づ。往く時翼皆相連り其の身轉せず。直行して前に向ふ。人面あり獅面あり牛面あり鷹面ありと。

彼れは更に。高樹は下つて卑からしめ。卑樹は上つて高からしめ。綠樹は枯れしめ枯樹は興茂ならしめんと云ひ又「エルサレム」の滅亡に就いては。其の三分の一は飢饉と疫病を以て死し。三分の一は劍を以て其の四周に踣れ。三分の一は之を各向の風に散じて。劍光其の後ろに閃かんと云へり。

然れども彼れは又。其の拯救に就いても神の言を傳ふる所あり曰く右の如きの心は除かれ。肉の如きの心は置かれん。改め賦するに一心を以つてせられ。新靈長へに爾等の裏に在らんと。夫れ宇宙は破壞と建設とを以つて成る。破壞の外に建設なく建設の外に破壞あることなし。佛教に於て寂滅は苑を意味し又生を意味す。火 の裏は直ちに是れ水 なるを知る。

北方に金剛夜叉明王と云ふがある。一切可畏の夜叉を摧伏す。南方に軍荼利明王と云ふがある。一切惡鬼神を摧伏す。西方に大威德明王と云ふがある。一切惡毒龍を摧伏す。東方に降三世明王と云ふがある。貪瞋痴の一切煩惱を摧伏す。中央に不動明王と云ふがある。一切鬼魅諸障を摧伏す以上を五明王と稱して。畫像又は彫刻に於て逼く世人の見る所である。

扨其の姿は多少異なるも。各火焔三昧に住して其の色青黑。丹唇犬牙。右手摧伏の武器を持し。左手絹索或は輪寶を持し。一如の眼他の邪魔を睨んで居る。斯くの如く外面には念怒の相を現じ一見固より怖畏すべきものなれども。其の內心には非常の慈悲を燻じて居るのである。而して其の本地を尋れば。北方は釋迦南方は觀音。東方は藥師西方は彌陀。中央は大日如來である。皆是れ微妙端嚴。慈悲圓滿の佛である。故に上下にかゝみ出したる牙は。直ちに是れ上求菩提下化衆生の德相である。魔を縛するの絹索は。直ちに是れ攝取不捨の誓願心である。劍は修羅。火は地獄と云ふ樣に數へ來つて。五明王共各十界を具すれども。「エゼキエル」の所謂一心を賦せられ新靈を置かれたる身には。地獄も修羅も元是れ醍醐味の法門。歸家穩坐の淸涼地である」

昔巴陵と云ふ禪僧に。如何是吹毛劍と問ふた者がある。巴陵對へて珊瑚枝々撐二著月一と答へた。這の裡には無限の味ひがある。長沼流の兵法に廣矛傳と云ふ者がある。亦是れ這箇の一劍を說きたるものに外ならず。天地間に箇の無刀の刀あつて塵々皆吹毛の劍たることを知らざれば。到底戰爭に勝つこ

とは出來ぬのである。

刀外靈刀何處求咄哉勿問正宗傳

是れは阿字觀宗の祖故山縣玄淨師の詩である。

却說我邦にても政治家資本家軍人等に由つて。「バベル」の塔は追々高く築かれつゝあり。社會論者の喋々藩閥攻擊の囂々。元是れ勢の然らしむる所にして畢竟是非なきことながら。彼等の爲す所は援々怱々水裡の月を捉ふるに異ならず。一も其目的を達し得たることがない。是れ他なし。彼等が戰爭の方法を知らざるに基因するのである。吾人は將さに彼等に向つて箇の戰術を說かんとす。蓋し我等の神「エホバ」は軍神なればなり。

◎須彌觀

五如來は元北方の水神。南方の火神西方の土神。東方の風神中央の空神である。是れ支那人の大極思想。以色列人の「エデン」思想に異らず。胎藏界には如來慈悲の相を取り。金剛界には明王忿怒の相を取る。元是れ別體にあらざることは。前章已に言へるが如し。

余は此處に暫く須彌觀を說くの必要がある。蓋し小亞細亞に「スメロ」と云ふ處があつた。譬へは西藏の拉薩と云ふが如く。地方の人衆は之を靈地として聖別したのである。蓋し以色列人は之を「サレム」と

呼び。共に妙高平康等の意を有して居る故に「エルサレム」には。平安城又は妙高山の譯が附せらるゝ。「エル」は神、城、山等の意に用ゐられて居る。「サレム」の王と云ふときには。詩篇等に因つて參へ考ふれば必しも場所を指したるにも限られぬ。唯最初古代の或る聖王が「サレム」或は「スメル」と云ふ所に城居せしに因つて後世一の尊稱語となりたる者に外なす。若し夫れ「スメラミス」「スメラミコト」等の尊稱語と。併せ考ふれは思ひ半ばに過ることあらむ。我が邦にて「ミコト」を御事とし「ミカド」を御門としてあれども元來「ミカド」と云ふ語は希伯來語にて。神に抹油せられたる者と云ふ義である。基督と云ふ語も同じく。王即ち受膏者の義なれども。其れは希臘語にして後世の飜譯である。故に其の實希伯來語にては基督を「ミカド」と稱せねばならぬ。「ミカド」と云ふ語が神代史に見えざるを以つて。「ミコト」と自ら別なるやうに論ずる人あれども。神代史に曾て見えざる「メシ」「マヽ」等の日用語さへ。後世の輸入語にあらず。「メシ」ハ麵麭の意「マヽ」は甘露の意である。此外に希伯來語は我邦にて甚だ多し。譬へば「エミ」は北夷の意「エソー」は蠻人の意尙後に至つて知れ。

却說佛敎の密部を修するには。阿字觀と須彌觀とが最も肝要である。蓋し密部の修行は。阿字觀より入り阿字觀に終り。阿字觀を離れて密部なし。故山縣玄淨師が阿宗觀宗と云ふ一派を建立せられて居つたのは。抑も故あることである。余も亦玄淨師に從つて阿字觀を受け。次に須彌觀を授けられたことがある。夫れ佛敎には自ら心觀と理趣觀とあり釋門に觀心釋と理趣釋とある同時に觀法にも亦自ら

觀法と理觀法とがある。般若に於て金剛分と理趣分とを區別するが如きものである。而して此の阿字觀は觀心に屬し須彌觀は理趣に屬して居る。後者と我が十卷書即ち

創世記、出埃及記、利未記、民數略記、申命記、約書亞記、士師記、路得記、撒母耳記、列王記略」

とを比較すれば。兩者の間に自ら連鎖の斷つべからざるものあるを認むるに至らん。

抑も此の須彌觀が何れの經文に原づくかと云ふに。唐の開元年間に。善無畏三藏が支那に來つて。破地獄眞言儀軌と云ふ一冊子を。飜譯して出した。其後弘法大師が入唐して。惠果阿沙梨より眞言を相承し來りし時に。此の須彌觀法も俱に傳へ持ち來られしや否やに就ては。後人の定論がない。夫れ根來の開祖覺鑁上人は烏羽朝の人。觀法に於ては。獨り此人を推すべく。餘は殆ど形式に過ぎなかつたのである。開元の三大師に由つて。密教東漸せし以來。覺鑁上人に至つて眞言の觀法は大成したと云つても可なりである。拇尾の明惠上人葛城の慈雲尊者。及び別所榮嚴和尚等は。皆禪宗より其の見識を得來りし者である。獨り覺鑁上人に至つては。其の觀法に於ても其の著述に於ても。更に禪宗の口調がない。而して最初虛空藏の修法具聞持に由つて發得し。阿字觀に由つて更に精彩を著けられたる者のやうに見ゆる。其の他諸尊の修法には極めて骨折られし蹤跡が。傳說にも著述にも處所窺はれて居るにも拘らず。此須彌觀に至つては。毫も言及せられた所がない。山縣玄淨師は此の所更に一隻眼を添へんと欲して須彌觀には頗る精魂を注がれた方であつた。而して余が玄淨師に從つて。此の須彌觀を修する時に。我十字架教にも自ら須彌觀があるので。其の一致の點を摘擧しければ。師大に喜で偕に研究に從事せられたことがあつた憶ひ起せば。其頃高野山は尙雪に閉ぢられて居つたが余が每夜觀法に耽つて居るのを見て。師は余が室に入り來り晒心白雲と云題にて一首を賦せられた。

學在三冬禪在夜

◎破地獄經

余は前章を承けて先づ破地獄經の大意を紹介せん。須彌觀は何時の頃よりか形式的に一種の口譯が嫡々相傳して今日に及びたるも。其の起原は頗る古き者ならんと思はる丶。破地獄經を見れば無論火教派より會入したる波斯佛教にして。決して印度思想ではない。

先づ上部に寶樓閣が畫かれ。之を七寶莊嚴の須彌山上に安置して。更に此須彌山を金龜が戴いて居る金龜は即ち地輪にして龜は水陸兩棲の者なるを以て。佛界衆生界に通ずる意味である。其の外圍は水輪、風輪、空輪と次第に繞つて居る。扨寶樓閣の中には八葉の蓮華あり。蓮華の上に阿字がある。

以上は須彌觀の圖式である。普通須彌觀圖と云つて。非常に明細にしたものがある。是れは破地獄經の須彌觀式には全く不用である。扨之を觀ずるには。其の前に結跏趺蹠し。手に密印を結んで。欠氣一息し。先づ阿字本不生に入つて空輪を現じ。空輪より次第〳〵に。風輪水輪金龜四寶の妙高山を現

じ。中に毘盧遮那佛身を想ふ。佛身の毛孔より香乳雨を流出して。四方に澍ぎ以つて八切德香水乳海を成す。八切德香水海變じて八葉の蓮華となり。蓮華の上に阿字あり。變じて八華八柱の寶樓閣となる。高廣中邊なく。諸大微妙の寶玉種々に莊嚴す。

之を亦內より觀ずる時には。阿字が蓮華となり。蓮華が八功德香水海となり。八功德香水海が毘盧遮那佛身となり。佛身が直ちに金龜となり。水輪となり風輪となり空輪となり。開合自在。入息の時には忽ち黃金色を失ひ。出息の時には忽ち瓦礫光を放ち。八葉の蓮華となり一輪の月となり。空輪と地輪となり。寶樓閣を收めては忽ち四如來を放ち。四如來を收めて自己の四智に歸する時には。自身變じて一阿字となり。一阿字復た須彌山となる等。出入無礙。宇宙即ち此身。此身即ち宇宙。宇宙は即ち一息の所現にして。一息即ち遍一切處の法身大日如來となり。自もなく又他もなし。意量絕し(二字不明)亡じ全く死滅に歸し。黑漫々地の深坑中より忽ち復た阿字を孕み出し。阿字が蓮華と化して再び宇宙が現出する。と云ふやうなる仕組にして。其の實全く阿字觀と同一なる者である。略觀廣觀等。種々樣々の口傳があり。亦胎藏界と金剛界との區別はあれども。畢竟出入の二息を研究するの觀法に外ならぬのである。

◎「エデン」思想と須彌觀

讀者は前章破地獄經の大意を見て如何に思ふか。苟も一度以色列の神話を繙きたる者は。直ちに彼の「エデン」の構造に思ひ及ぼすであらう。夫れ神天地を創造し。地は虛曠にして淵面晦冥。神の靈水面に覆育せりと云へる所に。一種の阿字觀が抽象せらるゝにあらずや。又、土未だ草木を生せず未だ諸蔬を苗せず。神未だ雨を地に降さず人あつて未だ田を耕すなきに因る。唯霧地より起り遍く厥の土を潤せりと云へる所に。空輪變じて風輪となり。風輪變じて地輪をなすの域が。其間に彷彿として想像さるゝにあらずや。神地の塵を以つて人を造り。生氣を噓して其の鼻に入れ。人即ち生靈となれりと云ふ所に。中央毘盧遮那佛を思はしむるにあらずや。神、園を東方の「エデン」に樹へ。造れる所の人を其の間に置けりと云へる所より須彌思想が脫胎し來るにあらずや。

夫れ須彌觀とは支那の略音にして委しくは須迷盧(スメロ)。妙高の義又平安と譯せらるゝことは前章已に言へるが如し。今の天山、崑崙、葱嶺比馬拉耶等の山波。四方より淡泊して中央に峙隆する脊骨を指して須彌山と云へるは後世の事にして又其の四方を地理的に指定して所謂須彌の(二字不明)となすは。學者の臆說である。更に起世經中の鬱單越州品を見よ。是れ古代中央亞細亞人の「須彌」思想である。曰く苑の四面に四池水あり。皆阿耨達池(アノクタツト)と名づく。其の水淸涼柔輭。甘輕にして香潔。更に流れて苑を潤し。水勢平順緩ならず急ならず。奔逸衝擊あることなし。又恆に半夜に於て四池の中に大密雲を起し。周帀遍布鬱單越州及び諸山海に。八功德水を雨らすと。創世記に河あり流れ出て丶其の園に灌ぐ。彼れ

より分派して四となる。曰く「ピソン」曰く「ギボン」曰く「チグリス」曰く「ユフラテ」。神其の人を挈へて「エデン」の園に置き。耕して之を守らしめたりと。讀者は之を見て如何の感をなすや。

更に苑中を形樣して曰く。金銀琉璃等七寶を以つて嚴飾せられたる樂園あり。時節調和。地常に潤澤青草瀰覆。諸雜林樹枝葉恒に榮へ。華菓成熟す。又樓炭經因本經等によれば。其の中に置かれたる原人が。過食して其の樂園を放逐されたることを書いてある。

創世記に曰く觀るべく食ふべきの諸樹を地より發生しめ。園の中央に當つて生命の樹あり。又善惡を別つの樹ありと。語簡なりと雖も其觀るべきと云ひ食ふべきと云ひ。人をして當年の樂園を憶はしむるにあらずや。其の生命樹と善惡を別つの樹とは。是れ斯教の因本にして。後大に論ずる所あらん。讀者之を記臆せよ。而して今暫らく其の河流に就いて少しく語る所あらん。

「エデン」の四流の中に「チグリス」とは激流の意。「ユフラテ」とは緩流の意。「ピソン」とは蓋し中流の意味ならむ乎。此の「ピソン」より精金珍珠碧玉を產せりと云へるを見れば。伊邪那岐命が上津瀨は速し。下津瀨は弱しの古へも思ひ合はせらるのである。又激潮の方を筑紫と云ひ。緩潮の方を由良門と云ひ。其の中間に雙神出でて。國土を經營し諸神を成りませる昔噺も。亦一種の須彌觀である。「ギボン」は今枯れてなし。兎に角此四流が。神と人と惡魔に關係あり。又先きの生命樹と善惡を別つの樹とに。遙に相應する所あるを以つて。再び讀者に記臆を乞ふ。

◎四箇の「エデン」（一）

古代の希臘人が。人は何故に美を愛するやと云へる問題に答へて。吾人の祖先は最初極めて樂しき園中に住ひ。神と共に暮らして居つた。然るにいつしか己れの慾に汚れて。今は此の穢土に陸沈すること此くの如しと雖も。尙忘られぬ望鄕の情は。即ち此の崇美心であると。是れ彼等の「エデン」思想を有するにあらずや。佛者の須彌觀も最初は此の「エデン」思想に外ならず。追々發達して觀念となり修行となり。自己の心性を諦得するの具となり。宇宙の眞相を覺明し。社會の經論を鑽究するの學術となるまでに進んで居る。日本人の高天原思想。印度人の淨土思想亦他にあらず。支那人の崑崙山は殆んど神話的にして。一種の須彌山である。伏羲の先天易も其後の大極思想も須彌觀と何ぞ異ならむ。此くの如く佛敎家にも支那人にも。須彌觀が非常に發達して居る獨り「アダム」より基督まで。四千年間の霜雪を凌いで蒼空に亭々たる「エデン」の生命樹を而かも保羅（ポーロ）敎の人々が之を認めざるは何故ぞ。彼等は老朽地下に埋もれたるものと見做せるか。善惡を別つの樹は斫られて火に投げ入れられ最早遺孽を存せざる者と見做せるか。「エデン」を潤せる四流の河は涸れて痕なしと思へるか。吾人の眼を以てすれば四河の流域は益廣く。二樹は繁衍して枝葉愈茂り幹根蟠つて地を除さず。蔭となり磐となり四柱となり。簇々たる其花。盤々たる其果。珠を連ね錦を鋪き。觀るべく又食ふべく金銀財寶用ゐて盡

きず。香乳水は四流より來り。而して生樹命樹と善惡を別つの樹とは。是れ連理の枝なりと見る。激流も亦妨げず。緩流も亦妨げず。眼なく意なく身の裸なるを愧るなきの「アダム」には。到る處に祓齋して中津瀬を得たり若し其れ中正を失はゞ我が十字架教に來れ。「モーセ」埃及王に窮追せられ。紅海に身を投じて後三日「マラ」の野に至つて苦水飲むに堪へず。「モーセ」一木を之に投じければ。苦水變じて甘泉となる。我が十字架教にも亦此の秘譯あり。「アダム」已に樂園を失ひ。遙に生命樹を認めて。往いて之を摘まんとす。忽ち天使あり。劍を提げて其の途を梗ぎ。自ら舞旋するの劍は樹を繞つて閃爍たり。生命樹を得んと欲せば唯此處一死あるのみ。逡巡することなかれ躊躇することなかれ。氷稜上に行き劍刃上に走れ。驀地に進行すれば劍も天使も是れ陽炎なり。汝等宜しく發强剛毅なべし。枯尾花を見て幽靈と認むるなかれ。

稚子が次第〳〵に智惠づきて佛に遠くなるを悲しき

「アダム」は目開らけ智惠の進むと與に。身の裸なるに心付き。無花果樹の葉を編んで裳となせり。日昃れんとする時。涼風至り「エホバ」神園中に遊べり。「アダム」「エバ」其の聲を聞ひて。身を園樹の間に匿し神の面を避く。神「アダム」を召して曰く汝等何處に在りしや。「アダム」曰く我れ園中に在つて爾の聲を聞きしが。身の裸なるを以つての故に。慴れて自ら匿れたりと。基督「ゲッセマネ」の園に在つて敵の己れを尋ぬるに逢ひ。問うて曰く汝誰れを尋ぬるや。曰く「ナザレ」人耶蘇を尋ぬと。基督は從容逼らず汝の尋ぬる耶蘇は即ち我れなりと。答へ給ひければ敵之を聞いて。其の前に仰臥したり。神「アダム」を喚びし時我れ此に在りと應じて。直ちに其の前に進みしなば。正に是れ大智禪師の所謂

閻浮八萬四千城　不レ動二于戈一致二太平一。
活二捉瞿曇白拈賊一。　雲門一棒不二虛行一。

夕陽樹下の白拈賊を活捉して。神子基督を十字架に釘するの必要は。起らなかつたのである。「アダム」の疑懼よりして。「エデン」は忽ち善惡の棘中に葬られ。戒律の荊根に纏はれ一時生命樹を失へりと雖も「ノア」は方舟に乘じて牲畜禽蟲と俱に生を保ち。水波蕩樣の間に四十日間の淫雨を凌ぎ。晴鳩始めて「アララット」山上の綠葉を啄み來る。是れ即ち善惡樹の新芽なり。此善惡樹即ち「ノア」の戒律は生長して。茲に「バベル」の塔邑は起されたり。之を第二の「エデン」となす。

「アダム」は兩頭の蛇に誘はれて「エデン」を去り。「ノア」の子孫は言語の淆亂に遇ふて「バベル」を去れり。彼等は未だ生命樹を得ず。之を天上に求めて天上に得られず。更に之を人間に求めんと欲して埃及に下つて操作すること四百年なりしも其の功果は空しく他に收められ。「ピラミッド」塔は彼等の名譽を留むる所にあらず。神聽に達せしものは。寧ろ屈辱と大息の聲あるのみなりき。夫れ神は擬に「ノア」に諭して曰く肉の血あるものは汝等之を食ふべからず。血は即ち生命なりと。彼等は自己の生命が乃し血にあることを思ひ起し。虹の代りに牲血を得て。埃及に起りし災害を免れ。更に之を究め

て紅海の中に投じ去れり。是れ即ち基督の十字架である。

之を周易に徴すれば。「モーセ」の紅海は正に地天泰 ䷊ にして。遙に「ノア」の方舟と相應じて居る。易に曰く小往大來天地交而萬物通上下交而其志同と。故に六十萬の人幷に牲畜。一も失ふ所なくして之を濟せり。

彼等は其生命なる血中に。果して何を探り獲しか彼等は焦熱叫喚の地獄より。神の約櫃と十二の名譽石とを持ち出せり。是れ亦遙に「バベル」の塔と契約の虹とに應じて居る。塔と虹とは山地剝 ䷖ にして。櫃と石とは地雷復 ䷗ である。

夫れ「ノア」は天上に在つて神を見ず。「モーセ」は地獄の底に下つて。「シナイ」の妙高山を見。神と面を合はせ又人を誨へ。以色列十二族の名を跖底の十二石に刻し。神體を一櫃に納めて。二つながら之を其の後身「ヨシュア」に附し。「ヨルダン」河より出して。迦南の沃土に再び「エデン」を立てしめたり。之を第三の「エデン」となす。

◎四箇の「エデン」（二）

「ノア」が四十日間水上に浮んで。意業的に營みたる「バベル」の塔と。「モーセ」が四十年間水底に沈んで。神工的に營みたる迦南の樂園とは。元是れ同一の論にあらざることは。茲に云ふまでもない。然れども彼等も亦神の約束と名譽とが。人生の最高慾望心なることを。忘れ得なかつたのである。唯從前と異なる所は。先きには神の約束と名譽と。二種あるものゝやうに思つて居つた。今は神の約束が直ちに自己の名譽即ち事業である。と云ふことを自覺し來つたのである。

夫れ約束とは。佛敎にて佛の誓願力と云ふ者と。全く同一なる者である。諸佛の通願としては四種あり即ち。衆生無邊誓願度佛道無際誓願學、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願成、之を四誓願と云うて居る。又諸佛の別願には。藥師の十二願彌陀の四十八願等がある。此の誓願力に乘ずるのが。即ち吾人の安心である。眞宗の人が安心安心と云ふのは。佛の願力に乘じて。一切を放下したるの當體である。若しも其の間に些の造作があれば。所謂自力である。又多少の修業をして心を諦らめ佛に近かづかふと計向し聊なりとも功德を積んで。之を往生の緣としやうと志すのは。雜行雜種である。唯南無阿彌陀佛〳〵に此身を委ねて自己の弱きを呟かず。今往今後の罪過を思はず。只管に稱名する。之を他力安心の姿とは云ふのである。故に佛の誓願力を弘誓の舟とも稱して居る「ノア」の方舟は即ち此の弘誓の舟である。是の故に「ノア」は潔き畜類牝牡各七ッ。不潔の畜類牝牡各七ッ。禽蟲類雌雄各七ッを方舟に載せたとある。逼地の水横溢し。舟水面に溯回し其の中に在つて毫も疑はざりしは。彼れが神を信じ此の所謂弘誓の舟中に自己の名譽も道德も。罪も煩惱も乃至平生の願望心も。一切積込んで到處是れ家鄕。立處是れ成佛の姿に安んじたのである。夫れ「ヨシュア」は「モーセ」と俱に海底を歩し十二の

石に以色列十二派の名を刻みたる者を「ヨルダン」河より持出したれども。之を世に示さず。河岸の一小僻地「キルガル」と云處に置けり。唯世に顯はし。敵に誇りしものは芽杖と「マナ」と契約の兩碑を納めたる彼の約櫃である。

蓋し名譽石は自力の如く。約櫃は他力の如く。自力は人にして埋もるべくも。他力は神にして其名揚らん。是れ自力が他力に併せられ。人が神に一致したるものにして。基督の所謂神の完全なるが如く汝等も須らく完なるべしとは。待對の上に於て言へるにあらず。神と人と全く一體不二なるべきを示せるなり。吾人は神を得て當に世に誇るべく。神の外に誇るべきものを持たず。保羅が曾て我れに誇るべきもの唯一あり。即ち基督なりと言ひしは。正に此の處なれども。彼れは何處までも神と人とを別ち。靈と肉とを隔てゝ。基督を自己の外に置けり。是れ基督の教義を明らかにせず。未だ基督を見ざるに因る。「ヨシユア」も未だ「エホバ」の全身を見ず。唯「モーセ」と「エホバ」と共に語るの聲を聞き。「エホバ」が曾て以色列の人衆に其の足跡を示し脊後を現はし給ひしを。人衆と俱に遠く眺めて之を拜したるのみ。去れば約櫃と人衆とは全然區別せられて。天淵霄壤も啻ならず。淨穢の界畔尚未だ攀づべからず。祭司長の外之に觸るゝことをさへ許されなかつたのである。

佛も元は凡夫なり。基督も元は凡夫である。凡夫基督が神子基督に化するの經歷は。後章に委しく述ぶべけれども。豫め其の大要を言はんに「モーセ」神に導かれて紅海に沈みしが如く。基督も亦神に導かれて地下に葬られたり。彼れは己れの復活と共に先きに死せる聖徒をも蘇らせたりと云ひ傳ふ。「ヨシユア」も亦斯くの如く其の師「モーセ」に導かれて紅海に入り「モーセ」と共に蘇つて「ヨルダン」河を出たる時には復た舊の凡夫にあらず。所謂三十二相を湛へ。八十瑞光を放ち。人衆の彼れを望むこと神の如くなりき。彼れは此時始めて埃及の耻を洒ぎ迦南の三十一王を期月ならずして悉く討滅せり。彼れは何を以て能く斯くの如くなるを得しか。他なし彼れが神の約櫃と俱に居れるを以てなり。彼れは約櫃の力を以つて渡り。約櫃の力を以て勝ち。約櫃の力を以て衆を治め。彼れは一切を約櫃に托して。彼れが生命も戒律も凡べて約櫃の中に置けり。

夫れ箇の約櫃は先祖「アブラハム」以來。神の約束せし所にして。今は毫釐も違ふことなく。神の言盡く應せり。初め「アブラハム」が迦南の地に旅びせし時。神「アブラハム」に約して曰く。來れ此の地を汝の子孫に與へん。汝の子孫は埃及に下り彼處にて繁蕪となり五代の後此の地に回つて國を建て人衆益多からん。譬へば海沙の量るべからず。天星の數ふべからざるが如くならんと。此約束は即ち夫の所謂神の口より出たる言にして。吾人日用の糧食である。

夫れ迦南の地たる極めて豊腴。乳と密とを流すの地と呼ばれたり。淨土門にては佛の願力に乘ずる人を蘇酪に浴するの人。醍醐を服するの人と呼ぶ。乃し「アブラハム」の子孫。以色列人は此の醍醐を服し蘇酪に浴して居るのである。彼等は如何にして之を失ひしか。更に次章に移らん。

◎四箇の「エデン」（三）

我れ前章に於て「モーセ」は衆と俱に「ヨルダン」河を渡りしものゝやうに言へり。其の實「モーセ」は「モアブ」の地に死せり。唯彼れは「ピスガ」の嶺より。遙に迦南の沃土を眺めしのみ。余が先きの言をなせるは抑も宗味の存する所にして。讀者は後章に至て其意を諒するあらん。却説「エホバ」最終の目的は基督に在り。基督死して復生なしと曰ふことなかれ。基督曰く若し一粒の麥地に墜ちずば。如何にして多くの果を結ばんやと。彼れは地に墜ちたり。今は果を結んで天地何物か。基督の血肉にあらざる。物々に現じ事々に顯はれ。遍界覆はず。萬像の中獨露身である「ヤコブ」埃及に在つて命將に終らんとする時。其子「ヨセフ」に誓はしめて。己れの死骸を埃及の地に葬ることなからしむ曰く。必ず迦南にある墳墓の地に携へ歸り祖父と俱に我れを葬れと。「ヨセフ」も亦遺言して己れの骨を埃及の地に留むることなからしむ。是等は皆吾人の復活に就いて。最も興味ある表迹にして佛教家の所謂入息不レ居ニ陰界一出息不レ涉ニ萬緣一の所である。「モーセ」「モアブ」の地に葬られて。人其の墳墓を知ることなしと云ふ。蓋し知らぬも亦道理である。基督が若し生の神ならば彼は死の神である。無盡居士曾て生死の境を詠じて曰く

人間鬼使符來取　天上花冠色正萎

好箇轉身時節子

莫レ教下閻老等閑知上

夫れ埃及の此岸より迦南の彼岸に達するには。其の間に必らず四十年程の重關がある。是れ即ち天國の門にして。假雜の聲音は以つて其の守門者を浸ずるを許さぬ。基督も此の守門者たる時には。決して其姿やさしき者ではない。其の首と髮と白きこと。羊毛の如く又雪の如く。其の目火焰の如く。其の足は精銅の燒けて火に在るが如く。其の聲大水の音の如し。右手七星を執り。兩刃の利劍其の口より出で。其の面烈々の日の如し。山門の両側におそろしき二王が門番をして居る。是れは密跡金剛と云て不動明王の眷屬である。又誰れも知れる彼の閻羅王と曰へるは。大慈大悲の阿彌陀如來である。閻王と彌陀とが。元一體なるを知らば。愛の神「エホバ」が。同亦時に烈々たる嫉妬の神たることを思へ彼れは四十年間柔和謙遜の「モーセ」をして其の嫉妬の事を行はしめたのである。基督曰く汝等の罪を擬する者は唯一人あり即ち「モーセ」なりと。「モーセ」は此の場合に處して閻羅王とや云はん。啖肉歃血の鬼とや云はん。毫も容赦する處はない。吾人は彼れに血稅を納めざれば。此天國の門なる「シナイ」の關門を過ることは許されぬのである。閻羅王が其の眷屬十五幷に無數の鬼を隨へて地獄を治むるが如く。「モーセ」も亦彼れと俱に亞拉比耶の野に葬られし無數の眷屬を將ひて「シナイ」山に居城し城下に幾重の關を設けて。天路の巡禮者を誰何して居る。夫れ「モーセ」が埃及に下りしは。是れ人間の鬼使にあらずや。其の「シナイ」山下に人を判きしは。陰界の閻羅王にあらずや。然れども亦彼れ

は三途の川の渡守である。吾人は彼に依らざれば此岸より彼岸に達することは出來ぬ。之を易に徵すれば風水渙䷺にして。渙は散にして。憂散じ喜來るの意である彖に曰く王假(イタル)二有廟一利(アリルニ)涉二大川一と傳に曰く大川を涉るに利ありとは。木に乘つて功あるなりと六三に渙二其躬(スノヲ)一とあり。傳に其の躬を渙するは志外にあるなり。と曰つて居る。今吾人が此大川を涉つて疑はざるものは。神の約束を信じて。迦南の樂園を望むが爲めである。「ヨシュア」の如きは能く此希望と信仰を保ちしもの。彼れは無盡居士の所謂。好箇轉身の處を得て。四十年間の鑄湯爐炭。猶安樂國土であつた。夫れ相識は猶無相識の如し。彼れと「モーセ」との關係は。恰も相見て相識らざるの觀をなして居る。雲門曰く平地上に死人無數。荊棘林を出得する者是れ好手と。彼れは此好手を有せしものである。

初め「モーセ」が「シナイ」山に登つて。棘中より火燄の起るを見し時に。神「モーセ」に命じて曰く此山は聖地なり宜しく汝の屨を解くべしと。其後「ヨシュア」が「エリコ」の城に向つて進める時。一人の劍を執り「ヨシュア」の面を迎へて立てるを見たり。「ヨシュア」問うて曰く爾我儕の爲めにするか。抑も敵の爲めにするか。其人答へて我れは「エホバ」の軍の將なりと曰ふ。「ヨシュア」面地に伏して拜し之に謂つて曰く。我が主何を爾の僕に命ずるや。曰く屨を解いて汝の足より離せ。汝の立てる處は聖地なりと。唯是れのみであつた。

此屨のを解ひて足より離せと云ふ處には。我れ汝と共なりとの意もある。然れども神の聖地は唯「シナイ」山のみにあらずして普天普地皆聖地なり「エホバ」の居城なりと云ふことも亦同時に示されて居る。此聖地に在つて「ヨシュア」は以色列の十二支派を曼荼羅的に配置して恰も「エデン」より流れ出づる四流の河の如くならしめしも。約櫃の所在地は常に移動して必らずしも。大極の中央點と限られなかつたのである。是れ士師時代に統一を缺きし由緣にして終に以色列人は王政を企望し「ソーロ」王を擁立することとなつた。

斯くて二代目の「ダビデ」王は。己れの居城「エルサレム」城に。神の約櫃を迎へ。之を萬軍の主と呼び恰も我が朝上代に。三種の神器と。牀を同ふして起臥し給ひし其の當時の趣と稍相類して。「ダビデ」王も約櫃と宮殿を同ふし。「ダビデ」と約櫃とは全く一體の姿を表して居つたのである。「ダビデ」王は神の殿堂を建つるに志ありしも。神之を許し給はず。其子「ソロモン」相嗣いで即位し。父の遺志と神の命とに因り。始めて「シオン」山上に殿堂を經營したり。其木材石材金材等を悉く異邦に仰ぎしは。彼れが淨穢善惡を打して一團となし。天下の事物資つて以て神殿を營むべく。一法の捨つべきなきを示したるものである。去れば彼れは亦。后宮を神殿の傍らに建て。祖先の仇たりし陰界の魔王埃及王「パロ」の女を娶りて。之に住はしめたり。斯くて天下全く統一に歸し。所謂北辰の其處に居て。衆星之に拱ふが如きの姿となつた。之を第四の。「エデン」となす。而して之を破壞しだる者は。實に魔王基督である。

「バベル」の塔　「ソロモン王」

◎ソロモン王

茲に基督を論ずる前に暫く「ソロモン」と「モーセ」とを語らしめよ。周易に山澤損䷨と云ふ卦がある。是れは地天泰䷊より來りたる者にして。下を損して上を益したるものである。蓋し我より一物を損して他を益する時には。他も亦一物を損して我を益するの道理である。然らざれば彼此交渉せず自他の志通せず。損の卦は能く其處を說明して居る。故に其六三に曰く三人行(クトキニハ)則損(シ)二人(ヲ)一人行(クトキニハ)則得(ル)其友(ヲ)と。夫れ約櫃は其の始め。芽杖「マナ」兩碑の三種を納めたるものであつた。「ソロモン」王の時神の殿堂始めて成り。約櫃を「ダビデ」の宮殿より奉じ來り。之を新殿に移して其の櫃を開けば。中には唯契約の兩碑のみあつて。其外には何物もなし。蓋し彼の三種は父と子と聖靈の三身にして。當に法身報身應神の三に比すべく。又劍鋭璽の三器に對すべく。芽杖は應神基督「マナ」は報身父。碑は共通性法身である。又「シナイ」山の神「エホバ」「エルサレム」の神「エホバ」及び「アブラハム」が最初「ベテル」の山に在て祭りし神「エホバ」とは各別である。然れども亦同時に三位一體なることを忘れてはならぬ。神自ら我れは「アブラハム」の神「イサク」の神「ヤコブ」の神と曰ひ給へり。之も亦三人の神各別なることを知り又同時に三者元一體なることをも知らねばならぬ。之を「ヨセフ」の神「モーセ」の神「ヨシユア」の神と云ふも亦同一である。之を父にて兼ぬることあり。子にて兼ぬることあり。聖靈にて兼ぬることあり。櫃中に唯兩碑のみ殘りしは。是れ他の芽杖と「マナ」とを兼ねたものである。而して「エルサレム」は神の聖靈にして即ち他の「シナイ」山等の神を兼ねて居る。其れ此の如きの調和をなせるもの必ず其の間に相損益する處がなくてはならぬ。故に損の六五に曰く或(アリ)益(スヲ)之十朋之龜弗(レ)克違(フコトヒ)。「ソロモン」王は父の如く。「ダビデ」王は子の如く。而して「ソロモン」王は方さに聖靈の如くにして。能く自邦他邦剛を損し柔を益し。互に志を通じて居る。傳に曰く自(レ)天祐(ラ)之吉无(レ)不(レ)利。と「ソロモン」王の謂乎。

又風雷益䷩と云ふ卦がある。是れは天地否䷋より來りたる卦にして。上を損し下を益したるものである。余曩きに「ノア」は方舟に乘じて去り其の結果「バベル」の塔は有頂天に達せしも更に下を益する處なかりしを說けり。去れば「アブラハム」以後は下を〳〵と益して行き。終に埃及の地獄にまで下り盡して。「ゴセン」の草木と俱に卑濕の地に蹂み著けられ。何時起き上るべき望もなく。今は唯屈辱に慣れ甘んじて。餓鬼畜生と毫も擇ぶ處なき身の上に。忽ち神坐より天使「モーセ」は遣されたり。久しく天緣絶へ果たる彼等には。如何で神の言語の俄に解し得らるべき。嘲けり笑ふ者。罵る者耳を掩うて去る者のみなりき。此に「モーセ」と反對に地を損して天を益するの一人あり。即ち「モーセ」の兄「アロン」なり。基督が吾人に向つて我が兄弟よと宣り給ひしが如く。彼等も元兄弟にして「アロン」は兄なれば久しき以前に天界に上り更に魔界に下つて。今は魔界の語に熟したり。「モーセ」は弟

「バベル」の塔　「ソロモン」王

なれば久しき以前に魔界に下つて。更に天界に上り。今は天界の語に熟したり。我が十卷書を讀みて兄は下より上り。弟は上より下れるあるを見ば。必らず此の謂れありと知れ。是れ即ち前に云ふ。益の卦は否より來り。損の卦は泰より來ると一般にして「ヤコブ」が「ヨセフ」の二子「マナセ」と「エフライム」を祝する時其の手を交叉したるも。天地の順環酬錯實に這裡に存するのである。古來西部亞細亞の人が輪廻說を說くも亦此の道理に外ならず。却說斯くの如くにして。辨巧の「アロン」は出で〻口訥の「モーセ」を迎へ頸を抱いて互に相吻接し。當年「エソー」が「ヤコブ」を出迎へ讎敵相擁して泣き。後共に父を葬りしが如く。彼等も相携へて。其の一族を亞拉比耶の野に葬れり。斯くて地の代表者「アロン」は「モーセ」の爲めに預言者となり毎に魔堂に向て神意を傳へ。天の代表者たりし「モーセ」は寧ろ「アロン」の爲めに預言者となり。神に向つて人情を奉答せり。而して其の共通性を得たる「ヨシユア」は。天倫と人倫を刻したる兩碑の契約を携へ去り。終に迦南の地に名譽石を殘せり。去れば「モーセ」は谿谷に葬られ「アロン」は山嶺に葬られ一は向上一は向下損益の二卦も思ひ合せて。亦妙ならずや。而して基督は此の。地より上れる「アロン」と天より下れる「モーセ」とを其の一身に併有したるものである。

「バベル」の塔（上）終

バベルの塔（中）

◎亂民基督

保羅（ポーロ）教の人よ。余が亂民基督と題するを以つて。驚愕卷を舍くこと勿れ。神子基督は正さに七性を有して居る。神なる基督。神子なる基督。預言者なる基督天使なる基督。常人なる基督。盜賊なる基督惡魔なる基督。彼れは或者には魔王「ベルゼブル」として忌まれ或者には盜賊なりとして刑せられ又或者には「ナザレ」の耶蘇として輕んせられ或者には天使なりとして迎へられ。預言者なりとして信せられ神として敬せられ神子として愛せられ。其の罪標には猶太の王「ナザレ」の耶蘇と書かれて居る。余は茲に亂民なる耶蘇を說かん。

夫れ猶太國の風俗として。最も神聖なりとする者は。安息日を聖別することである。彼れは此の風俗を犯して憚らず。安息日に操作せり。

摩西の戒律に「唱婦を禁じて居る。故に淫を鬻ぐの女を卑め。之と言語を交ゆる者を。士君子の共に齒せざるは云ふまでもない。基督は淫房に出入して憚らず。生前彼れが最も親みし者は多くは妓婦或は妓婦の兄弟花生子であつた。猶大にては刑餘の人。又は比匪者。と遊び之と飲食するを恥ぢて。勉

めて之を避けたものである。基督は彼等と飲食し。彼等を我が兄弟我が友と呼んだ。又猶太人が最も惡み且つ卑しむ者は稅吏に若くはなし。是れは當時の狀勢を推して考ふれば。當に然るべきことにして彼等は羅馬人の手先となり。濫りに同胞を苦しめた者である。猶太人が之を蛇蝎視したるも固無理がない。然るに基督は常に彼等と往來し。其敎を聽く者は。多く彼等の中に在つた。

彼れは斯くの如くにして。非難の聲毎日毎日雙耳に喧しかりしも極めて平氣な者であつた。加之彼れは漢學者の云へる樣な人格を倫り論せず。又意志の力を倫り說いて居らぬ。殆ど情一偏の人であつた。磊落と云ふべきか。粗野と云ふべきか。言語同斷の振舞が折々見出さる。蓋し猶太人は食時前には必ずらず手を洗ふ習ひである。我が邦にて恰も大小便の後洗手するやうなものである。律僧などは一寸經文に手を觸るゝにさへ。先づ香を爇する程である。然るに基督は大小便の後手も洗はず。直ちに攫み食ひをやらかした。土井聲牙齋も三舍を避けねばならぬ。人其の意を問へば。心を洗ふ者は手を洗ふの要なしと曰つてすまして居る。支那人にも大丈夫天下を掃除せんと欲す。何ぞ一室を事とせんと曰つて。部屋を塵埃に埋めて澁た人もある。

彼れの行狀は大凡斯くの如くなるを以て。社會は一般に彼れを目して亂民として居つたのである。是等は先づ瑣事として暫く舍くも。猶太敎の宗旨の上から見て其信仰を怪まねばならぬ點が往々ある。其の一例を云へば。當時の敎法師を。彼れは痛く罵つた事である。故に彼れは石を以つて擊れんとせしこと殆ど毎日であつた。若し其れ佛敎にて僧侶を罵る者などあれば。忽ち極樂の門は閉ぢられて仕舞ふ。佛敎にては蔭で僧侶を謗ることさへ。非常な大罪となつて居る。猶太にても無論摩西の律法に敎法師士師民長等を謗り又詛ふことを大罪としてあつたのである。基督はそれにも拘はらず遠慮會釋もなく彼等を罵倒して。亦其の言ひ廻はしの上手なること。問答の巧みなること。彼等をして手を措く處なからしむ。彼れの機鋒の鋭きことは。所謂兩刃の劍の如く。骨と肉とを剖き分けると云ふ風であつた。其れも希臘人の問答の樣に。煩鎖な小理窟ではない。隻言隻語敵の立脚地を奪うて。忽ち敵をして其生命を喪亡せしむ。彼れは敵を殺すに己れの劍を用ゐず。敵をして直ちに自殺せしむるのである。此に余をして暫く「ダビデ」王を序せしめよ。

◎ダビデ王

夫「ソーロ」は山地剝 ䷖ にして。「ダビデ」の地雷復 ䷗ たることは。猶「バベル」が剝にして「アブラハム」が復たりしと一般である。其の高潔なることを言へば。「バベル」の塔も「ソーロ」も齊しく高潔である。然れども彼等の高潔は寧ろ連天秋水の潔きが如きものにして。「ダビデ」「アブラハム」の如きは。春夜月の朦朧たるが如きものである。前者は有相戒にして後者は無相戒である。曾て摩西が「エチオピア」の女を娶つたことがある。元來以色列古來の戒法。及び摩西の律例に因つても。異邦人と

結婚すると云ふことは。甚だよろしくない。況んや摩西自身も之を人衆に向つて。禁じて居るのである。然るに摩西自ら之を犯すと云ふに至つては。言語同断の振舞である。豫ねて摩西を怨み居たる許多の民衆は。何がな摩西の欠點を押へんと。鵜の目鷹の目して。つけ狙らふ際。恰も好し斯ることの生じたりければ。果然民衆は哄めき亘れり。先づ口を啓いて摩西を謗りしものを。「ミリアム」と云ふ彼れの姉。及び兄「アロン」の二人となす。二人相謂て曰く。神は摩西とのみ語り給ふか。我等とも亦語り給ふにあらずや。夫れ摩西は人と爲り極めて温柔。世上の人に勝つて居る。「エホバ」遽かに摩西、「アロン」及び「ミリアム」の三人を召して。會幕に立たしめ。「ミリアム」「アロン」の二人に謂つて曰く今我が言を聞け。爾の中に若し預言者あらば。我れ將さに夢に托して語り或は顯現して我れを知らしめんとす。獨り摩西は然らず。彼れ我が全家に忠實にして。直ちに口を以つて我れと語り覿面相嚮つて言ひ。曾て隱語を用ふるにあらず。彼れ常に我れの全身を見る。汝曷ぞ畏れずして我が僕摩西を誹るやと曰つて。怒りの聲烈しく。雲幕を離れし時に。視よ「ミリアム」は變して白癩となれり。「エホバ」は甚だ不公平にあらずや。然らず。此不公平と見ゆる處に天路の難關が横つて居る能く此關門を透過せし者が即ち受膏者「ダビデ」である。却説「アロン」は之を見て深く哀しみ。摩西に依て其の醫されんことを求む。摩西神を籲んで之を求めしがば。其時神の答へが甚面白い。曰く彼れの父其の面に唾する事おりてすら。彼れは七日の間。世間に憚り居るべきにあらずや。彼れを七日の間營外に禁固しをき而して後再び歸り入らしむべしと。崑崙呑み。崑崙吐く。何が故ぞ。慣釣鯨鯢澄巨浸却嗟蛙歩蹶泥渉。

向上一場の麼懼。女の木登りを見せてはならぬ。要は唯大死一番して。三界を出直すより外はない。更に左の話を解せば。「エホバ」の意が略々諒せらるゝ。「ミリアム」の白癩も七日にして醫へ。會衆營を進めて「チン」の野に到りし時。「ミリアム」死したれば。衆是れを其の地に葬れり。當時會衆水を得ざるに因り。相集りて摩西と「アロン」に迫れり。曰く我等の兄弟等が遂に「エホバ」の前に死したる時に我等も與に死せざりしを憾む。

汝等何ぞ「エホバ」の會衆を此の曠野に導き上りて。人畜共に死せしめんとするや。汝等何ぞ埃及より我等を引出せしや。視よ此處には種を播くべき地もなく。無花菓もなく。葡萄もなく。石榴もなく又飲むべき水もなしと。摩西と「アロン」は會衆の前を去り。幕屋の門に詣りて俯伏しけるに。「エホバ」の榮光忽ち彼等に顯現せり。「エホバ」摩西に諭して曰く。汝杖を執り「アロン」と倶に會衆を集め。其の目前にて汝等の立てる磐に命せよ。磐より水出で來らんと。摩西即ち「アロン」と與に會衆を集め。杖を執り手を擧げて磐を擊つもの再びするに。水即ち湧き出でたれば。會衆と獸畜皆飲むことを得たり。時に「エホバ」摩西と「アロン」に告げて曰く。汝等は我れを信せずして。會衆の前に我れの聖を顯はさざるに緣り。汝等此の衆を導きて約束の地に入るを得ざるなりと。彼等は之に緣つて終に曠野に

死し迦南の地に入るを得ざりき。「エホバ」は先きに摩西に對して頗る寛なりしに。今は斯くの如く嚴なるは抑も何故ぞ。眞逆「ミリアム」の祟りでもあるまい。

否先きのも決して不公平ではない。後のも亦決して過嚴ではない。是れは佛敎にて云へば本覺と始覺との關係にして。摩西の境界と「ミリアム」の境界とが。全く別かるゝからである。譬へば「エデン」樂苑上の「アダム」を本覺として。本有の神性はあれども。未だ修行地に入らず。方舟上の「ノア」を始覺として。修行は窮極したれども。未だ妙用を得ず。海底の摩西始めて神の全體を見。茲に妙覺の地位に達せりとすれば。「アロン」は是れ本覺。「ミリアム」は是れ始覺。摩西は即ち妙覺にして。己に律儀戒を出で一心戒を得たるもの。彼れは最早戒律の奴隷にあらず。寧ろ戒律の主にして之を出すの人。亦本覺に還源して。「アロン」と一體となれる者。去れば摩西は絶學無爲。「アロン」は無眼赤裸。共に生命樹下に消遙して。善惡樹の祟りなし。唯「ミリアム」一人は善惡樹の觀るべく。又食ふべきを愛して之に依て生き之に依つて死す。元是れ自然の結果である。然れども幕營なる「エデン」外に出さるゝこと七日にして。復た回つて其の兄弟に歸し。三人相携へて「エホバ」の纛を進む。

先きに彼れが病みて。七日間營外に在りし間は。「エホバ」の纛全く靜止して。更に活動せなかつたのである。基督曰く父の働き給ふ如く。我れも亦働くと。彼等は如何にして働き始めしか。「ミリアム」の復歸は即ち死して蘇りたる者にして。彼れは始覺より妙覺に入り。妙覺より本覺に入り。本覺より復た始覺に入るべきものである。語を換へて言へば摩西は「アロン」に入り。「アロン」は「ミリアム」に入り。「ミリアム」は復た「アロン」に入る。更に換言すれば絶學無爲は無眼赤裸に入り。無眼赤裸は善惡樹に入り。善惡樹復た絶學無爲に入る。斯くの如く輪轉極りなく。揚眉瞬目。電光石火の間に。吾人の生命樹が存するのである。其の摩西にせよ「アロン」にせよ。將た「ミリアム」にせよ。昏沈不動なる所が。即ち吾人の死である。故に「ソーロ」は善惡樹に固定して死し。「ソロモン」は生命樹に固定して死し。獨り「ダビデ」のみが終始能く順環したのである。故に約櫃には止まる時も行く時も。常に杠木を貫きて之を取り脫すことなく。二六時中動形を持たしめて居る。向上の死漢不歸の客ではない。一陰一陽之を道と曰ふ。生死の間を往來消長して。長へに息まざる者。之を生命樹とは云ふなり。

視よ祭司「エリ」は其の二子の罪を擬せられし時に。宜しく神の意に隨つて之を處し給ふべしと言つて。從容羔子の如きものであつた。「ダビデ」も亦斯くの如く。毫も死を怖れず罰を避けず。唯神の善しと見給ふ處に隨つて。我れに施し給へと言つて。更に血迷ふ氣色を見せなかつた。謂らく他人の手に死せんよりは。寧ろ神の手に死せんと。蓋し彼れは神の手に死すれば。忽ち蘇つて神坐に入る者と暗裏に信仰を有したのである。果然彼れは神坐に登れり。「ソーロ」が無信仰にして其の醜體を曝露せしとは大に異なつて居る。

◎ソーロ王

共れ斯くの如く。三者順環して其の端なき處に。水あり無花果あり。葡萄あり石榴あり。彼等が需むる一切の者其の中に存せり。是れ摩西が脚下の磐を擊ちて。水を出せし所以である。基督曰く。三人相依つて心を一にする處には。我も亦其の中に在らんと。「ミリアム」の死したるは即ち。消へて跡なきにあらずして。正に摩西「アロン」に同せしなり。摩西「アロン」の死したるは。即ち「ミリアム」に同せしなり。茲に彼等は三人相依つて基督を見出し。生命の活水を得たのである。

去れば「ソーロ」と其の子「ヨナタン」及び「ダビデ」の三人は。元一體ならざるべからず。蓋し「ヨナタン」と「ダビデ」は其の靈相通じて一體となりしも。獨り「ソーロ」と「ダビデ」と相通ぜず。「ソーロ」は常に「ダビデ」を殺さんと謀つたのである。而して「ソーロ」は其の女「ミカル」を「ダビデ」に妻はしたれば。茲に「ミカル」「ヨナタン」「ダビデ」相聯結して「ソーロ」は全く孤立の姿となり。終に敗壞に歸するの止むを得ざるに及んだのである。

此の「ソーロ」は即ち「ヨシュア」以後。士師時代凡そ四百年間。迦南に在りし「エデン」樂苑の末日にして。全く當年の「バベル」の塔となり了り。如何に其の散處を免れんとし。如何に其の名譽を留めんとせしも。終に力及ばずなりぬ。此に知る、善惡樹と生命樹とは元二體にして。二は一に因つてあり

一は二に因つて立つことを。生命は即ち善惡の共通性なることを知らずして。三者相爭ふ之を「チシ」の野の爭水とは名づくるなり。

初め「ソーロ」が「ダビデ」に。其女「ミカル」を嫁する時。其の聘禮として敵の陽皮二百を徵せり「ダビデ」は特に陽皮二百を得て之を「ソーロ」に贈り「ミカル」を娶つて妻となしたれども。此の女には唯「ノア」の割禮のみあつて更に摩西の洗禮なし。故に後去つて別人に嫁し。再び入つて「ダビデ」に復歸したれども兩人の間終に睦しからず。恰も基督が猶太人に匪類視せられ。去つて異邦人に其友を得しが如く。「ダビデ」も亦異邦人「ウリヤ」の妻「バテシバ」と云ふ。洗浴の裸體美人を入れて妻となし。子「ソロモン」を其の胎より得て。己れの帝位を繼がしめ。「ミカル」には子なく。唯「ヨナタン」に跛足の一子「ヒボセテ」のみ存せしのみ。顧みて猶太國の末路を思へ。

◎二種の裸體

夫れ十卷書の中に。二種の裸體がある。一は「ノア」の裸體にして他は「ダビデ」の裸體である「ダビデ」曾て「オベデドム」と云ふ者の家より。神の約櫃を舁ぎて。「エルサレム」の居城に移し入るゝ時。行くこと六歩にして。牛と肥犢とを以て。獻祭し。力を盡して「エホバ」の前に舞蹈せり。此の時「ダビデ」の妻「ミカル」窓より觀望して「ダビデ」が唯細案の「エポデ」を身に束ね。民衆觀呼の中に

體を露はして「エホバ」の前に舞蹈するを見て其の中心に彼れを鄙みたり。斯くて「ダビデ」は豫ねて用意せし幕中に神櫃を迎へ。燔祭を其の前に獻じて萬軍の主の名を以て。其の民を祝し畢り。男女を論ずるなく一人毎に各麵麭一。酒一量。乾葡萄餅一を頒ち與へ衆皆家に歸り。己れも亦入つて其の眷屬を祝する時。妻「ミカル」出迎へて「ダビデ」に謂て曰く。以色列の王よ。今日如何に威光おはせし。體を其の臣僕の婢女の前に露はし給ふこと。遊蕩者の如く然りと。夫れ「ミカル」と云へる「ダビデ」の妻は前帝「ソーロ」の女にして。其の言ふ所よく「ソーロ」の家風を示して居る「ダビデ」も亦其の時の答へに因つて善く彼れの爲人と家風とを見せて居る。曰く「エホバ」は汝が父及其の全家を棄てゝ。寧ろ我れを簡び其の民の宰となし給へり。故に我れは其の前に躍舞せざるを得ず。我れは是等の事に比して。尙一層賤しき者。我れも亦自ら視て賤しとなす。汝が所謂臣僕の婢女に至りては我れ彼等と共にありて。其の尊榮を受けんと。是の故に「ソーロ」の女「ミカル」には終に子なかりき。

之れと相對する「ノア」の裸體は若何。彼れ「アララット」山を下り。始めて農夫となつて葡萄園を樹ゆ。或日其の汁を飲み。醉うて裸かとなり幕內に臥しければ。彼れの次子「ハム」は之を見て。出てゝ其の兄弟に語る。長子「セム」と季子「ヤベト」は。衣を取つて肩に佇ひ、反走して前み父の裸體を蓋ひ。首回顧せずして去り。終に父の裸體を見ざりき。「ノア」目醒めて彼等の爲せし所を知り。「ハム」を詛うて曰く彼れは僕輩の僕となりて其の兄弟に事へん。「セム」の神「エホバ」は讃むべきかな「ハム」は其の臣僕となるべし。神「ヤベテ」を大ならしめ給はん。彼れは「セム」の幕に住ひ「ハム」之れが僕とならんと。

「ノア」の裸體を見たるものは詛はれ。「ダビデ」の裸體を見たるものは祝されて居る。一は漢學者のやうで一は禪坊さんのやうである。一休和尙の如き人は。眞に裸體であつた。然れども未だ一休和尙ならざる坊さんが。裸體の眞似をするのは。兎角見苦しい。古來名畫師の裸體畫は極めて神聖である然れども凡工の作に至ては其の醜見るに堪へぬ。坊さんにも畫工にもそれの多いのには頗る閉口する。近代の禪僧の中で雷雪潭、鬼大拙、寶僧萬寧、何とか湛海等其性僻を蔽はぬ人もあつた。是等は勿論褒めたものではない。然れども彼等の洒落。短氣。お上手。惡辣の中には一種云ふ可からざるの長所あり。到底凡僧の企て及ばざる所である。蓋し其の中に自ら爲人度生の德が具つて居る。若し夫れ古へに溯つて。淨裸々赤裸々の人物を尋ねれば。學者にも宗教家にも乃至其外にも固より多い。是等は無論尋常人でない。其の爲す處秩序あり統一あり。瓢箪の樣でも締括りあり。鬼の樣でも愛嬌がある。寧ろ壯嚴美と云はねばならぬ。

◎五種の偶像

「ペリシテ」の人以色列を攻んと欲して。大軍を擁して上り來る。或時以色列人困迫して。巖穴、叢林、磐石、高塔、玖阱の中に匿る。爾時「サウロ」祭司「サムエル」と約して共に其神「エホバ」を祭らんとす。未だ期日に至らざるに民皆散じければ。「サムエル」を俟たずして。自ら神に燔祭を献じたり献じ畢りし時「サムエル」到る「ソーロ」之に謂つて曰く。民我れを離れて散じ「ペリシテ」の人は己に我れに逼る。故に我れ爾の來るを俟たずして。自ら勉強して神を祭れりと。「サムエル」曰く汝愚かなることをせり。今汝の國必ず繼がざらんと。

又「ソーロ」其神「エホバ」の命に因つて「アマレク」人を征す。神豫め「サウロ」に告げて曰く其の男女孩童、乳哺の嬰及び牛羊。駝驢、皆悉く之を殺して惜むことなかれと。「ソーロ」は頓て「アマレク」人を擊ち。大殺戮を行ひ。盡く其の民を滅したれども。其の王「アガク」と羊牛の美なる者を惜み。之を戮せず。唯惡劣羸弱の者のみ之を滅せり。祭司「サムエル」之を見て。「サウロ」に謂つて曰く、「エホバ」は汝に告げて曰はずや。何物をも惜むことなく。總べて之を滅せと。汝何ぞ「エホバ」の命に背くや「サウロ」曰く我れ誠に「エホバ」の命に遵つて「ペリシテ」人と戰ひ其王「アガグ」を執らへ來り。且つ民は羊牛の至美なる者を以つて。其神を祭らんとして居ると「サムエル」曰く「エホバ」は燔祭と祭祀とを悅び給ふ豈其の言を遵奉するに愈らんや。祭祀は隨順に如かず。牡羊の脂は聽從に如かず。違逆する者は獨は邪法の罪の如く。頑硬なる者は猶ほ虚物に事へ。偶像を拜するが如しと。汝「エホバ」を棄たるに縁り「エホバ」も亦汝を棄てゝ以色列に王たるを得しめざらんと。先きに余は「サウロ」の女「ミカル」の事に由つて。「サウロ」の家風と「ダビデ」の家風とを對照せり。讀者更に是等に由つて。愈々益々「サウロ」の標形虚事。「ダビデ」の淨裸洒脱。孰れが能く神の意に適ひしかを知り。又如何にして士師時代の末日。其の「バベル」の塔が崩れしかを知るを得ん。「サムエル」曾て「サウル」に告げて曰く神は其の意に適へる一人を簡び給へりと。是れ「サウロ」の女「ミカル」に比匪者視せられたる「ダビデ」にあらずや。基督曰く我れ世に勝てりと。彼れは其裸體にして十字架上に擧げられし時。方に能く「エルサレム」に在る「バベル」の塔を破潰したる者。吾人は彼れの裸體を見て「ダビデ」の人と爲りを知らねばならぬ。彼れ「ダビデ」は「サウロ」の毒手を遁れて困頓流離の際。之に勝つことを得たるにあらずや。

金屑貴しと雖も目に入れば翳となる。夫れ我が十卷書の中に。自ら五種の偶像がある。木の偶像、石の偶像、銅の偶像、銀の偶像、金の偶像、是れである。金は銀よりも尊かるべし。銀は銅よりも尊かるべし。銅は石よりも石は木よりも尊かるべし。去れど金と云ひ銀と云ひ皆偶像たるを免れず。以色列人曾て亞拉比亞の野に在つて。金犢を製り。之に燔祭を獻じて。其前に座して飲食し起つて嬉戲せり。摩西「シナイ」山に在つて證詞の二碑を得。山を降らんとする時。民の喧囂を聞く。摩西の侍者。「ヨシュア」曰く是れ營中の鬨聲なりと。摩西曰く是れ戰勝の凱聲にあらず。亦敗北の呼聲にもあらず乃ち歌頌の聲なりと。吾人も亦門を出れば。毎に凱聲にもあらず。呼聲にもあらざる。一種歌頌

の聲を聞くのである。是れ世人が其の偶像の前に坐して供食し。趙つて嬉戯する者にして。政治家も哲學者も乃至佛教家、神道家、耶蘇教家。も各其の偶像を拜して。其の前に嬉戯して居るのである。昔、雲門和尚陳操尚書に問うて曰く如何なるか是れ三乘十二分教。操曰く黄卷赤軸。門曰く。這箇は是れ文字語言作麼生か是れ教意。操曰く口談せんと欲して辭喪し。心縁せんと欲して慮亡ぶと。門曰く口談せんと欲して辭喪するは。有言に對するが爲めなり。心縁せんと欲して慮亡ずるは妄想に對するが爲めなり作麼生か是れ教意と再び詰め懸けられて。流石の大居士陳操尚書も一言なかりしと云ふ。夫れ黄卷赤軸の偶像たることは誰も知る處。然れども心亡慮絶亦是れ偶像たることは知らぬ者が多い。門曰く尚書は平生法華經を愛讀せりと聞く。其の中に一切の治生産業。皆實相と違背せずと曰ふてある。且く道へ。非々想天即今幾人かあつて退位すと。斯くの如く更に問ひかけた。蓋し坐禪の道は外でない。是等の偶像を掃却するの術である。柳綠花紅と云つても未だ偶像を脱して居らぬ。治世産業是れ佛教も猶未た窠窟を出て〜居らぬ。所謂蝦跳不レ出レ斗である。唯雲門が最後の句に非々想天有三幾人一退位。と云へる處に我が十字架教がある。是れは一度我が十字架頭上筋斗を打し得たるものにあらざれば。共に語ることが出來ぬ。非々想定とて橋木死灰を以て極所とする天部がある即ち般若の道は他なし之に再び萠芽を出さしむるのである。不レ用三神仙眞秘訣一直教二枯木放レ花開一。方に是れ「アロン」の枯杖に杏花を開かしめたる處と一般である。之を解せんと要せば須らく自己の「バベル」の塔より先づ破壞し來らねばならぬ。

◎惡　靈

以色列人が亞拉比亞の野に於て。摩西が「シナイ」山に登り。久しく歸らざるを見て。「アロン」に迫り己等の爲めに別に神を作らしむ。曰く我等を導きて此の曠野を出去らしめんと。「アロン」彼等に命じて。其の妻女の耳環を斷ち之を己れに携へ將ち來らしむ。彼等各妻女の金の耳環を取り。之れを「アロン」の手に輸しければ。「アロン」之れを火に投じて其の金犢となれるを見。更に錐を以つて鑿刻を加へ。之を彫像し彼等に與へければ。衆皆曰く是れ我等を導いて。埃及より出せし神なりと。「アロン」之を見て憤前に壇を築き衆に示して曰く。明日は乃ち「エホバ」の節莚なりと。詰朝群起して其の前に燔祭を献ず。夫れ「アロン」は辯舌巧みなり。今も「アロン」の如き人あつて我等に預言し我等を教ゆ。然れども愈聞いて愈偶像となる。縱令其の金たるにもせよ「ダイヤモンド」たるにもせよ。終に其の「バベル」の塔たるを免れぬのである。

學道之人不レ識レ眞　唯爲三從前認二識神一
無量劫來生死本　癡人喚爲二本來人一

是れは長沙の岑和尚と云へる禪僧の語である。我が十字架教の意にも。自ら善く適合して居る易に曰

く理を窮め性を盡し以つて命に至ると。吾人は唯理を窮めたるを以つて足れりとすることは出來ぬ。

當さに能く性を盡さねばならぬ。性を盡すの道他なし。長沙云ふ底の所謂識神なるものを打破せねばならぬ。此識神は佛敎にて阿賴耶識。即ち含藏識と稱するものである。世の哲學者宗敎家大抵皆此阿賴耶識を認めて。自家の命となし。神となし。道となし玄の又玄となし。衆妙の門として居る。獨り知らず此阿賴耶識なるものが即ち「バベル」の塔にして。高く天に聳へ遠く下界を離れて居る。又卑く地獄に下つて天界を離れて居る。更に人間界の受用がない。佛敎にて六慾天四禪天等と稱するものは即ち此阿賴耶識の分際にして。彼等は天上界の人にあらざれば地獄。地獄界の人にあらざれば天上界。畢竟佛界の人ではない。

預言者「ダニエル」曰く殘暴惡むべき者現はれ出て。當さに立つべからざるの處に立ち。其間献祭と禮拜とは廢止せられ。必らず敗壞あらんと。是れ閻羅王なるか。不動明王なるか。將た七燈臺の間に立てる夜叉なるか。其目は熖々たる火の如く。其面は烈々たる日の如く。兩刃の利劍は其の口より出で。其の首白きこと羊毛の如し又雪の如し其足精銅の燒けて爐にあるか如く。其の聲大水の音の如きもの。果して是れ何物なるや。誣む者善く心せよ。之を吾人の上に立つ執政者とのみ判ずることなかれ。乃至貧民を虐ぐるの資本家とのみ斷ずることなかれ。吾人の心中實に此くの如き者あつて當さに立つべからざるの處に立つて居る。曾て惡靈「ソーロ」王に宿り。煩悶終に狂を發せし時。之を醫したるものは。卑賤の牧童赤面冠者の「ダビデ」なりき。

人情は毎に他人の眼中にある偶像を認めて。自家の偶像を認めず。基督曰く先づ汝の眼中に横はる梁木を取り去れ。然らざれば他人の眼屑も亦除き難しと。彼れは眞に此心を躬自ら實行したる者。彼れ世に出て箇の惡靈を除かんとせず。先づ其身を十字架にかけて。自己の識神を打破したり。爾時天は光を收め地は暗を放ち。密雲翼を開いて風雨悽ましく。天喚べども聞へず地叫べども聽かず。來往の人は指辱して嗤ふ。彼れは何れに向つて此の苦恨を訟へんとせしか。傍らに立てる其兄弟其母。亦如何とも手の施しやうなく。唯亡然たるのみなりき。

◎『ヤボク』の渡津

「ヤコブ」「バラン」を去つて。父の許に歸らんとせし時。「ヤボク」の渡津に到りて。先づ其妻子眷屬及び羊驢を渡し。已れ唯獨り遺されて此岸に留まれり蓋し「ヤコブ」の胸中には。尙未だ。後ろに追者の慮りを斷つ能はざる者あり。前には大敵を控へて居る。此の時に當つて忽ち一人あり。深暗裏唯獨り遺されたる「ヤコブ」を目がけて。來つて與に力を角して黎明に及びぬ。對岸の妻子眷屬は曾て之を知らず。之を知るものは唯「ヤコブ」一人である。基督も亦斯くの如く。彼れが「ケッセマヲ」の苑中に於て。血涙滂沱の夕門人等は其の傍に在つて皆瞌睡せしにあらずや。髑髏山上に於て。劍光閃爍の朝。其母

其の兄弟等は之を傍觀せしにあらずや。越後に親不知と云ふ險所がある。親は子を救ふ能はず。子は親を省みる能はず。十字架頭上の吾人も亦應さに此くの如くなるべく。終に他人に向つて其の忖度と救助とを求むること能はざらぬのである。斯くて其對手自ら勝たざるを揣り「ヤコブ」の髀樞を擊ちければ。彼れの力源地なる髀の樞軸は。相角するの際離れ挫けたり。周易澤山咸䷞の九三に咸其股執其隨往吝と云へる處と偶々相合せしも亦面白い。彼れは髀樞を挫かれたる爲め始めて敵に勝つことを得たのである。有佛の處留まる勿れ。無佛の處更に走過すべし。彼れの繫驢橛髀樞を拔き去つて。敵は又彼れに何を曰ひしか。天將に曉けんとす。我を赦して去らしめよと曰へり。是れ誰れの天明なるか「ヤコブ」の天明なるか抑も其の對手の天明なるか。百鬼夜行の圖に。室內の器具が皆さま〳〵に化けて居る。曉明に近づけば妖怪の影が次第に薄くなる。終に旭光に照された部分は。其姿俄に消へゆく處が書いてある。今此黎明に及んで。其の姿を隱せし一人は果して何者なるか。更に咸の九四に至て憧々往來明從二爾思一とある。茲に傳に曰く未二光大一也と銀幌又變じて金幌となり金幌又變じて何物かになるの端的偶然とは云ひながらも亦妙ならずや。「ヤコブ」曰く爾我れを祝せざれば。則爾の去るを容さずと。其の人曰く汝の名は何ぞ。曰く「ヤコブ」なり。曰く汝復た「ヤコブ」と稱する勿れ。今後「イスラエル」と稱すべし。其は汝神と人とに力を角して勝つことを得能ひしこと王者に似たればなりと。是に因つて「ヤコブ」は「イスラエル」即ち勝利者と云ふ稱號を得たのである。猶太の王「ナザレ」の耶蘇と標榜せられたる基督は躯死して殿幕亦裂け。至聖所なく又殿堂なし。萬軍の主「エホバ」は今何處に在しますぞ。更に下文を讀め。

「ヤコブ」問ふて請ふ爾の名を以て。我れに告げよと曰ひければ其人答へて汝何ぞ我名を問へるやと曰ひて。乃ち其處にて「ヤコブ」を祝せり。是に於いて「ヤコブ」其の處を「ペニエル」即ち神の面と名づけて曰く我れ面と面とを合せて神を觀。我れの生命尙存すと。前箭は輕く後箭は重し。神の面容果して若何。諸人見るや否や。

蓋し以色列人は神の面を見れば直ちに死する者と信じて居つたのである。摩西も神の面を見ると同時に死し。基督も神の面を見ると同時に死せり。彼等の死する處は是れ彼等の生きる處。之を禪宗にては面門を燎却せらると云うて。覿面相逢うて相識らざるの處に用ゐて居る。由來禪宗の人は好語を用うるに慣れて居るのである。昔龐居士と云へる人。馬祖道一禪師を江西に訪うて。道を尋ねたことがある。居士問うて曰く。萬法と儔侶たらざる者是れ什麼人ぞ。馬祖は之に向つて儞が一口に西江の水を吸盡せんを待つて。始めて儞に向つて道はんと答へられた。龐居士之を聞いて豁然大悟したとある。蓋し馬祖の意は。佛の一字も是れ心田の穢れ。先づ儞の目を能く淚へて來いと云ふのである。

吾人も亦斯くの如く。先づ己れの眼中より梁木を取り去らねばならぬ。人情は兎角他人の物屑を氣にするものなれども。己れの眼中に在る梁木の反映なことを知らば。徒らに他人の眼中を覗く必要は

ない。摩西は紅海に呑却せられて。其の眼翳を除き。基督は「ヨルダン」河に吸盡せられて其の垢衣を洗ひ。而して「ヤコブ」は「ヤボク」の津頭の洪暗を潜つて神の面を見たり。抑も紅海摩西を呑みたるか摩西紅海を呑みたるか。基督河水を盡したるか。河水基督を盡したるか。此の處須らく冷暖自知なるべし之を禪宗にては大用現前と云ひ。又現成公案と云ふ。

現成公案絶(ス)二安排(ヲ)一　無位眞人笑(ヒフ)滿(レ)腮(ニ)
吸(ニ)盡(シテ)西江涓滴(ノ)水(ヲ)一　榴花樹々吐(デテ)レ紅(ヲ)開(ク)

是等の意は強ち坊さんに就いて。參禪などせずとも。不斷我が十卷書を讀みさへすれば。尋常の茶飯である。臨濟の語に一無位の眞人常に。吾人の面門より出入すとある。是れも其の何人なるやは。我が十卷書に善く示してある吾人は常に其の人と語言せねばならぬ。又西江の水を吸盡する處も更に下文に於いて之を示さん。

◎山下の二碑

摩西「シナイ」山より下りて。民衆の金犢に獻祭し。其の前にて飲み且つ食らひ。起つて嬉戯するを見て烈怒彼れ口訥の摩西は何をなせしか。彼れは其の手に持てる證詞の二碑を擲ちたれば。七花八裂二碑は山下に碎けたり。抑も彼れは金犢をこそ破碎すべきに。何故箇の善惡を律せる神の證詞を擲破せしや。基督世に降りて先づ惡魔を(一字不明)治すべきである。然るを何故に自ら滅亡を取りしや。神は埃及に在る其子の叫喚を聽いて。之を救ひ出さんとし。何故に「パロ」を罪せざる。却つて彼等を死陰に導き給へり。神は「アブラム」の子孫に。迦南の故土を與へんと約して。何故に之を埃及の地獄に沈め給ひしや。其の埃及を出るの時に當つても。何故に之を迂迴して。曠野に彷徨せしむること。四十年なりしや。彼等は「エドム」の地より直ちに上つて。迦南に入らんとせしも。神は之を許し給はず。基督は死して後。更に深坑に埋却せられたり。

易に天風姤 ䷫ と云ふ卦がある。女壯勿レ用レ取レ女(ルニヲ)とあつて。捨をけば次第に剝して。山地剝 ䷖ となる。是の故に風地觀 ䷓ の九五に居るときには。小人の淫侵を避けて。地澤臨 ䷒ となり。寧ろ此方より小人を決して直ちに天下に君臨するか。又は九五下つて山雷頤 ䷚ となり。直ちに民を養ふかの二道より外にはない。後醍醐天皇京都にはして。尊氏等の小人。將さに九五の位に薄らんとして居る時。流石は神出鬼沒。隱顯不測の間に敵を惱すに慣れたるの正成。彼れは這間の消息を暗ずもの早速天皇に御勸め申して。早く叡山に退き給へと奉上す。天皇聽かずして終に敗缺を取り給へり。畢竟之と同じ道理にして。高きに居るものは卑きに下り。卑きに居るものは更に死して剝落を避くる處がある。

是の故に摩西は紅海に沒して「パロ」を滅し。基督は「ガリラヤ」に落ちて敵を腦まし「ダビデ」は野に

隱れて「サウロ」を斃したり。「ダビデ」「サウロ」に謂つて曰く。以色列の王よ爾は出でゝ何を尋ぬるか。一の跳蚤を尋ぬるかと。又或時には曰く。爾は恰も人の一鷓鴣を山に逐へるが如しと。彼れは斯くの如くにして毎に「サウロ」を奔命に憊れしめたり。其間に彼れは自家の立脚地を愈堅くして「サウロ」の自滅を俟つて居たのである。彼れは困頓流離の中。己に以色列の王冠は其の頭上に在り。友を得ること日に益多きを加へ。剩さへ彼れは祭司「アビヤダル」を得たり。初め「サウロ」祭司「アビメレク」の「ダビデ」に幸ひせしを聞き。召して其の罪を問ひ。一屬を併せて悉く之を誅殺しければ。「アビメレク」の子「アビヤダル」獨り逝れて。往いて「ダビデ」に歸せり。「ダビデ」「アビヤダル」に謂つて曰く懼るゝこと勿れ。汝の生命を尋ぬるものは。亦我が生命を尋ぬるものなり。汝我れと偕に在つて生を保つべしと。

此方の阿閦如來とて。相毫の麗しき極めて慈悲深い佛がある。是れは彼の怖ろしき不動尊である。阿閦を譯して不動と云ふ。夜叉相を現じ劍を持ち。火焔の中に住する。不動尊が。如何にして斯く目出たき佛樣となられ得るや。十卷書を讀むものは少しも怪しむに足らぬ筈である。物を殺すの神は必らず物を活かすの神。人を卑くするの神は。必らず人を高くするの神たることは。通卷善く之を明らかにして居る。故に。吾人は唯肉體を滅して我が生命を奪ふこと能はざる者は。毫も懼るるに足らぬ道理である。周易剝 ䷖ の上九に碩果不レ食君子得レ輿小人剝レ廬とあり。兎角小人は身代限りでもする

やうに思うて。兩手を撒して懸崖に臨むことが出來ぬ。基督が汝等は罪の贖されんことを懼れて。我れに來らずと仰せられたのは。正しく此處である。逡巡回顧する間に日は已に黃昏世は鹽柱となり果てゝ碩果食はれざる者のみである。君子は斯の如き時節こそ。眞に興を得たるの心地して進で彼の弘誓の舟に乘る。故に復 ䷗ の彖辭には復得出入死疾 朋來无レ咎。反復其道、七日來復、利レ有レ攸レ往。と出て居る「ヨシユア」が「ヨルダン」河を出て出入無礙なりしも皆此道理である。

◎魔王基督（一）

斯くの如く摩西は其の善惡を律せる雙手の碑石を山下に擲ちて。之を碎きたる後。彼れは以色列の神金犢を如何になせしか。彼れは金犢を取つて。焚くに火を以つてし。磨して粉となし之を水に撒して以色列の衆に飲ましめたり。基督曰く我が肉は汝等の善き食物なり。我が血は汝等の好き飲料なりと此の金犢も亦基督と同じく。以色列人の好飲食物なりや。基督は曾て割禮を受け又洗禮を受け。終に燔祭酬恩祭の犧牲となつて。馨香を天に擧げたる者。其灰となり水となり。散じて枯木花開き。青帝來つて之を管し。五風十雨四時長へに耕耘する者。是れ當年「エデン」樂苑上の「アダム」にあらずや。抑も基督は世を祝せしが爲めに殺されしか。世を詛ひしが爲めに殺されしか。彼れは蛇と偕に腹行

し蛇と偕に地の塵を食らひ。時に霹靂天に震ひ。或は其の婦を治めて荊棘林に耕し。仁義道中四千年間。暗に吾人と寃讎を結び。常に吾人をして。其の捕影に苦しましめたのである。

昔「ヨブ」と云へる人あり。神と天使と惡魔と。其の前に來つて悲劇を演ず。「ヨブ」も未た曾て彼等の樂屋を覗かず未だ曾て其の筋書を見ざれば。觀者三人の友と。之を評して議論終に決せず。判を神に請うて始めて相笑ふて別れたことがある。猶太人も亦斯くの如く。基督の眞影を捉へるには。久しく苦しんだのである。彼等は其の悶かしさに堪へかねて。終に彼れに問ふた。我等をして早く爾を信すべからしめよ爾は眞に基督なりやと。蓋し創世の初めより。神の樂屋に就いては何人も箇の疑ひを挾み來つたのである。基督の弟子は其の榮光神に等しと云ひ。吾人も亦今日より彼れを見て。其の尊むべく又愛すべかりしを信ず。何故に猶太人は執念くも彼れを疑ひしや。蓋し其の弟子と雖も當時に在つては尙半信半疑の中に在つて。彼れを救世主なりとは一般に認め得て居らぬかつたのである。然れども彼れが一片の肝膽。曾て「ニコデモ」に向つて傾け盡したことがある。曰く摩西。蛇を野に擧げしが如く。我れも亦擧げらるべしと。是れ基督の本性否神の面目を吐露して。餘さゞるの一言である。

以色列人が亞拉比亞の野を過ぐる時「ホレブ」山より啓行して。紅海の途より「エドム」の地を繞る時に食も水もなく。途亦曠遠にして險惡。其の心憂懼して。只管神と摩西を怨む。神之を怒つて。火蛇を民中に遣し。彼等を嚙ましめければ。死するも甚多し。民摩西に詣つて其の罪を謝して曰く。我儕罪を得たり。請ふ爾我儕の爲めに祈りて蛇をして我儕を離れしめよと。摩西、神に祈りければ。神、摩西に諭して曰く汝火蛇を造つて杆上に置き。凡てて嚙まれたる者をして之を觀せしめよと。摩西其の命に遵ひ銅を以て一の火蛇を造り。之を杆上に揚げて。凡べて嚙まれたる者をして仰き觀せしめければ。果して皆生くることを得たり。當時は尙銅器時代にして。其の用は恰も今日の鐵の如く。日常缺くべからざる者であつた。甲冑器具上は祭壇より下庖厨に至るまで。皆銅器を用ゐたる者である。去れば佛敎にて煩惱即菩提と云へる語は。我れに在つて嫉妬即愛と云はねばならぬ。

支那人は兩頭の蛇を見る者。は死すると信じて居つた。我が嫉妬の神「エホバ」は。曾て「エデン」樂苑上に在つて。善惡の蛇と化し。「アダム」をして常に好惡の衢に迷はしめ。之を生死の岐路に導きて。長く荊棘林を出ざらしむ「アブラハム」「イザク」「ヤコブ」の三代は。彼れが其の兩頭を收めたる時にして更に化して一條の赤綬子となり。突如として來り突如として去り。王者の珪は常に其の腰を離れず。其の蹲るや獅子の如く。其の走るや電の如く。羅籠すれども住まらず。呼喚すれども回らず。復た前日の遲緩焦躁なるに似ず。彼れは曾て亞拉比亞の野に伏して。爛泥裏に刺を藏するが如く。入つては「エリコ」城の偵者となり。敵をして魂魄地に着かざらしめ。出てゝは七匝七重して城垣自ら壞れ。時に「ソーロ」の宮殿に宿して。內外相應じ。其の入るや鬼門よりし。其の出るや窓よりす。

吾人戀愛小說を閲して。其の中に自ら二樣の別あるを見る。女の方より病ひをなすものと。男の方

より病ひをなすものと。此の二つである。余は其の何れが順なるか何れが逆なるかを知らず。然れども我が十卷書の中には。後者を以つて順とし。前者を以て逆として居る。女は必らず内にして幽靜。男は必らず外にして擾動。而して社會革命の動機が毎に此の内外主賓の間に。淺からぬ關係を有して居るのである。故に何れの人種も革命を好まぬ時代には必らず男尊女卑である。革命を促がすの時代には屹度女尊男卑である。不知不識の間に。女は革命の因たることを證して居る。

閑話暫らく舍く。彼れは時に陰性となり。時に陽性となり。洗禮と割禮とを幷び兼ね。順浸健伐彼れの戰術であつた。恰も觀音の三十三身を現じて。他と和敬を失はざるが如く。又淫婆神の乖諍能く其の破壞力を完うせしが如きものである。

◎魔王基督（二）

西方の或湖中に普陀落山と云ふ一島山がある。近江の竹生島のやうなるものならん。此の山極めて秀靈。地方の人が其の中に自ら淳約たる神女を想像して居る。即ち玉顏麗容の觀世音其れである。此の女神は和光同塵の術に最も巧みにして對機に順應して。能く興樂して居る。或は放蕩者となり遊女となり。時に學者となり乞兒となり。罪人ともなれば官吏ともなつて。到處濟度の方法に餘す所がない。彼れは人世の苦喚憂息〻一も聽き洩らす處なきを以つて。觀世音と名づけらるるのである。故に觀音經には慈眼視衆生福聚無量海と曰うてある。故鐵如意道人山縣玄淨師が。

◎此界圓通在耳根

と詠ぜられたのは。師の阿字觀に因つて見られた法身邊の事である。這れは是れ向上底。更に向下底の事を論ずれば。支那思想也。以色列教に最も長所がある。

却說此くの如き慈眼視衆生。福聚無量の觀世音なれども。其の本體を尋ぬれば破壞の神。淫婆神である。佛教にて大自在天と稱する意地の惡るき神は即ち此淫婆神の事にして。保存の神昆悉奴と相對して居る。善も不善も我も眞我も。一物あれば之を「バベル」の塔と見て。用捨もなく撞き毀はすのである。彼れは六慾天の中最も淫慾の甚しき妖婦烏摩妬と云へる者と苟合して魔女聖天を生んだと云へる程の者である。「蛇食ふと思へば怖はし雉子の聲」。之れが觀世音菩薩の本體であると聞ては。聊氣味が惡るい。而して淫婆神の物を毀はすのは。青面金剛や。夜叉明王。怒氣面に溢るゝと云ふ類ではなく。方に是れ娥眉の斧。笑中の刺〻人をして益々寒心せしむるのである。基督も亦斯くの如く。彼れが柔和謙遜なるにも似ず。其の「パリサイ」人。士師。學者等を評するに當て。皮肉を剖き骨髓を剜るやうな言語を發して居る。而して。同情に富んだる彼れは。不逞の徒あれば直に之を懷くる。不平の徒あれば忽ち之を柔らぐ。哀める者痛める者。誹らるゝ者。辱めらるゝ者。皆彼れに來つて慰めを享